
穢れを被いし王

hate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穢れを被いし王

【Nコード】

N9765I

【作者名】

h a t e

【あらすじ】

どこにでもいるような高校生の長谷川哲也は、どういうわけか異世界に召喚されて、3人の美少女に囲まれた。彼女達の王国に滅亡の危機が迫っており、それを救うには唯一『穢れを被う力を持つ』哲也が王となり、貴族の娘達の穢れを被うしかないという。その日から毎晩、大勢の美しい娘と肌を重ねるというハッピーライフが続く。

この幸せを少しでも国民にも分け与えようと、貴族の娘達をヌード鑑賞会や全裸デモ行進に参加させると、他国は

バカな王だと哲也を嘲笑う。だが、それは他国を油断させるための欺瞞だった。哲也は計略を用いて隣国の王女や貴族の娘達をハーレムに迎えた。彼女達があるとある事情から、常に全裸で過ごすようになると、哲也は彼女達を軍議や会議に参加させ、世界を揺るがす大いなる戦いを始めるのだった……。

登場人物などの紹介（前書き）

第3部時点での設定です。話が進むにつれて変更しますが、その分は反映されていません。なお、一部第4部以降の設定も含まれて居ます。

登場人物などの紹介

《登場人物紹介》

王族・大貴族

● ヴィア 大公、首相・・・内政の責任者

長い金髪を背中まで伸ばし碧い瞳をした、意志の強さを感じさせる少女。

● アンノ 大公、姫巫女・・・宗教の責任者

ブルネットの髪を肩まで伸ばし、エメラルドグリーンの瞳をした柔らかな表情をした少女。

● ディア 大公、大將軍・・・軍隊の責任者

短いグレーの髪をした、キツイ性格を思わせる少女。

● エゼルイブ・・・ウェセックス王女 アルフレッドとエアルフスウィスの娘 腰までの金髪でグレーの瞳

● エゼルレッド・・・ウェセックス王国の公爵

● アドジンダ・・・レオン王女 アルフォンソ3世とヒメノの娘
胸までの金髪で緑の瞳、胸は標準より大きい。

メイド

● シエスタ・・・ゼロ魔のシエスタ似の少女

● メイド長・・・50代の女

貴族の女

● ?・・・ゼロ魔のカトレア似の女

● セレナ・・・某女優似の女、流れるようなさらさらの金髪、胸は小さい

その他

●デイナー・・・ハーフェルフの傭兵

《国家》

●人間の国（左：現代の国・・・右：この作品における国名）

フランス・・・ジパング王国

イタリア（南部以外）・・・サウスフランク王国

ドイツ・・・イーストフランク王国

ポーランド・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

ベラルーシ・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

ルーマニア・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

イギリス・・・ウェセックス王国、オークニー、マレー、アル

バ（スコットランド）、ストラスクライド、デーンロウ、ウエール

ズなど10の国

スペイン・・・ナヴァラ王国、レオン王国、アルゴン王国、コ
ルドヴァ帝国など様々な国

●エルフの国・・・世界の富の過半を握る。ジパングの3倍から5
倍以上の国土、5倍から10倍以上の人口を擁する大国。肥沃な穀
倉地帯を抱えて、食料事情は安定して大いに栄えている。

ハイエルマ帝国・・・ジパングの東南東・・・現代のギリシャやトルコ
東エルマ王国・・・ハイエルマの東・・・現代のトルコより東の
地域

西エルマ王国・・・ハイエルマの南・・・現代のエジプトやリビア

●ダークエルフの国・・・エルフの3国と対立し、衝突を繰り返し
ている

？帝国・・・西エルマの南・・・北の沿岸部を除く現代のアフリカ
の全域

● 獣人の国

タウラス・．．．．．ケンタウロスの国・．．現代のウクライナ
の中央

ウエストタウラス・．．．ケンタウロスの国・．．現代のウクライナ
の西

イーストタウラス・．．．ケンタウロスの国・．．現代のウクライナ
の東

?・．．．．．ワーウルフの国・．．．現代のロシア西部

第1話　なんと、異世界に来ちゃったよ

長谷川哲也は、昨日までは関東地方の某県立高校に通う高校生だった。本人は自分のことを人並み外れて優れた男だと思っていただが、周りの評価はそれほどでも無かった。そのせいなのか別に理由があるせいなのかはわからないが、彼はこれまで彼女いない歴を更新し続けていた。バレンタインデーでは、チョコをたくさん貰う友人を仲間と一緒に妬み、高校生カップルを見ては羨ましいと思う毎日が続いていた。

そのせいなのだろうか。彼が気付いた時には、彼の周りには3人の美少女がいた。一人は長い金髪を背中まで伸ばし碧い瞳をした、意志の強さを感じさせる少女。一人はブルネットの髪を肩まで伸ばし、エメラルドグリーンの瞳をした柔らかな表情をした少女。最後の一人は短いグレーの髪をした、キツイ性格を思わせる少女だった。

「初めまして、ようこそいらっしやいました。私はこの国の首相をしております、ヴィアというものです。以後、お見知りおきを」

最初に、碧い瞳をした少女が自己紹介と簡単な事情の説明を始めた。それによると、哲也はブルネットの少女アンノによって異世界であるこの世界に召喚されたのだという。

「お、おい待てよ。勝手に呼び出すなんて、酷いじゃないか。早くもとの世界に戻してくれよ」

哲也は怒って言うが、アンノという少女が申し訳なさそうな顔をして謝る。

「申し訳ありませんが、召喚は出来ても戻す方法を我々は知らないのです。そのお詫びになるかどうかわかりませんが、ここにいる間は豊かな生活をお約束します」

だが、これを聞いた哲也が納得するわけがない。

「冗談じゃない。いいから、早く元の世界に返してくれよ。今すぐに！」

哲也は立ち上がって怒るが、ヴィアは頭を下げて話を続ける。

「それに、今帰られては困るのです。あなた様には我らが王となっていただき、我らを救っていただきたいのです。どうか、われらの願いを聞いてください」

ヴィアがあまりにも熱心に頼んだからか、それとも彼女が美しいからなのか、はたまた他の理由からなのか、結局哲也は彼女達の話だけは聞くことにした。

「まあいい。願いつてなんだ？聞くだけなら聞いてやるが」

哲也がそう言うと、3人の美少女は笑顔を浮かべる。

「実は、先代の王が亡くなってから5年経ちますが、穢れを祓える者が王だけだったので非常に困っているのです。そこであなた様には、穢れを祓っていただきたいのです」

そこまで聞いて、哲也は質問を投げかける。

「穢れを祓うって、一体どうやるんだ？それに、俺にそんなことが

出来るのか？穢れを祓えなくて、何が困るんだ？」

哲也の質問には、ヴィアが答えた。

「お答えするには、少々長い話をしなければなりません」

ヴィアによると、穢れを祓うこと自体は特別な手順は必要なくて、成人の儀で少女に破瓜の血を流させるだけでいいという。だが、普通の者が行えば穢れが祓えなくて、本人やその家族、ひいては国家までに害が及ぶというのだ。ところが先代の王は異世界出身で、彼が成人の儀を行うことによって穢れを祓うことが出来たのだという。

「なるほどな。そういうことか。しかし、なんというおいしい設定なんだ。でも、簡単に信じていいもんな」

哲也は、更に突っ込んで質問を繰り返した。それによってわかったのは、15歳以上の少女が成人の儀を行うこと。成人の儀において、貴族の娘は貴族以外の娘よりも極めて強く穢れること。完全に穢れを祓うには成人の儀を何回か行う必要がある、先代の王は10回行っていたこと。成人の儀を待つ貴族の娘は50人を超えること。順番待ちをしている娘のうち、年長の者は20歳を超えること。彼女達は成人の儀を行えないので、結婚できずに非常に困っていることなどだ。

「このままでは、貴族の血が絶えてしまいます。ですから哲也様にはなんとか王になっていただき、貴族の娘達の穢れを祓っていただきたいのです」

今度はグレーの髪をした少女、ディアが頭を下げる。

「そこまで言うなら考えてもいいが、一度その娘達を見てみたい。いいかな？」

哲也は、内心ではラッキーと思い始めていたのだが、貴族の娘が豚や牛みたいでないと限らない。やはり、その点はしっかり確認する必要があると哲也は思うに至ったのだ。だが、彼の心のうちまではミリア達に分かるはずが無い。

「まあ、王になることを考えてくださるんですね」

ヴィア達は、自分達の願いがかなうかもしれないと単純に喜ぶのだった。

翌朝、哲也は貴族の娘と共に目を覚ました。貴族の娘が可愛い娘ばかりであることを確認した哲也は、早速一人の娘と成人の儀を行ったからだ。

「王様、昨夜はありがとうございました」

一人前の女になったばかりの娘は、頬を染めながら言う。彼女の頬が赤いのは、昨夜哲也と肌を重ねたからなのか、それとも現在素っ裸で寝ているせいなのか、はたまた別の理由なのかはわからない。

「なあに、いいさ。昨日のお前は可愛かったよ」

哲也は、お前の身体を十分堪能させてもらったしなと、心の中で続

ける。

「でも、話には聞いていましたが本当に驚きました。男と女的身體って、合わさって本当に一つになるんですね。あと9回も王様と一つになれるなんて、とっても待ち遠しくて楽しみです」

彼女の言葉を聞いた哲也は、これからハッピーライフが続くのかなど、期待に胸を膨らませるのだった。

第2話　なんと、豪勢な食事だよ

哲也は、一夜を共にした娘を部屋に残し、メイドに案内された食堂で朝食を摂っていた。ヴィア、アンノ、そしてディアも一緒である。

「へえ、結構豪勢だな」

哲也は、ご機嫌である。哲也のために用意された朝食は、ホテルのヴァイキング並みに豪勢に見えたからだ。

「パンでもご飯でも、好きなものを召し上がってください」

ヴィアは、和洋中の料理がありますからと、哲也に食事を勧める。哲也は、どちらかというと朝はパン食派だったので、ロールパンに適当なものを挟んで食べる。どうやら、異世界とはいつでも食材は変わらないらしい。ジュースも各種あったので、りんごジュースとパインジュースを選ぶ。

「ふうん、なかなかおいしいな。いつもこんな食事なのか？」

哲也が尋ねると、アンノが頷く。

「ええ、そうです。ですが、お好みに合わせていかようなものでも用意しますから。王様には、十分栄養を摂っていただきたいので」

哲也は何か引つかかるものを感じたが、あえて無視した。

「へえ、そりゃいいや。昼食や夕食も好きなものが食えるのか？」

哲也の質問に、ヴィアは当然ですと答える。衣食住のうち、最も重要な食については不自由しないですみそうだ。住むところは、今哲也がいる建物だと既に聞いている。衣服についても問題が無さそうだと哲也が安心してしていると、アンノが聞きたいことがあると切り出してきた。

「1週間ほどは、ここでゆっくりとお寛ぎください。それからこの世界のことにについて、少しずつご説明いたします。つきましては、王様のお世話をするメイドを選びたいのですが、こちらにお任せでよろしいですか？もちろん、後でいくらでも変更はいたしますが」

哲也は首を横に振ろうとして、思いとどまった。出来ればメイドは自分で選びたいが、相手の選択を確認してからでも遅くはないかもしれないと思い直したからだ。

「詳しいことを聞いてから判断したい。どういう意図でこういうメイドを選ぶつもりなのか、詳しく教えてくれないか？」

哲也が聞くと、アンノはわかりやすく教えてくれた。それによると、人数は20人程度。全て若くて美しい娘で構成されるという。彼女達は、哲也の身の回りのことは全てやってくれるという。一緒にお風呂に入って、背中も流してくれるというのだ。だが、一つだけ禁止されることがあるという。

「申し訳ありませんが、しばらくはメイドと一緒に寝ることはご遠慮していただきたいのですが」

アンノの言葉を聞いて、哲也は思わずメイドとエッチなプレイをする場面を妄想してしまった。

「遠慮するのは、最初だけなのか？」

哲也が尋ねると、アンノは少し顔を赤くする。

「はい。できましたら、私達よりも後にしていただけたらなあと」

そう。要は、貴族の娘と先にエッチしてほしいということらしい。ヴィア達も貴族の娘には違いないので、いずれは哲也とエッチをすることになるのだ。メイドはその後でということらしい。

「じゃあ、気に入ったメイドとは、成人の儀とやらをしてもいいんだな」

哲也が確認のために口にすると、なぜかアンノは首を横に振る。

「いえ、それでは困ります。メイドは皆、成人の儀を期待していますので。歴代の王様の多くは、メイドに少なからず子供を産ませています。出来ましたら、メイド全員に子種を授けてください。もちろん、私達の方が先にいたきたいのですが」

2人は産みたいと言うアンノに、哲也は苦笑する。どうやら本気らしいので、恐ろしくてツツコミも出来ない。

「それじゃあ、メイドに年配の女性を入れよう。若い娘だけというのも、なんだか落ち着かないような気もするからな」

哲也は、ベテランのメイドにメイドの統括を頼めば、厄介ことも起きないだろうと期待する。だが、そこでディアが気になることを言う。

「なんと素晴らしい王だ。人妻にも種付けしてくださるとは」

それを聞いて、哲也は思わず吹きそうになった。自分の常識とこの世界の常識とでは、部分的に大きな乖離があることにも気付かされた。

「いや、俺がいた世界では、人妻には手を付けないんだが」

哲也が誤解を解こうとしたのだが、あっさりと否定されてしまった。

「これまでの王様は、最初のうちこそ若い娘を相手にしていました。が、後になると人妻を相手にすることの方が多かったようです。特に貴族ですと、子供がなかなか出来ない夫婦から頼まれて種付けすることも多かったと聞きます。跡取り息子が生まれない場合は、娘を適当な貴族と結婚させたうえで、王様に種付けしてもらうケースも多かったようですね」

ヴィアは、際どいことを平気な顔をして言う。だが、哲也は少なくとも今のところは、人妻を相手にする気は全く無かった。

「メイドの半分は既婚者とするが、俺は既婚者相手の種付けは一切しないから周知しておくように」

哲也が強い調子で言うと、ヴィア達はかなり驚いた顔をした。哲也は、これまでの王様はいつたという奴だったんだと頭を抱えたくなった。

第3話　なんと、大きな住まいだよ

哲也は、朝食の後はとりあえず建物の中を案内してもらうつことにした。

「この建物は、地下1階・地上3階建てになっています。建物の形は、上から見ると長方形になっています。それでは、上の階からご案内します」

そう言つて、首相のヴィアが先頭に立つて案内役を務めることになった。

最初に連れられたのは屋上だった。そこには庭園が広がっており、僅かな低木がある以外は色とりどりの花が咲き乱れていた。もちろんそれだけでなく、眺めも良かった。どうやら建物は高台にあるらしく、町並みや海の景色が一望できた。哲也は、ここで景色を眺めるのもいいかなと内心思った。

3階は、書斎と応接室に寝室、それにたくさんの客間があった。

「客間には、王様の気に入った女性に泊まっていただきます。もちろん、王様はこの部屋で寝るのも自由です。私専用の部屋もありますので、時折来ていただけると嬉しいのですが。」

ヴィアは、お声がかかれば必ず泊まりに来ますからと言って微笑む。

2階は、半分はメイド達の部屋で占められていた。残る半分は空き

部屋で、哲也が自由に使つていいとのことだった。

「王様、あちらをご覧ください。良い景色ですよ」

ディアに勧められて窓の外を見ると、そこはさながらヌーディスト村のようだった。すっぽんぽんの女たちが芝生の上に何かを敷いて、その上で寝そべったりしているのが見えた。

「なっ、あれは一体なんだ？」

哲也が目大きく見開きながら聞くと、裸婦画を描いているのだという。ディアが指し示す方向を見ると、確かに絵を描いている裸女も大勢いた。確かにいい眺めだなと、哲也はここに毎日来ることを楽しみにすることにした。

1階は、大広間に中広間、食堂、それに大風呂があった。後は小部屋と倉庫だという。

「あれ？ここって女風呂は無いんだ？」

風呂は何故か、男風呂と王専用風呂しかないらしい。哲也が不思議に思つて呟くと、アンノが真っ赤になつて答えた。

「女達は王様と一緒にの風呂に入りますので、女風呂は必要無いんですよ」

それを聞いた哲也は、思いつきり鼻の下を伸ばすのだった。

地下は、食料庫や倉庫が半分を占めていて、残りは空き部屋だった。

「ここは、万一の時のためのお部屋です。ここならば、1 か月は隠れていられます」

ヴィアはそう言っ胸を張るが、こんなところに1 か月もいるなんて勘弁して欲しいと哲也は思った。

「さて、これでざっと案内は終わりました。何かご要望がありましたら、何なりとお申し付けください。可能な限りお応えします」

案内を終えたヴィアは、哲也に何か要望は無いかと聞くが、いきなり聞かれても答えようが無い。哲也にしてみれば、とりあえず寝る場所があつて食べるものに困らなければいいからだ。落ち着いてくれば何か頼むかもしれないが、今のところは必要無かった。

「まあ、今のところは特に無い。何かあつたら言つから、それまで待つてくれ。それよりもだ。俺としては聞いておきたいことが山ほどあるんだけどな」

哲也は、建物の中を案内されながら疑問に思つたことを、一気に聞くことにした。

第4話 なんと、情熱的なディープリキスだよ

哲也は、ヴィア達と一緒にお風呂に入っていた。背中からディアに抱かれ、正面からアンノと抱き合い、アンノを後ろから抱きしめるヴィアの胸をモミモミするという体勢でだ。お風呂に入ることこのような体勢でいることはディアから提案されたことで、哲也にとってはもう極楽である。

「それで、お聞きしたいことはなんでしょう？」

ヴィアは緊張した顔で聞く。だが、胸をもまれているからなのか、それ以外の理由からなのかはわからない。

「そうだな。俺が知りたいことは山ほどある。だからまず知りたいのは、どうすれば俺の知りたいことを調べることが出来るのか聞きたい。そうだな、例えば図書館があればその場所を知りたい」

すると、ヴィアは意外な返事をした。

「図書館もありますが、何か調べるのでしたらインターネットの方がよろしいかと。端末なら1日あればご用意できますが、いかがいたしますか？」

これには哲也も驚いた。てっきり、中世並みの科学レベルの世界に来たと思ったからだ。

「へえっ、結構科学が進んでいるんだな」

哲也が感心して言うと、歴代の王が尽力した結果だとアンノがいう。

「何代か前の王は、この世界の科学レベルは王のいた世界の中世並だとおっしゃっていました。また、先代の王のお言葉では、この国だけは王のいらっしゃった世界よりも数年から50年遅れている程度だということです」

アンノの言葉に、哲也は再び驚く。アンノの言うことが正しければ、数人の王によって科学の進歩がさまざまの勢いで行われたことになる。遅れている分野でも1950年代の科学力というのであれば、哲也にとってもそう暮らしにくい世界ではなさそうだ。

「もしかして、パソコンなんてあったりするのか？」

哲也が期待を込めて聞くと、ヴィアはあると答える。しかもOSはWindows 2000だという。ただし、パソコン自体の性能はあまり高くないようだし、利用者もそう多くないという。

「1家に1台という状況にはほど遠いです。会社でも、1人1台はありません」

だが、これから急速に普及するでしょうとヴィアは言う。哲也がこの世界にやって来た時に持っていたノートパソコンのコピーを、急ピッチで大量生産するからだという。そこまで聞くと、哲也は本題に入ることにした。

「では次に聞きたいことだが、俺は何を求められているんだ。正直に言っただけいいんだが」

哲也が真剣に聞くと、今度はディアが口を開く。

「王様には、我が国を滅亡から救っていただきたいのです。このままですと、我が国は近隣諸国に侵略されて滅んでしまう運命なのです。このことは、王様がもう少しこの世界に馴染んでから言うつもりでしたが、王様の要望とあっては話さないわけにはいかないでしょう」

哲也が更に詳しく聞くと、原因は憲法だという。何代か前の王が憲法に戦争放棄を加えたところ、近隣諸国から侵略され続け、国土の3割を失ってしまったという。ところが人口は増え続けているので、このままのペースで領土減と人口増が続くと10年しないうちに餓死者が出る計算だそう。そして20年後には、国が滅んでしまうという。

「王様は、召喚されたその日に私達に協力してくれた優しい方です。ですから、私達に助けてくださると信じていますお願いします。何でもしますから、私達を助けてください」

アンノはそう言って、哲也の口に舌を入れて来た。哲也は最初は驚いていたが、すぐに応じてアンノの口に自分の舌を入れる。そうして、いつしか2人は情熱的なディープキスを交わすようになった。

第5話　なんと、メイド持ちになったよ

ヴィアが語るところによると、王国はかなり危機的な状況だった。

元々は、近隣諸国をまとめる大王国があったのだが、それが3つに分かれ、西側部分が現在の王国になっているという。東の王国は、現在は強大な帝国に成長し、虎視眈々とこの王国の侵入を狙っているという。ただ、元は同じ国だったこともあって、今は侵攻をためらっているらしい。南東の王国には勢力の大きい2名の領主がいて、彼らによって少しずつ領土が削られているという。

海を隔てた北方にも攻撃的な国があり、北方の領土の一部を占領されている。西側は2つの国と国境を接しており、いずれの国からも攻められて領土を削られている。しかも、王国内の領主や貴族は隙あらば他国と結んだり独立しようと企む者も多いうえ、国土の過半を彼らが支配しているため、なかなか王国が発展してこなかったというのだ。

「でも、王様が協力していただいたおかげで、領主達の離反は防げそうです」

ヴィアによると、穢れ払いの能力は貴重なので、叛乱を考えているであろう領主達も思いとどまってくれそうだという。

「ですから申し訳ないのですが、成人の儀をたくさんこなしていただきたいのです」

アンノも、胸を強く押し付けながら頼んできた。

「戦争する許可をいただけると、もつといいんですけどね」

ディアは、専守防衛を貫くばかりではジリ貧だと嘆く。

「うーん、戦争ねえ。それはもう少し考えさせて欲しいなあ」

哲也は、彼女達がどれだけ本当のことを言っているのか分からないので、結論は先延ばしにすることにした。今はわからないことだからであるし、今日明日中に国が滅びるわけではなさそうだからだ。

風呂から上がった哲也は、ヴィア達と一緒に昼食を摂ることになった。哲也があまり豪華な食事にしないように頼んだこともあって、ほどほどの料理が食卓に並んだ。そこで食べながら、哲也はヴィアに質問を連発する。そうして、この国の面積や人口、その他諸々の情報を次々と聞き出していく。

それが一段落すると、哲也は今後この国をどうしたいのか、資料をまとめて詳しい提案書を作るようにと彼女達に頼んだ。その頃には、もう食事は終わってコーヒータイムになっていた。

「バカでもわかるように、わかりやすく丁寧に作ってくれよ」

哲也の頼みに、彼女達は努力すると答える。だが、少々顔が引きつっているようだ。するとそこに、メイド服を来た一団が現れた。

「王様、ただいまメイドの志願者を連れてまいりました。この中から、気に入った者をお選びください」

一番年配のメイドが、そう言いながらお辞儀をする。すると、他のメイドもそれに倣う。

「まあいいや。みんな、顔を上げてくれ」

哲也が頼むと、みな顔を上げた。すると、メイドとしてのスキルが高い者を連れてくるようにと頼んだにもかかわらず、思った以上に可愛い娘が多かった。

「おい、お前。今日から名前をシエスタに変えろ。それから副メイド長になれ」

哲也は、とあるアニメのキャラに良く似た少女を若手メイドの代表に選んで、呼びやすいように名前まで変えてしまう。それから好みの女の子を数人選ぶと、今日はこれだけにすると言う。最初のメイドは10人に見えず、徐々に増やしていくことにしたからだ。メイドは哲也が選んだ10代の少女が5人で、50代のメイド長が1人、30代のメイドが2人という構成になった。

「ようし、シエスタ。これから毎日胸をマッサージして、大きくしてやるからな。まあ、覚悟しておけ」

哲也がからかってそう言うと、シエスタは真っ赤になって俯くのだった。

第6話　なんと、子種が欲しいと言われたよ

夕食の時間になると、見慣れない女が食卓に着いた。長いストレートの金髪にグレーの瞳で、胸が程よく大きい20代前半に見える女だ。この女は、昨日の女ほどではないが哲也好みの整った顔立ちで、可愛いというより綺麗な部類に入る女だろう。

「王様。彼女は、今夜成人の儀のお相手を務める者です」

ヴィアの紹介に合わせて、女は会釈をする。哲也は、今夜は程よく胸が大きいこの女とヤルことが出来るのかと思い、思わず笑みがこぼれたうえに身体の一部が元気になる。だがその時、ふと疑問に思ったことを口に出す。

「もしかして、ここってビデオムービーなんてものあるかな？」

「ええ、ありますが何か？」

哲也の質問に、ヴィアはあると言う。ただし、哲也の世界にあったものと比べると、性能はかなり落ちるらしい。だがそれでもいいかと思い、哲也は女に質問する。

「成人の儀の様子をビデオに撮りたいんだが、ウンと言ってくれないか？」

「ええ、喜んで」

哲也の頼みに、女はにっこり笑って即答する。女が内心何を考えて

いるのかは分からないが、とにかく了解を得られたので哲也はしめしめと思う。女達とのエッチの記録は、後で何か役に立つかもしれないと思ったからだ。少なくとも、他の女に見せて勉強させるくらいには役には立つだろう。それに、この分ならヌード写真も余裕でOKをもらえそうだ。それをどう活用出来るかまだわからないが、後でゆっくり考えればいいだろうと哲也は思う。

「では、急いで手配をさせましょう」

ヴィアは、成人の儀に間に合うようにと部下を呼んで超特急で用意をさせた。

翌朝、女は頬を赤く染めながら哲也の耳元で囁いた。

「王様、私の穢れを抜っていただきありがとうございました。このご恩は一生忘れません。私は王様のことを一生愛し続けるでしょう。私は身も心も王様のものです。どうかそのことを、決して忘れないでください」

綺麗な女にそこまで言われて、哲也が嬉しくないはずがない。哲也は女に返事の代わりにディープリキスを返した。

朝食の時間になると、ヴィアだけが待っていた。聞けば、今日からは日曜日を除いてヴィア、アンノ、ディアが1日交代で哲也の案内役を務めるといふ。月木がヴィア、火金がアンノ、水土がディアという具合である。

「そついや、お前達は国の首脳だったつて。よくまあ、お前達みたいな若い女が国を運営出来るよな」

哲也は半信半疑で聞くが、ヴィアはにっこり笑って大貴族ですからと答える。

「私達は3人とも、大公なのです。爵位には、上から大公、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵があります。このうち大公と公爵は、過去の王となんらかの血縁関係があるのです。ですから他の貴族に対しての影響力もかなり強いので、それが政治力にそのまま反映されるのです。それに加えて優秀な部下も大勢いますので、私達は重要な政策を決定するだけで政治は上手く回るのです。私が必要とされるのは、華やかな公式行事が多いですね」

そんなヴィアの説明に、哲也はすんなり納得する。要は必要な指示をして、後は部下に丸投げということらしい。泥臭い仕事は全て部下がやっているのだらう。それならば、哲也と一緒に過ごせる時間が多いことも理解できる。

「しかし、なんで3人共若い女なんだ？お前達の両親は何もしていないのか」

哲也が疑問を口に出すと、ヴィアは苦笑する。

「はあつ。まだわかっていただけないようですね。王様は若い女と

おばさん、どちらが好きですか？」

「若い女に決まっているだろう」

ヴィアの質問に、哲也は即答する。

「そうでしょうね。私達の両親もそう思ったからこそ、私達に当主の座を譲ったのです。なにせ私達は、王様の子種をどうしても頂きたいのですから」

ヴィアは、出来れば3人分頂きたいのですがと舌を出しながら言う。だが、哲也はそう言われてもピンとこない。

「うーん、そう言われても理解出来ないなあ」

「まあ、じきにわかりますよ」

首を捻る哲也に、ヴィアはそれ以上話そうとはしなかった。そこで哲也は別の話題を振ってみた。それもヴィアではなくてメイドに対してだ。

「ねえ、シエスタ。君は戦争をした方がいいと思うかい？」

哲也が優しく聞くと、シエスタと名を変えたメイドは頷いた。

「私の両親は、以前は北方に住んでいたそうです。ですが家族や友人の多くを殺されて、命からがら逃げ延びて来たそうです。私は両親に、いつか故郷の土を踏ませてあげたいと思います。そうするために戦争以外に方法が無いのであれば、私は戦争に賛成します」

シエスタは、何か縋るような目つきで哲也を見る。

「そうか、そんな人もいるのか……」

哲也は、聞くんじゃないかと後悔した。

第7話　なんと、この世界にはエルフがいたよ

朝食の後、哲也はヴィアにこの国の危機的状況について詳しく話を聞いてみた。この国が滅ぶのは時間の問題だと言われても、あまりぴんと来なかったからだ。

「端的に言いますと、防衛に徹しているのが原因です。堅固な城壁や防壁を造るのに、莫大な費用がかかるのです。それはもう、国が傾くくらいの費用が」

ヴィアが言うには、国家財政の7割以上が防衛費に使われているという。いくら技術が進んで生産性が高くなったとはいえ、それ以上に異常とも言える多額の支出をしていては、財政状況は悪化し国力は低下するのみであるというのだ。

「なるほどな。そう言われると、納得出来るな」

哲也は、その話を聞いて少し心が動いた。攻撃は最大の防御とも言っし、敵を全く攻撃しないというのは、あまり良くないと思えたのだ。とはいえ、戦争以外の方法があればそれに越したことは無い。哲也は、友好国と効果的な同盟を結ぶことによって、他国の侵略を思いとどまらせることが出来るのではないかと考えた。そこで、近隣に友好国は無いのか聞いてみたが、返事はあまり良くなかった。

「その方法も検討したのですが、声をかけた他国からは全て同盟を断られてしまいました。戦争放棄などという、ふざけた決まりを持つ国は相手にしないとされたのです」

ヴィアは、遠い目をする。これには哲也も苦笑するしかない。現代

であればいざしらず、戦争の火種があちこちに転がっている状況で戦争放棄を憲法に規定するなど、普通に考えれば正気の沙汰ではない。現代日本のような国際情勢であればいざ知らず、この世界で戦争放棄を貫くのは色々な意味で難しいように思えてきたのだ。

「まあ、それでもいいよ。無駄になってもいいから、外交による解決を目指そうよ。やっぱり、俺は戦争が好きじゃないからなあ」

哲也の言葉に、ヴィアはため息をついた。やはり今度の国王も、戦争が嫌なのかと。

「はあ、分かりました。それでは、ざっと国際情勢をご説明します」

ヴィアはそう言って、世界地図を広げながら世界情勢について語り始めた。ここで初めて哲也は、この世界が地球と同じ地形であることや、国の名前がジパングであることを知った。

ヴィアは最初に、この世界で最も影響力がある種族、エルフの国について説明を始めた。東南東の方向にハイエルマという国があり、それが事実上世界の盟主国であること。ハイエルマの東に東エルマ、南に西エルマという国があり、ハイエルマを加えた3国で世界の富の過半を握っているという。世界地図では、ハイエルマはギリシャやトルコ、東エルマはトルコより東の地域、西エルマはエジプトやリビアの位置にあった。

「ふうん、それがエルフの国なんだな」

「はい。これら3国は、それぞれが我が国の3倍から5倍以上の国土と、ざっと5倍から10倍以上の人口を擁する大国です。それぞれの国が肥沃な穀倉地帯を抱えていますので、食料事情は安定して

大いに栄えています。かの国は争いを好みませんが、国力があまりにも違うため、我々の味方をする事による利益は無いようです。実際に、同盟の申し出を何度も断られています」

次は、エルフと対立しているダークエルフの国についての説明だ。ダークエルフは、西エルマの南に勢力を築いており、エルフの3国と対立し、衝突を繰り返しているという。ダークエルフの勢力圏は、北の沿岸部を除くアフリカの全域だった。

「ダークエルフは味方に出来ないな。むしろ、敵になるか」

「ええ、そうです。彼らと結んだら、エルフを敵に回すことになりますから」

その次は、獣人の国についての説明だ。東方では、ケンタウロスがタウラス、ウエストタウラス、イーストタウラスの3国を建国しており、その北ではワーウルフの勢力圏となっているという。ケンタウロスの国はウクライナ、ワーウルフの勢力圏はロシアと概ね同じエリアである。更に東方や北方のことは分からないようだ。

「獣人啊。彼らは味方してくれるかなあ？」

「有り得ませんね。彼らの国では、人間は奴隷ですからね。人間に好意的なエルフの国でも、奴隷の多くは人間ですし」

ヴィアは、見もふたも無いことをさらっと言う。

最後は人間の国についての説明だ。

ポーランドやベラルーシからルーマニアの辺りは、8つほど国があ

る。それらは大抵、ハイエルマや隣国イーストフランクの属国だという。

イタリア南部はハイエルマの領土で、残りはサウスフランクの領土になっている。イーストフランクやサウスフランクは、元は同じ国だったのだが、現在は非友好的であり、外交交渉の成果があがるとは思えないという。

イギリスは、10程度の国に分かれて紛争が続いているという。そのうちの1国が、国土の一部を占領しているという。これらの国は、敵の敵は味方という理屈が通らず、交渉は無駄だろうという。

スペインは、大小様々な国に分かれている。いずれも我が国に非友好的であり、交渉は難しいという。

「なんだよ、全部駄目かよ。でもいいや。駄目でもいいから一度交渉してみよう」

「いや、それはやめていただきたい。有能な外交官が、奴隷として売り払われるだけですから。まあ、幸せな家庭を地獄の底に陥れるのが目的でしたら、効果的な方法と言えますが」

「いや、そこまで言うならいい」

哲也は、自分の言葉一つで他人の人生が大きく変わるのだということとを、ここで初めて理解した。そして、平和な国の常識がここでは全く通じないということに、ようやく気付いたのだった。

「外交は無駄だということを、ようやく理解されましたか。では、戦争について前向きに考えていただきたい」

ヴィアの頼みに、哲也は首を横に振る。

「いや、俺は外交が無駄だとは思わない。だが、確かに現状では成果があがりそうにないこともわかる。そこでちょっと聞きたいんだが、この世界に傭兵というのはいるのか？」

哲也の問いに、ヴィアはいると答える。

「傭兵は、どの国にもいます。その多くは、ハーフエルフですが」

この答えには、哲也も興味を持った。

「どうしてハーフエルフが多いんだ。何か理由があるのか？」

哲也の質問に、ヴィアは苦笑する。

「エルフの国では、裕福なエルフは人間の侍従や侍女を雇うのですが、侍女は決まって旅のエルフと恋をして、ハーフエルフを産むのです。ですから、毎年大勢のハーフエルフが生まれますが、その多くは奴隷として売りに出されます。一部の女は娼婦になります。殆どは傭兵団に引き取られて、傭兵となるのです」

ヴィアの答えに、思わず笑ってしまう哲也だった。侍女が旅のエルフの子を決まって産むはずが無く、主人のお手つきになるということが真実であろうことがわかったからだ。要は、人間に友好的というのは表面的なもので、実際は奴隷としてしか見ていないということがこの話からも伺えた。

「ハーフエルフか。雇えなくはないだろうが、味方にするにはリス

クが高いな」

哲也が考えていたのは、人間の傭兵を使って敵と戦わせることだった。しかし、ハーフェルフの傭兵が主流というならば、人間の傭兵団は少ないかあまり強くないのだろう。傭兵が戦うから戦争ではないという詭弁を使うという思いつきは、残念ながらもろくも崩れ去った。

だが、この時の哲也の呟きは、ヴィアにかすかな希望を持たせることになった。ここ数代の、純粹に争い自体を嫌う国王とは違うということがわかったからだ。

ちなみに、この国の名ジパングは、何代か前の国王がウエストフランクから変えたそうだ。このジパングが今後どうなるのか、それは、哲也次第で大きく変わるのだ。哲也は、自らの責任の重さに思わず身震いした。

第8話　なんと、女を泣かせてしまったよ

もうすぐ昼食という段になって、ヴィアは誰と食べますかと聞いてきた。

「そうだなあ。最初の晩に一緒に寝た女がいたよな。あの娘とお前と、それからシエスタと一緒に食べるか。これから特に俺が何も言わないかぎり、そういうことにしよう」

哲也は、最初の晩に穢れを被った娘を思い出した。哲也にとって初めての女であることもあって、かなり印象深い。哲也は彼女の名前を聞いていなかったたので、彼女を心の中でカトレアと呼ぶことにした。心の中に限定したのは、彼女は貴族なので、シエスタと違って勝手に名前を変えられないだろうと思ったからだ。

「かしこまりました」

ヴィアは懷から何か取り出すと、何か端末らしものをいじった。すると5分も経たずにカトレアがやって来た。

「王様のお呼びと聞いて、急いで参りました」

哲也は、急いで来たと言うわりには、カトレアが化粧をきちんとしていることに気が付いた。そのことから考えると、おそらくカトレアは声がかかるのをじっと待っていたのだらう。その証拠に、カトレアの顔は明るい笑みで溢れていた。

「なんだ、お前。声がかかるのを待っていたのか？」

哲也が聞くと、女は素直に頷く。

「はい。昨日は声がかかりませんでしたので、今日こそは声がかかるのではないかと祈っております」

そう言つて顔を赤くするカトレアに、哲也は少し萌えた。だが、同時に意地悪なことを言いたくなってしまった。

「そうかそうか。最初の晩のことを、そんなに言いたかったのか。いいだろう。感じたことを洗いざらいしゃべってもらおうか」

哲也がにやにやしながら言うと、カトレアの顔は更にトマトのように赤くなる。

「あの、王様。そういうことは、二人きりの時がよろしいのではないでしょうか」

カトレアはやんわり断ろうとするが、哲也は面白がつて話を強制する。

「いや、そんなことはないさ。この2人も、是非知りたいってさ」

哲也が逃げ道を塞ぐと、カトレアの顔がはつきりと引きつった。そんなカトレアに、とりあえずディープキスをかます哲也であった。

下ネタでさんざん盛り上がった昼食の後は、風呂に入ることにした。もちろん、昼食と同じメンバーでだ。哲也は彼女達にすっかり身体を洗ってもらった後、前にカトレアで後ろにヴィアという態勢で湯船に入る。ちなみにシエスタは横に座っている。

「ようし、洗ってもらったお礼にマッサージしてあげよう。こつすれば、胸が大きくなるかもな」

哲也はそう言うなり、カトレアの胸を揉みしだく。ほどほどに弾力があって、とても揉みやすい胸だった。

「恐れ多いです、王様。でも、とても嬉しいです」

カトレアは、本心からかどうか分からないが、哲也に礼を言う。

「そうそう、さっきは君の好きな話しか出来なかったから、これからは俺の好きな話をさせてもらおうよ。それでいいかな？」

哲也の問いにカトレアは苦笑するが、残念ながら哲也からはその表情は伺えない。

「ええ、なんなりと」

カトレアは、一呼吸置いてから承諾する。彼女の承諾を得た哲也は、カトレアの生まれ育った地についての話をするよう求めた。この国についての情報を、少しでも得たかったからだ。

「本当になんでもいいから、話してごらん」

哲也に促されると、カトレアは自分の故郷について嬉しそうに語っ

た。この国の南の地方で生まれ育ったこと、緑に囲まれた土地であること、夏は近くの湖で泳いだこと、冬でも雪が降らないので外で遊んだこと、春と秋には豊作を祈る祭りが行われること、そんなとりとめのないことをずっと話すのだった。

だが、彼女はあまり家族の話をしなかった。そこで哲也は家族について聞いたのだが、返ってきたのは嗚咽だった。

「おい、どうした」

哲也が心配して聞くと、彼女は泣いて謝るだけだった。哲也がほとんど困っていると、ヴィアが助け舟を出してくれた。

「彼女の兄弟が、最近お亡くなりになったのです。隣国の兵士に殺されたと聞いていますが」

哲也は、悪いことを聞いたと後悔する。

「ごめんな。俺に悪気は無かったんだ、許してくれ」

哲也が謝ると、カトレアはかえって恐縮してしまう。

「いいえ、いきなり泣いた私の方が悪いのです。王様は、謝ることはありません」

「では、俺のことを許してくれるのか？」

「許すもなにも、私が悪いのですから」

哲也は、その返事を聞いてほっとした。それと同時に彼女を自分の

方に向かせて、ぎゅっと抱きしめた。

「ありがとうございます、王様。おかげで気分が落ち着きました」

カトレアは、哲也に礼を言う。そんな彼女の口を哲也は口で塞いだうえ、舌をねじ込む。またもやディープキスである。だが、今度の彼女は強く哲也を抱きしめて、簡単には離すまいとする。むろん哲也はそれに応える。こうして、哲也は長い間カトレアと抱き合うのだった。

第9話　なんと、街に出てみたよ

「うーん、いい朝だ」

哲也は、今日も快適な朝を迎える。その横では、全裸の金髪女が哲也にしっかりとしがみつきのながらすやすやと寝ている。哲也が6番目に穢れを被った女だ。昨夜は彼女の身体の隅々まで堪能させてもらったため、白い肌のあちこちに唾液と汗とキスマークの跡が残っている。哲也は彼女と身体が一つに繋がった時に、彼女に労わりと励ましの言葉をかけながら共に楽しく語らい、彼女の身体と心が共に準備が出来てから優しく腰を振るい、彼女の初体験が良き思い出になるように努めた。それが、彼女の満ち足りた寝顔に繋がっているのだろう。

彼女は哲也が腰を動かすたびに歓喜の表情を浮かべ熱い吐息を漏らし、何度も身体をのけぞらせながら哲也の身体を強く抱きしめ、全身全霊をもって哲也とその分身を受け入れたのだ。哲也の熱い滾りが彼女の子宮に到達した時、彼女は哲也を強く抱きしめながら感極まって泣き出した。それから少し経って落ち着いてから何度も礼を言い、好きです愛していますと繰り返して囁いた。哲也にとって、それは何度経験しても感激が薄れることは無い、素晴らしく嬉しい経験だった。

「こんないい女が、俺のものになったんだよな」

哲也は、感慨深げに言う。この世界に来るまでは、想像すら出来なかった夢のような嬉しい出来事が続いている。毎朝のように夢が覚めるのではないかと思うのだが、どうやら本当に夢ではないらしい。

哲也は、この夢のような毎日が続けばいいなと思うのだった。

今朝の朝食は、ヴィア、アンノ、ディアとシエスタが一緒だった。

「今日でもう1週間か。早いもんだな」

哲也は、この世界に来てもう1週間も経っていることに気付いて軽く驚く。

「確か、今夜の予定は無しでしたね。お疲れでしょうから、お休みいただくのもいいかもしれませんね」

アンノは、あまり無理をしなくてもいいですよと優しく言う。

「嬉しいことを言うね。さすがにこう毎晩腰を使うと、疲れがたまるもんだよな。これまであんまり使ってこなかったもんだから、急に酷使するのも良くないんだろうなあ」

などと、哲也は心にも無いことを言う。本当は、毎晩1発しか発射していないので、精力はありあまっていたのだ。ただ、初めての女相手が続いたので気を遣ったため、精神的な疲労はかなりあったのだが。

「では、そろそろこの世界に慣れた頃でしょうから、外に出てみませんか？我々がご案内いたしますから」

ヴィアは、今日は日曜日ですから街も賑やかですよと言っ。

「そうですね、王様。お約束の1週間が経ちましたし、この世界のことについて、少しづつご説明いたしますから」

ディアも、一緒に外出するように促す。

「そうだな。それもいいかもな」

家の中にずっといてもしょうがないと思った哲也は、彼女達の提案に乗ることにした。

シエスタの運転する電気自動車で街に出た哲也は、日本とは全く異なる街並みに新鮮な感銘を受けた。いわゆる西洋風の街並みが続いており、遠くへ来たんだなあと今更ながらに実感する。

「王様、街並みは古いように見えますが、これはカムフラージュなのです。これらの家は、実際は鉄筋コンクリート造の地下1階・地上3階建ての建物なんですよ」

ディアは、自分達の科学水準を可能な限り敵に悟られないように、代々の王からの指示で様々な工夫を凝らしていると説明する。

「へえっ、そりゃあ気付かなかったなあ」

そう言いながらも、過去の王達の心配りに感心する。この国が他国

と比べて優れているのは、今のところ科学技術だけらしい。軍勢力も低いようだし。いわば、護衛のいない金持ちみたいなものだ。強盗に襲われないためには、金を持っていないように見せかけるのもいいだろう。

「でもさ、これって電気自動車だね。こんなのが走っていたら、科学技術が高いことがすぐに分かつちゃうんじゃないかな？」

哲也がふと疑問に思うと、ヴィアがやりわり否定する。

「これは、魔法で動いていることになっています。それに、この都市には敵のスパイが入ることはありませんから」

だから、多分大丈夫だろうとヴィアは言う。哲也はそんなもんかなあと思ったが、そこにアンノが口を出す。

「この都市は、先々代の王様が設計したものです。都市計画というのでしょうか。都市が大きくなっても、雑然とした感じにならないんですよ。凄い知恵ですよねえ」

アンノは、他国の都市は無秩序に拡大することが多く、全体的に雑然とした感じを受けるのだという。その点、この都市は整然と開発され続けており、秩序を感じさせる造りになっているそうだ。

「なるほどねえ。大したもんだ。これなら、マラソンとか駅伝が出来るかもしれないな。うん、待てよ。お前達に全裸マラソンをさせたら面白いかもな。しかも、人気が出ること間違いなし」

哲也がノリノリで言うと、ヴィア達は真っ青な顔になる。

「それだけは、止めてください!」「」

「首相の権威が……」

「姫巫女の品格が……」

「大將軍の威厳が……」

それぞれ泣きそうな顔をして懇願する。しかし、哲也はわざと意地悪をする。

「さあて、どうしようかな。何かあったら思い出そうと」

こうして、ヴィア達はしばらく青い顔をすることになる。

第10話　なんと、シエスタを泣かしちゃったよ

街を回っていると、よく目に付くものがあつた。都市をぐるりと囲っている城壁である。

「そついや、ここは城壁で囲まれているんだな」

哲也が呟くと、ヴィアが律儀に答える。

「この国の都市は、外敵から身を守るために幾重もの城壁で囲われることになっています。今では殆どの都市が城壁で囲まれているのです」

ヴィアの説明を聞いて、哲也は真つ先に金のことが気になった。都市の周りを城壁で囲むとなると、半端な額のお金が必要だと思ったのだ。

「そりゃあ、ずいぶん金と時間がかかったらうに」

徹夜の言葉に、ヴィアはその通りですと言う。

「とにかく戦争放棄を国是としていますので、敵の侵入を許すわけにはいきません。敵の攻撃に長期間持ちこたえるためにも、何重もの城壁が不可欠なのです。もちろん、城壁を造るのには凄まじいまでの金銭的負担がありますが、敵に占領されるよりはマシでしょう」

それを聞いた哲也は、何かが引つかかった。占領される方がマシということは、占領されると金銭的に更に苦しくなるか、もしくは別の苦しみ加わるとしか思えないからだ。

「もしかして、敵に占領されると住民が皆殺しにされるとか？」

最悪の事態を想定し、恐る恐る尋ねる哲也に、ヴィア達は顔をしかめた。よほど言いたくないことなのだろうか。

「あの、出来ましたらその質問に答えるのにお時間をいただきたいのですが」

代わってディアが、少し時間が欲しいと言う。けれど、なんとなく早く聞いたほうがいいと思って、無理にでも聞き出すことにした。ここで聞いておかないと、聞きそびれてしまうかもしれないと思ったからだ。

「いや、すぐにも知りたいんだが」

すると、彼女達は顔を見合わせた後、意を決したような顔をする。そして、ディアが顔をしかめながら口を開く。

「敵国となってしまうと、あまり正確な情報が入りません。ですからこれから話すことは、不正確な情報であるということを前もってお断りしておきます」

そうしてディアは、占領後の都市の状況を話す。それは哲也が想像したのとは、違った意味で悲惨な状況だった。

占領された都市の貴族は、奴隷の身分に落とされる。そして男は過酷な労働で早死にし、女は娼館で早死にする。軍人や警察官は全て処刑され、敵国に忠誠を誓わない役人も同じ運命をたどる。

敵国に忠誠を誓った役人は、家族を人質に差し出さなければならぬ。それも若い女性を優先的にだ。そして時間が経つにつれて若い妻や娘は敵国人の子を孕むことになるが、黙って耐えるしかない。敵国人の子を孕むと妻や娘は家に戻ってくるのだが、出産後は子供の男が留守中に家に入りするようになり、同じ父親の子を続けて孕むことも多いそう。その結果、役人の子供が全て血が繋がっていない子になるというケースも珍しいことではないという。

一般市民は、税金が急激に上がり、物価が高くなって生活が苦しくなる。それに加えて、横暴な敵国人の乱暴狼藉に耐えなければならぬ。敵国人には強姦罪は適用されないので、美しい娘はすべからず敵国人の子を孕むことになるが、不特定多数の男に強姦されるよりはマシと特定の敵国人の愛人となる娘も多いという。

こうして、役人の家を中心に混血児が増えていき、純粋な自国民の数も割合も減っていくのだという。そして、いずれは完全に敵国民の都市となってしまうそう。

そんな話を聞いていると、急に車が止まった。何かかと思って見ると、運転手のシエスタが滝のような涙を流していた。

「彼女の故郷は、敵の占領下にありますから……」

耳元でアンノが呟いて、ようやく哲也は思い出した。

「悪かったな、シエスタ。つらいことを思い出させてしまったようだな」

哲也は謝ったが、シエスタはしばらくの間泣き止むことはなかった。

第11話 なんと、全裸女が街中を歩いていたよ

しばらくして哲也は奇妙な集団を見かけた。全裸の男女が、集団でプラカードらしきものを掲げて歩いていたのだ。おおよそ、50人くらいだろうか。

「ありやあ、なんだ？」

哲也が尋ねると、アンノが苦笑しながら話してくれた。

「あれは、新興宗教なのです。『自然に帰って幸せになろう教』というらしいのですが、一般的には『全裸教』と呼ばれています」

彼らの主たる教義は『自然に帰ろう』なのだが、他の教義の中に暴力反対や戦争反対というものがあるせいか、これまでは何か目立つ行動を起こしても、代々の王は取り締まることを認めてこなかったという。よく見ると、プラカードらしきものの中に「戦争反対」という文字も確かに見える。もっとも哲也からすると、全裸で歩くから取締りを免れたとしか思えなかったのだが。

「彼らは確かに戦争に反対しているのですが、その主張は滅茶苦茶です。敵に攻め込まれたら全裸になって敵を招き入れて、話し合いで戦争を止めようなどと主張しているのです。しかもですよ、強姦されても抵抗せずに喜んで受け入れよと言うのです。敵と交われば、敵の戦意が薄れて戦争が終わるなどと言っているのです。こんなバカなことはいえないでしょう」

ディアは、憤慨しながら言う。だが、哲也は頭の中で何かが閃いた。

「いや、彼らの言うことにも一理あるな。なかなか独創的な宗派のようだが、もつと彼らのことを知りたいな。悪いがアンノ、彼らの情報をもつと集めてほしい」

哲也が全裸教の調査を命じると、アンノは目を丸くして驚いた。

「おやめください。彼らには、外国からの援助があるという黒い噂があります。もしも彼らの教義に同意する者が増えますと、我々の領土が敵国に容易に踏み荒らされることになりかねないのです」

アンノは必死になって翻意を迫ったが、哲也の意思は変わらなかった。そこでアンノは、渋々哲也の命令を受けることにした。

家に戻った哲也は、シエスタに今夜は一緒に寝ようと持ちかけた。

「ええっ、本当ですか？」

それまで泣きべそをかいていたシエスタだったが、哲也と一緒に寝ると聞いた途端にはあつと明るい顔になる。

「ああ。さっきは悪いことをしちゃったからな。そのお詫びを兼ねてだ。まあ、気分が乗らないのなら、別の日にするけど」

哲也がそう言うと、シエスタは勢いよく首を横に振る。

「いいえ、既に気分はノリノリです。ぜひとも今日は一緒に寝てください。そうしていただければ、つらい思い出だつて一気に吹き飛んでしまいます」

そう言うシエスタを、哲也はぎゅうつと抱きしめる。

「さっきは、本当に悪気は無かったんだ。信じてくれるよな」

シエスタの耳元で哲也が囁くと、彼女は王様のことは信じていますと返した。嬉しくなった哲也は、彼女にやさしく口付けた。

今日の風呂は、シエスタ抜きで入ることになった。急に成人の儀を行うことになったため、準備で忙しいというので、だったら風呂は別にしようと哲也が提案したからだ。そこでヴィア達と一緒に風呂に入るようになった。背中からヴィアに抱かれ、正面からディアと抱き合い、ディアを後ろから抱きしめるアンノの胸をモミモミするという体勢だ。

「それじゃあ、全裸教について、知っていることを残らず教えてくれ」

哲也はそう言うなり、アンノの胸をモミモミし始めると同時に、ディアの口内に舌をねじ込んだ。するとディアも舌を絡めてきて、哲也の頭をぎゅつと抱きしめてきた。

「はい。あまり情報は掴んでいないのですが」

顔を少し赤く染めながらも、アンノは全裸教に関する多くの情報を教えてくれた。

全裸教と呼ばれるのは、毎週のように全裸で街中を練り歩いてデモ行進をするからだ。その時には、「自然に帰ろう」や「戦争反対」など様々な主張を書いたプラカードを掲げるといふ。たいてい2時間から3時間ほど街を歩くのだが、その間に信者の勧誘も行っているといふ。

デモ行進のルートは事前に当局に届け出ることになっていて、何かのイベントとかち合えばルート変更や日程変更を指示されるのだが、特に支障が無ければそのまま許可されるという。

何か問題を起こしたらまずいので、全裸で歩くのは止めたほうがいいと時折忠告しているのだが、一向に聞く気配はないという。ただ、これまで大きな問題を起こしたことも無く、それゆえに明確に全裸での行進を禁止されたことはないという。

もともと、行進中に女性信者が胸を揉まれたりお尻を触られたりしたこともあったそうだが、女性信者は嫌な顔をせずに入信を熱心に勧めるだけなので、大きなトラブルに繋がらないそうだ。強姦未遂事件もあったそうだが、挿入したら永久入信してもらいますと言うと、男はみな驚いて逃げ出すという。

他にも様々な話を3人から聞いて、哲也はある決断をした。

「次の全裸教のデモに、この女たちに参加してもらおうと思っている。全裸教の方には、体験入信したい者がいるから参加させて欲しいと伝えてくれ。もちろん、俺の名前は決して出さないように」

それから、哲也はアンノに一切の手配を任せると続けた。だが、アンノは珍しく哲也の命令に頑強に抵抗した。

「考え直していただけませんか。貴族が参加すると知れただけで、一般市民に対する影響は計り知れません」

これに、ディアも同調した。

「アンノの言うとおり。あいつらのデモに貴族が参加したら、外国の連中にもその情報が伝わる可能性がある。そうするとだな、国王が暗黙の了解を与えていると受け取られかねない。それがどういう結果を生むのかわかっているんですか。敵が我々の国を舐めて、更に勢いづく恐れがあるんですよ。どうかお願いですから、考え直してくださいよ」

そう言うと、ディアは再びディープキスをする。

「私も同じ考えです。敵国を利用するだけで、なんら我が国の利益にはならないでしょう。どうか思い直してください」

3人の反対を受けても、哲也は考えを変えなかった。

「これ以上反対するなら、お前達も全裸で街中を歩いてもらうが、それでもいいのか？」

これには、3人とも沈黙するしかなかった。

第12話　なんと、ヌード鑑賞会が開かれたよ

全裸教体験入信に関して、貴族の女達の中では様々な噂が飛び交った。体験入信すると成人の儀の順番が早まるとか、逆に淫乱女だという烙印を押されて順番が遅れるとか、成人の儀にまつわる噂が多かった。そのため、疑心暗鬼に陥った女達の多くは体験入信をためらった。その結果、体験入信を申し出た者は10人に満たなかった。

そんな彼女達が、朝早く大広間に呼び出された。一体何事かと慌てる彼女達に、老いても気品を保っているメイド長は静かにするように促す。

「それでは、これから名前を呼びます。名前を呼ばれた者は、前に出てきてください」

メイド長がある女の名前を呼ぶと、呼ばれた女は顔を引きつらせながら前に出てくる。

「ちょっと確認したいのですが、あなたは全裸教に体験入信するということでよろしいですか」

「は、はい……」

メイド長の質問に、女は蚊の鳴くような声で答える。すると、メイド長は辛らつな言葉を投げかける。

「あなたは、なんて淫乱な女なんでしょうね。あなたみたいな淫乱は、貴族の恥ではないですか」

それを聞いた女の顔は蒼白となる。その場にいた女達のうち、体験入信を申し出た女達は残らず真つ青な顔になる。逆に、申し込まなかった女達は勝ち誇った顔をする。

「そ、それでは、私は……」

前に出た女は、ようやく声を振り絞るようにして出す。とてつもなく悪い話——成人の儀を行ってくれなくなるとかいう話——を聞かされるのではないかと思ったからだ。だが、幸いなことにメイド長は首を振る。

「私としては反対したいのですが、あなたは今晚王様と夕食を共にしてもらいます。わかつているとは思いますが、翌朝までの予定は全て空けておいてください。まあ、せいぜい身体を綺麗に磨いて来てくださいね」

続くメイド長の言葉に、言われた女の顔がみるみるうちに明るくなる。はつきりと言われなかったが、今夜にも成人の儀が行われるのは間違いないからだ。

「あ、ありがとうございます」

女は、メイド長に深々と頭を下げる。だがメイド長は彼女に目もくれず、次の女の名前を呼ぶ。結局6人の名前が呼ばれたのだが、彼女達は全て体験入信を申し出ていた。そう。彼女達は賭けに勝ったのだ。

それから1週間、彼女達は全裸デモに慣れるためという名目で、毎日一般人相手にオールヌードを披露することになった。要はヌード鑑賞会が開かれるのだ。日差しの強い真昼を避けて朝夕それぞれ1時間だけであるが、哲也の住む建物の門に近い芝生の上で寝転び、その美しい肢体を惜しげもなく披露するのだ。

もちろん、哲也も建物の中から彼女達のヌードを眺めることにしているが、主として彼女達を見るのは見物料を払った一般人である。哲也は見物料を取るからと、彼女達に股間を90度以上開くことや、決して身体の前を隠さないことを徹底させた。

もつとも、芸術を広めるという目的のために裸婦画のモデルになる貴族の婦人はこれまでも大勢いたうえ、モデルとして裸身を一般大衆に晒すことはある意味貴族の女性の義務に近いとも考えられてきたことから、全裸を晒すことに対する嫌悪感を抱く女はほとんどいなかった。美しいものを見る権利は国民が等しく持つており、女の裸といえどもその例外ではないという考えを持つ者が意外と多いことや、これまでも女同士では裸婦画を描きあつてきたこともあり、割合スムーズに事が運んだのである。

もちろん、全裸を晒したのは最初に申し出た女達だけではなかった。成人の儀を待つ貴族の女達は、一人残らず参加したのである。体験入信に関しても、追加の参加申し込みが行われた。参加しなければ成人の儀の順番が更に遅れてしまう恐れがあるので、様子見だった女達が雪崩を打ったように参加を表明したためである。

この件では、哲也は思ったとおりになってご機嫌だった。何もしなければ年齢順に成人の儀を行うしかなかったのだが、今回の件で少

しではあるけれども年齢がばらけさせることが出来たのだ。おかげで哲也は、金曜と土曜には10代の娘と成人の儀を行う予定である。もちろん、20代後半でも美しくて良い女は多いのだが、同じような年齢の女ばかりでは飽きてしまう。出来れば若い女相手にも腰を振りたいというのが人情であり、哲也の切実な願いであった。ぶっちゃけた話、とにかく女達を2つのグループに分けて、若い女がいる方を選ぶのが目的だった。だから体験入信する者の方が多ければ、入信しないグループから成人の儀の相手が選ばれていたのである。

哲也の願望がかなう一方で、もうすぐ20代の半ばを越えようという女が数人、約半年もの間成人の儀がお預けになった。彼女達は自分の判断ミスを後悔したのだが後の祭り。哲也の意に沿うように努力することで、少しでも早く成人の儀の相手に選ばれるように励むしかなかった。彼女達は美しい顔に精一杯の笑みを浮かべながら、これでもかというくらいに大きく股を開いて、見物人に対して積極的に裸身を晒したのである。おかげでヌード鑑賞会の見物客は、日を追うごとに増えていったのである。

そんなある日、哲也は彼女達の中に大ファンだったアイドルにそっくりの少女がいることを発見した。身体はスレンダー、肌は白く綺麗で、金髪はほど良い長さ。瞳の色はエメラルドグリーンで、胸は大きすぎず小さくも無く、腰は細くてお尻は小さかった。

「おい、あの女のことを教えろ」

哲也がヴィアに命じると、かなり詳しいことを教えてくれた。その中で、哲也が気になる情報があった。彼女には、婚約者がいるというのである。彼女は婚約者と愛し合っているかどうか聞くと、ヴィアはわかりませんと言う。

「貴族の結婚は、今も親が決めることが多いので、初対面同士の結婚式というのも意外と多いのです。そのような場合、出会う前に愛し合うことは有り得ません。とはいえ、顔合わせが行われていないとも限りませんが」

ヴィアの話聞く限りでは、貴族の結婚に恋愛結婚は皆無に近いという。また、結婚後もお互いに愛し合うことは少ないそうだ。男は妾を複数持つことが当たり前だし、そんな男に愛情を抱く女も少ないという。女は男に愛情を注がずに、自分の子供に愛情を注ぐという。そんな事情から母親は子供に対して教育熱心となるため、貴族の子供は優秀になるという。

「なんていうか、複雑な事情があるんだなあ」

哲也は、少し頭が混乱してきた。とはいえ、目はずっと女達の裸身を追っていたのだが。

なお、哲也のこの鑑賞会は、一般市民に物凄く好評だった。おかげで王に対する人気は、うなぎ登りとなっていた。

第13話　なんと、反乱計画が持ち上がっていたよ

ヌード鑑賞会が開かれている間、哲也のアイデアで人気投票が行われた。この人気投票で上位に入ると成人の儀の順番が早まるとの噂があったため、女達は競って見物客に美しく見られるよう努力を重ねた。

具体的に言うと常に笑顔を絶やさなかったり、見物客に向けて時折ウインクしたり、大きく股を開いて肝心な場所がよく見えるようにしたり、大きな胸を更に強調したり。おかげでヌード鑑賞会は、更なる人気を博したのだった。

そして迎えた日曜日、全裸教のデモ行進の参加者は倍以上に膨れ上がっていた。増えたのは殆どが貴族の娘達であるためか、デモ行進は以前にも増して人目を引くようになった。これまでは若い娘が数えるほどしかいなかったのが、50人を越える若くて美しい娘達が参加するようになったのだ。これが人目を引かないわけがない。

しかも、彼女達の美しさはすべからく一般のモデル以上。胸はプリンプリンだし、腰はくびれているし、ヒップは美しく引き締まっている。道行く人々は、男は前かがみになり、女はうつとりしてしまう。

そして、最初のうちは恥ずかしそうに歩いていた女達だったが、歩くうちに度胸がすわってきたようだ。堂々と胸をプルンプルンと揺らし、股間の茂みを惜しげもなく晒しながら歩くようになっていっ

た。そうなるにより一層一般大衆の目を引くことになり、野次馬が大勢出没するようになったのである。

そんな様子を、哲也は少し離れた位置で観察していた。

「おおつ、こりゃあ壮観だなあ。おい、シエスタ。お前も参加したくなっただろう?」

「は、はあっ」

哲也はシエスタに問いかけるが、彼女はにっこり笑ってあいまいな返事しかない。シエスタとて、普通の女の子。全裸で街を練り歩くなんて、嫌に決まっているのだ。

そんなシエスタの気持ちを知ってか知らずか、哲也はデモ行進の様子に夢中だった。全裸の女なんか見慣れているはずなのに、普段と違うシチュエーションというのがいいらしい。なんていうかもう、かぶり付くようにして全裸のデモ行進を見ているのだった。

そんな哲也を冷ややかに見る目があった。ヴィア、アンノ、ディアの3人の目である。彼女達にとって、今回のデモ行進は百害あって一理なし。なんとかして止めたかったのだが、哲也に強引に押し切られたという事情があった。

「まったく、哲也も単なるスケベ男だったというわけですか」

「本当にもう、しょうがないですねえ」

「スケベなのはいいけど、今後のことを考えると頭が痛いな」

ヴィア、アンノ、ディアは、愚痴を言ったり頭を抱えたり。果たして、これからどういうことになるのやら。

案の定、ディアは早速部下達から突き上げを食らった。翌月曜日の夜、大將軍であるディアの家に軍幹部である部下達が押し付けてきたのだ。

「ディア様にお聞きしたい。王様は、敵国に尻尾を振るつもりなのか？」

「今の王は、全裸教の信者だという噂があります。それは本当なのですか？」

「このまま戦わずに、国の滅亡を待つおつもりか？」

「もう、部下達を抑え切れません。いつ暴発するかわかりません！」

全裸教のデモ行進に貴族の娘達が参加したことを知って、王の関与を疑った部下達に詰め寄られたディアは、苦い顔をして今は待てと言う。

「仕方ないな。私の計画を言おう。お前達、祖国のため、私と一緒に地獄に落ちる覚悟はあるか？」

急に真剣な表情になるディアを見て、部下達はみな頷く。

「もちろんですとも」

「ディア様のためなら、火の中水の中」

「おおっ。ようやく決心されたんですね？」

部下達は、期待と不安が入り混じった目でディアを見る。ディアは部下達の顔を一人ずつゆっくりと見てから彼女の『計画』を説明する。それは、敵国に対する侵攻作戦だった。

「東のブルグンド、北のウエセックス、南のナヴァラのいずれかの国に侵攻する。決行は1か月後。侵攻目標は、私が直前に決めて指示する。この作戦を成功させるため、部下達の暴発は絶対に阻止しろ。いいな？それからこの作戦が成功したとしても、我々はいずれ反乱軍と見なされて処刑されるだろう。祖国のために死ぬ覚悟がある奴だけ着いて来い」

ディアは一呼吸置いた後で、部下達の顔をゆっくりと見る。すると、彼らは泣き出していた。

「私は感激しました。まさか、ディア様がそこまで祖国のことを思っていてらっしゃるとは！」

「もちろん、着いていきます。私達は死ぬまでディア様にお供いたしましょう！」

「なんてこった。今日は、人生最良の日ですわい！」

彼らは、公爵家の主であるディアが王の意に反して、ましてや憲法に反するような大それたことをするとは思っていなかったのだ。例えば部下全員で詰め寄ったとしても、結局はうやむやにされて終わ리だと思っていた。それなのに、まさかここまでディアが考えていたとは。彼らにとって、嬉しい誤算だった。

「だが、言っておくぞ。絶対に部下以外に計画を漏らすな。万一計画が漏れても、聞かれたら否定しろ。私の指示には絶対に従え。暴発は絶対に避ける。いいな？」

ディアの念押しに、部下達は深く頷くのだった。

しかし、情報とは漏れやすいもの。2日と経たずに、反乱計画はヴィアやアンノの知るところとなった。怒ったヴィアは、ディアを呼びつけて問いただす。

「ディア、見損なったぞ。王様のお情けを受けておきながら、王を裏切るのか？」

そう。ディアは日曜日の夜に、成人の儀を行っていた。そこで改めて王に忠誠を誓ったはずなのだが、その舌の根も乾かないうちに王を裏切るとは。ヴィアは、カンカンに怒っていた。

「何を言っている？私が愛する王を裏切るはずがなかるう。私を陥れようとしている他国の罠に嵌るとは、お前らしくもない」

対するディアは、知らぬ存ぜぬ。証拠となるような文書は一切無いので、強気だった。それどころか、他国の謀略に引っかかる愚か者とヴィアを非難する始末。

「ほう。あくまで覚えがないと言い張る気か？お前がそう出るなら、こちらにも覚悟があるぞ」

ヴィアは、鬼のような形相でディアを睨む。その横では、アンノがおろおろしていた。

こうして哲也の周りには、争いの種が広がっていった。

第14話　なんと、反乱計画は他国に筒抜けだったよ

第14話　なんと、反乱計画は他国に筒抜けだったよ

秘密のはずの反乱計画だが、早速外国に筒抜けになっていた。兵士の暴発を抑えるために、大勢の兵士に話が伝わってしまったからだ。そのうちの数人から、酔った拍子に計画が漏れてしまったのである。ついでに、全裸教のデモに大勢の貴族の娘たちが参加していることも。おかげで、哲也は早速諸外国から無知無能で暗愚な男だと嘲笑されていた。

ジパングの北部を占領しているイギリス南部の国、ウェセックス王国では、占領地に対する防備を強化しつつあった。現状ではどこから攻めてくるのかわからないので、暫定国境近くにある砦や要塞に兵力を集めることにしたのだ。敵が攻めてきても守り抜いて、他の砦や要塞からの応援と合わせて撃退する腹積もりだ。

国境近くの都市には武器弾薬や食料を集積し、長期戦の用意も進めていた。敵を適度に叩いて敗退させ、追撃する勢いで新たな占領地を奪い取ることも視野に入れてのことだ。

「はははっ、今度のジパング王は輪をかけて愚かなようだ」

「全裸教にのめり込んだうえに、部下からは呆れられて反乱を起こされるとは！」

「この分だと、混乱に乗じてジパングの北半分を抑えられるのではないか？」

ウェセックス王国の貴族連中は、暗愚な王だと哲也をあざ笑う。そして、新たに得られるだろう領土について、早くも水面下で争奪戦を繰り広げていた。一部の貴族は隣国イーストフランクの介入があるのではないかと警戒したのだが、大勢はこれまでと同様介入の可能性なしとの意見であり、暫定国境線に戦力を集中することになったのである。

他にも確実に自国に攻めてくるという情報ではないことを問題視する意見もあったのだが、ジパングが攻めてくるならば間違いなく攻めやすい自国領土であるという意見や、他国が攻められたとしてもその混乱に乗じて攻め入れればいいとの意見にかき消された。

ジパングの南西にあるナヴァラ王国でも、状況はウェセックス王国と似ていた。攻め入れればカウンターで攻め返し、他国に攻め入れればその混乱に乗じて攻め込むべしとの意見が大勢を占め、国境近くに大兵力が集中したのである。

「今度こそ、ジパングから領土を削り取るわけではないか」

「ウエセックス王国は、占領地を得て美味しい思いをしているそうではないか」

「かの国の一部でも得られれば、わが国は大いに発展するだろう」

こちらの方も、貴族たちの鼻息は荒い。これまで何度攻め込んでも、ろくに反撃らしい反撃を受けてこなかったので、ジパングの軍を舐めきっていたのである。貴族連中は、今度こそジパングから領土を得られるだろうと期待満々であった。

だが、ナヴァラ王国はウエセックス王国と事情が異なり、小国であるため兵力がそう多くない。そこで、これまでも何度かジパング攻めの援軍を頼んだことがある西のレオン王国に話をもちかけて、共同でジパングを攻めるといふ密約を交わしたのである。

レオン王国はイベリア半島の3割を占める大国で、同じく半島の半分を占める大国であるコルドヴァ帝国と仲が悪い。そのため国力の充実に躍起であり、ジパングの領土獲得に並々ならぬ意欲を持っていたので、交渉は簡単にまとまった。あとは、愚かな反乱軍が行動を起こすのを待つばかりである。

東のブルグンドでは、いささか状況が違っていた。アッパーブルグンド公国やロウアーブルグンド公国は、今でも名目上はサウスフランク王国の一部であるため、サウスフランク王国と対応を協議して

いたのである。

サウスフランク王国側としては、元々兄弟国であるジパング王国に攻撃を仕掛けている両ブルグンド公国に対して、あまり良い感情を抱いていなかったようで、両国の援軍要請に対する返事を渋っている。

現在のサウスフランク王の考えは、人間同士で争っている場合ではなく、獣人やダークエルフに対して団結して臨むべきというものだった。なので、両ブルグンド公国に対して、ジパングと和平交渉をするよう逆提案をしている。だが、そんな提案が受け入れられるはずもなく、交渉は延々と続けられている。

国外の情勢がきな臭くなっているなか、哲也の目下の悩みは女のことであった。いくら悩んでも結論が出ないので、結局哲也はヴィアに相談することにした。

「あの、ちょっと聞きたいんだけど。気に入った女の子を長くここに留めておくにはどうしたらいいのかな。成人の儀は10回で終わりだし、あまり長く引き止めることも出来ないんじゃないかって思うんだ」

だが、相談を受けたヴィアは目を丸くした。どうして哲也が悩むのかわからなかったのだ。

「あの、王様。女を長くここに留めたいのなら、残るようになれば

良いのでは。王様のお言葉に従わない女など、いないと思いますが」
首を傾げるヴィアに、哲也は頬を膨らます。

「いや、単に長くいてもしょうがないんだ。なんていうのかなあ。10回で終わりじゃなくって、もっとアレをしたいんだよな」

哲也は、なんて察しの悪い女だと心の中で毒づく。あんまり堂々とエッチをしたいなんて言いにくいからだ。しかし、ヴィアはそこまですべてもわからないようだ。

「アレって、なんのことでしょうか？」

なんて、直球で聞いてきた。しょうがないので、哲也は彼女の耳に口を付けて、小声で言う。すると、彼女は恐縮したように言う。

「すみません。まさか王様が、そんなことでお悩みとは思いませんでした。以前申し上げたつもりだったのですが、わが国の女で王様のお情けを受けたがらない者はおりません。ですから気に入った女がいるならば、好きなだけここに置いて種付けをすればいいのです」

「でも、成人の儀は10回までなんだろう？」

「はい。ですからそれ以上お情けを与えるならば、種付けの儀と呼び名が変わります」

「へっ!？」

哲也は、思い切りずっこけそうになった。要は呼び名が変わるだけ

で、気に入った女とは何度でもエッチが出来るということなのだ。今まで真剣に悩んでいた自分がバカみたいだった。

「ですから、気に入った女がいれば10年でも20年でもここに置けばいいのです。その間、好きなだけ種付けをしても構いません。こう言えばおわかりでしょうか」

ヴィアの言葉に、疑問の全てが解けた哲也だった。

哲也と別れた後、ヴィアは思いつきり壁を叩いた。

「王様、あなたという人はなんて……」

こんなはずではなかった。哲也が簡単に成人の儀を行ってくれたので、なんて素晴らしい王が来たのだと喜んでいたのがつい昨日のことのように思える。

しかし、あつという間に状況は最悪の事態を迎えつつある。反乱計画が着々と進みつつあるのに、王は信じようとしな。このまま放置すれば、間違いなく大きな災いを招くというのに。下手をすれば、いや間違いなく反乱は他国の侵略を招くというのに、王は事態の深刻さに気づいていないのだ。

「こうなれば、動かぬ証拠をつかむしかないな」

ヴィアは、反乱をなんとしても阻止すると決意を新たにした。

第15話　なんと、鉄の女が泣いちゃったよ

ジパングには、鉄の女と呼ばれている者が2人いる。ヴィアとディアである。それは、彼女達がこれまで人前で決して涙を見せなかったからではない。まあ、それも理由には入るのかもしれないが、ヴィアもディアも鉄の意志をもっていて、一度こうと決めたら決して考えを変えなかったからだ。もともとヴィアは常に冷静沈着で理性的な判断を下し、ディアは烈火のごとき感情で判断するという違いはあったのだが。

彼女達の噂は周辺国まで知れ渡っており、ジパングには2人の鉄の女ありというのが一般常識にまでなっていた。ちなみに、アンノは月の女と言われている。

そんな鉄の女のうちの一人であるヴィアは普段は滅多に表情を顔に出さないが、今日ばかりは違っていた。反乱の動かぬ証拠と生き証人を得たからだ。ヴィアはうつすらと笑みを浮かべながら、部下の待つ会議室へと入る。そこには、拷問によって全てを吐いた軍人がいた。ディアの部下の一人だ。

「話は聞いた。そいつが全て白状したのだな？」

「はい、その通りです。反乱計画の時期や規模など、その詳細に渡って明らかになっています」

頭を下げてヴィアを迎えたのは、ヴィアが最も信用する部下の一人。これまでもヴィアの懐刀として、ヴィアを支えてきた女性だ。決して美しい容姿ではないけれど、実力によってヴィアの信頼を勝ち得

た有能な部下だ。

ヴィアは、彼女から反乱計画の概要を記した資料を受け取ると、唇を少しだけ動かして喜びを表した。その資料はよくまとまっており、仮に素人であろうと要点がすぐに理解できるよう作られていた。

「よくやった。これならば、誰も文句をつけまい。これで、反乱計画を阻止できるだろう。我が王国は、救われたのだ！」

ヴィアは、よくやったと部下を労った。そして心の中で思う。今日こそディアの、鉄の女の涙を見ることが出来ると。

ヴィアに相談した翌日、哲也は早速メイド長に成人の儀の相手を発表させることにした。実のところ哲也が悩んでいたのは、気に入った美少女をいつ抱くかということだったのだ。成人の儀が10回であれば、早く抱けば早く別れることになってしまう。それを防ぐにはどうしたらいいかと考えあぐねていたのだ。

だが、ヴィアに相談したら簡単に解決した。回数や期間に制限が無いのなら、早いうちに抱いてしまおうと思ったのだ。幸いお気に入り彼女は人気投票の上位に食い込んでいたので、第4週に成人の儀を行うことにした。なぜなら第4週の次は第1週の相手が2回目の成人の儀を行う予定であり、新しい相手と成人の儀を行うのはすべての女と10回成人の儀を行ってから、すなわち約10か月後になるので、そんなに待てないからだ。

要は同じ相手とは4週間に1回成人の儀を行い、4週間かけて24人(週6人×4週)の相手をし、それが10回続くので10か月かかるというわけだ。10か月で24人の成人の儀が完了するので、50人相手だと約20か月かかる計算だ。果たしてこのペースで体力や精力が持つのかどうかはわからないが、無理ならペースを緩めればいい。また、早く故郷に帰りたい者がいれば順番を調整して早く返すのも可能なのだ。

話は戻るが、哲也はお気に入りの彼女を早く味見したくて彼女の順番を早めることにしたのだが、当然ながらそのあおりを食う女もいた。あと10か月は成人の儀がお預けと分かった彼女達は、特に20代の女性は目に見えて落ち込んだ。哲也は何か希望を与えようかとも思ったのだが、ぬか喜びに終わる可能性が高いので結局やめることにした。今の哲也に出来ることは、毎晩しっかりと腰を振って彼女達を成人にすることだけなのだから。

なお、今回の発表は哲也が立ち会うことにした。選ばれた女達の喜びの表情が見たいがためだった。そのため、発表会場は大勢の人間でごった返していた。発表後は喜びあり悲しみあり、悲喜こもごものドラマが展開されていた。

だが、ドラマはそれでは終わらなかった。ヴィアがみんなの前で王に申し上げたいことがあると進言したからだ。

「どうしたんだヴィア、いきなりそんなことを言うなんて。まあいい。よく分からないけど聞いてみようか」

哲也にとって重大な悩みを解決してくれたヴィアの望みなので、哲

也はよく考えずに許可を出した。哲也が許可すると、彼女は自分の部下に命じて、その場にいる全員に資料を渡し始めた。すると、それを見たディアの顔がみるみるうちに真っ青になっていく。そう。それはディアを首謀者とする反乱計画の概要書だったのだ。

周りの者達はヴィアが配った資料とディアの顔色を見比べて、資料の内容が正しいものであることを直感的に感じ取った。勝ち誇り胸を張るヴィアに対して、ディアは俯いて顔を上げることが出来ない。

だが、哲也は場の雰囲気を読めずに聞いた。この資料の裏づけは取れているのかと。そう聞かれて、待つてましたとばかりヴィアが合図をすると、ディアの部下である将軍が縄で厳重に縛られた状態で部屋に連行されてきた。

「王様。彼が生き証人でございます」

更にヴィアが合図をすると、その証人は洗いざらいぶちまけた。月曜日の夜に、ディアが部下達に語ったすべてのことをだ。彼が話している最中、ディアは真っ青になって俯いたまま何も言わない。こういう場合、違うならば反論すべきなのだが、ディアはそうしなかった。これは、罪を認めることと同じであった。

ディアの態度を見て勝利を確信したヴィアは、哲也に向かって高揚した声で判決を迫る。

「さあ、王様。反乱の首謀者に、裁きを下してください」

だが、ヴィアはディアに気にとられて、哲也の様子を確認していなかった。哲也は、顔を赤くして震えていたのだ。哲也はヴィアに静かに問いかける。

「あの男は、拷問されたのか？」

ヴィアは、何を今更と思い肯定する。ディアの有罪を確信し、あまり深く考えずに。

「ええ、当然です。彼は反逆者なのですから。そんなことより、裁きを」

ヴィアがなおも裁きを促すと、哲也はいきなり大声をあげた。

「ふざけるなっ！拷問で得られた証言など、俺は認めない！判決は無罪だっ！」

王のあまりにあまりな判決に、当人のディアでさえあつげにとられる。ましてや、ヴィアが納得できるはずもない。

「どうしてですか、王様！ディアが反乱を計画していたのは明らかです！このような明確な証拠もあります！無罪になるなど有り得ません！」

ヴィアは激昂し、哲也に詰め寄った。しかし、哲也はヴィア以上に激昂していた。

「俺の大好きなじいちゃんも、昔拷問で有罪になったんだ！じいちゃん、死ぬときまで悔しい、拷問は絶対に許せないって言ってた！俺は誰がどう言おうと、俺のじいちゃんを苦しめた拷問を許さない！絶対に！絶対にだ！」

哲也が見せる初めての怒りの感情に、さすがのヴィアもタジタジと

なる。ここでもうやくヴィアは哲也のトラウマを深くえぐってしまったことに気がついた。もう理屈ではどうにもならない事態になったことも。

「拷問をしてしまったのは、私の落ち度です。申し訳ありません。ですが、ディアが反乱を計画していたのは紛れも無い事実。それだけはお認めください」

ヴィアは頭を下げて懇願するが、哲也は認めない。

「いや、俺は拷問は認めない。だからヴィア。お前は彼に土下座して謝れ！」

ヴィアを睨みつける哲也を見て、ヴィアは自らの敗北を悟った。よく考えれば、戦争を嫌う国の王が拷問を嫌うことなど、容易に推測できたはずなのだ。それなのに勝利に驕ってその点を確認しなかった自らの落ち度を悔やんだが、後の祭りである。

「申し訳ありませんでした」

ディアの部下に土下座したヴィアは、悔しさで胸が一杯になる。だが、土下座はそれでは終わらなかった。

「てめえっ！頭が高いんだよっ！」

拷問を受けた怒りだろうか。彼はヴィアの後頭部を思いつきりぐりぐりと踏み付けた。その拍子に、彼女の美しい金髪がまとめてぶちっと音を立てて抜け落ちる。

「ふんっ！これで済んだと思うなよっ！」

彼はヴィアの背中の上を乱暴に歩き、ヴィアの後ろで降りるとスカートを捲し上げてショーツを下ろして尻を丸出しにする。そして次の瞬間、パシーンという乾いた音が響く。そして、それは一度では済まなかった。

何度も叩かれたヴィアの尻が真っ赤に腫れ上がると、彼はヴィアの耳元で囁いた。

「おめえは、女としても終わつたな。王様の女に選ばれたのは、デミア様だったというわけだ」

とどめに彼はヴィアの後頭部にエルボーを食らわすと、大笑いでその場を去った。

「国が滅ぶと言いながら、身内で争うとは何事だ。お前はしばらく反省している」

哲也もそう吐き捨てるように言つてその場を去る。哲也が去ると、貴族の女達もそくさとその場を去っていく。その場に残ったのはヴィアの部下や友人だけであった。彼らはヴィアになんと云つて声をかけていいのかわからず、黙つて遠巻きにしているだけだった。

そんな中、哲也が去つてしばらくすると、なんとも哀しいすすり泣きが聞こえてきた。ひーっ、ひーっ、まるでこの世の全てに絶望したような、もの哀しい響きをしたすすり泣きだった。

「うそ……」

「鉄の女が泣くなんて……」

「この国はどうなっちゃうのかしら」

決して泣かないと言われた鉄の女が、恥も外聞も関係なくひっきりなしに泣き続ける。その場に残った者は、信じられない光景を目にして国の行く末に不安を覚えるのだった。

第16話　なんと、鉄の女が真っ青になったよ

ヴィアが反乱計画の証拠を国王に突きつけ裁きを迫ったが、ディアは結局無罪になったこと。その後ヴィアはディアの部下に真っ赤になるほど生尻を叩かれて、屈辱のあまり夜通しすすり泣いたという話は、瞬く間に国中に広まっていった。

「なんとも、まあ。あのヴィア様が夜通し泣き続けるとは、よほど悔しかったのでしょうかね」

「なんでも動かぬ証拠を突きつけたにもかかわらず、ディア様は無罪になったそうね」

「これは、次期王妃の有力候補はディア様になったとみていいでしょうなあ」

「ヴィア様も、焦って墓穴を掘ってしまったわれたようですね。可哀想だが、これでもうおしまいでしょう」

「あんな赤っ恥をかいたんでは、もう二度と政治の世界に出られないでしょうね」

「それどころか、国王どころか誰も嫁の貰い手はいないでしょうしなあ」

貴族の間では、ヴィアはもうおしまいだとの噂が広がっていた。衆人環視下での尻叩きというのは、軽いとはいえ殆ど刑罚に近いものである。現職首相が刑罚を受けるという不名誉を与えられたということは、国王から罷免されたにも等しいことなのだ。そうになると、首相どころか政治生命も絶たれたも同然。さらには、嫁の貰い手も見つからないだろうというもっぱらの噂だった。

そのうえ、翌日にはアンノが首相代理に、ディアが副首相に任命されたことから、ヴィアの首相復帰は絶望的と見られていた。すると、これまでヴィアに擦り寄っていた貴族達の多くが、雪崩を打ったようにディアの派閥に加わっていったのである。こうして、ヴィアの権力は落ちるところまで落ちていくのであった。

貴族達の予想とは違って、哲也の方はヴィアに対して可哀想だなという感情を抱き始めていた。ディアからはヴィアがこれまで滅多に泣いたことがないことを聞き、アンノからはヴィアが夜通し泣き続けたと聞いたからである。なので哲也は、しばらく謹慎すればヴィアを許そうと考えていた。

そもそも哲也が怒ったのは、ヴィアが拷問という手段を用いたからだ。だが、この世界ではそれが普通に用いられる手段である可能性を失念していたことによりやく気付いたのだ。そこで哲也は、アンノとディアを呼び出した。

「ちょっと二人の意見を聞きたいんだ。ヴィアのことなんだけど」

哲也が話を振ると、早速アンノが食いついた。

「王様、お願いですから彼女を許してあげてください。彼女は今、人生の中で最も落ち込んでいるところです。どうか王様のお情けを彼女に与えてください」

アンノは深く頭を下げて、哲也に懇願した。

「私も同じ意見です。彼女はとても有能な女です。ここで腐らせるにはあまりにも惜しい。なあに、王様が優しく声をかければ、すぐに元気になるでしょう。ただし、ああいうことがあったのですから、公の場に姿を出すのは当面避けた方が無難でしょう」

驚いたことに、ディアもアンノに賛成した。

「へえっ、ディアは優しいな。自分を失脚させようとした女に対して、なんて寛大なんだろうね」

哲也は、ディアがヴィアを許すことに反対するのではないだろうかと思っていたので、なんだか拍子抜けした。その一方で、彼女が公の場に姿を見せるには、時期を考えた方がいいという意見も正しいような気がしてきた。そこでアンノの意見も聞くことにした。

「そうですね。あんな醜態を晒したのですから、彼女に関する悪い噂が広まっていることでしょう。そんな状況で彼女が公務を行うと、かえって周りが混乱するでしょう。1か月ほど時間をおいて、噂が落ち着いてから公務に復帰するのがいいと思います」

アンノも賛成したので、この件の結論は出た。

「わかった。二人の意見に従おう。そこでだ。悪いがディア、結論をヴィアに伝えて欲しい。頼めるかな？」

哲也が彼女を見ると、彼女は首を縦に振る。

「わかりました。早速彼女に伝えてきます」

そう言っと、ディアは部屋を出て行く。彼女が部屋を出ると、哲也はアンノに耳打ちした。

「例の順番なんだけど、ヴィアを先にしてもいいかな？」

哲也の申し出に、ヴィアははっとして顔を上げる。

「ええ、是非お願いします。今の彼女に必要なのは、王様の優しさなのです。どうか、彼女の心を救ってあげてください。お願いします」

アンノが頭を下げると、哲也は苦笑する。

「なんだかそこまで言われると、この先を言いにくいな。ヴィアの順番を繰り上げるに、条件があるんだ。悪いけど、ヴィアに確実に伝えてほしいんだ」

哲也は、そう言いながら6つの条件を提示した。

- 一つ ディアやその部下に恨みを抱かず、許しを与えること
- 二つ 二度とディアを告発しないこと
- 三つ 反乱計画は、ヴィアの誤解だったと認め謝罪すること
- 四つ 全裸教に体験入信し、全裸デモに参加すること
- 五つ ヌード鑑賞会に参加すること
- 六つ 成人の儀が行われた事実を口外しないこと

アンノは、最後の幾つかの条件には顔をしかめたが、結局はヴィアに伝えることを確約した。

家に戻ったヴィアは、哀しみに打ちひしがれていた。他の貴族が考えたことと同じことを、ヴィアも思っていたのだ。ヴィアは、今後決して哲也からお情けをもらえないだろうと考え、いつそ死のうかとまで思いつめていた。すると、そこにディアが現れた。

「まあ、酷い顔ね。でもね、そんなに落ち込まなくていいわよ。王様は、あなたを許してくれるそうよ。それでアンノがね、あなたにお情けを与えて欲しいって頼んだの。私も賛成したら、王様はあなたにお情けを与えるって言うてたわ

彼女の話を聞いたヴィアは、一瞬顔を綻ばせたが、すぐに硬い表情になる。

「誰がそんな話を信じられるのですか。あなたの言うことなんて信じられないわ」

ヴィアは、ディアを疑いの眼で見る。

「まあ、そうか。私の言うことなんて、信じられないわよね。でもね、私は嘘なんて言っていないだけだね。私が王様を裏切っていないことも、王様があなたを許すって言ったことも、同じくらい本当なんだけどねえ」

笑いながら話すディアに、ヴィアはますます疑いの眼を向ける。

「そう。それならあなたの言うことは嘘に違いないわ。あなたが王様を裏切って反乱を計画していることは、疑う余地なく事実なのだ

から」

ヴィアは、厳しい目をディアに向ける。ディアは苦笑し、それ以上言葉を続けることはしない。しばらくその場を沈黙が支配したが、アンノの登場で沈黙が破れた。

「まあ、アンノ。よく来てくれたわね」

ヴィアはアンノを抱きしめる。

「ええ。もうディアから聞いていると思うけど、王様があなたを許してくださることになったの。次の日曜日の晩、身体を磨き上げて王様と夕食を共にするのよ。いいわね」

アンノの言葉を聞いて、ヴィアは固まる。

「ま、まさか、本当だったのか……」

あんぐりと口を開けて固まったヴィアに向かい、ディアは本当に信じてなかったのかと呆れる。

「私は、あなたには一度も嘘を言ったことは無いわ。この命を賭けてもいい」

急に真剣な表情になったディアに、ヴィアは何を言っているのか言葉に迷った。すると、アンノは困ったように口を開く。

「さっきの話には続きがあるの」

アンノから条件を聞いて、ヴィアは真っ青になった。

翌日、ヌード鑑賞会にヴィアが参加し、大きな話題になった。だが彼女はヌード鑑賞会に参加したショックのあまりか、心ここにあらずという状態で、傍から見ていると茫然自失状態に見えたのだった。

第17話　なんと、敵はもう勝った気でいるよ

ヴィアの一件も、諸外国に筒抜けになった。もちろん、ヴィアが集めた反乱計画の証拠も。おかげで諸外国は反乱計画の詳細を知ることになり、ほくそ笑んだ。多少計画が変更されたとしても、今からでは大幅な変更は不可能だと踏んだからだ。それと同時に、哲也のことは底なしに無知無能で歴史上最も暗愚で最低最悪な王だと嘲笑されていた。

一つには、有能かつ誠実で国王への忠誠心に篤い首相を訳の分からない理由で失脚させたうえ、ヌードモデルもどきにまで身を落とさせたこと。こんな人材の無駄遣いなど、どんな愚かな王でも普通ではあり得ないと呆れられたのだ。国のことを真剣に思っただけの行動の仕打ちがこれでは、バカらしくて誰も国王について来なくなると大笑いされた。

一つには、明らかに反乱計画を企てている部下を、何の根拠もなく信じたこと。反乱の明確な証拠があるにもかかわらずだ。巷の噂では、ディアの肉体に溺れたからだという。こんなとんでもない公私混同がまかり通るようでは、すぐに役人共が腐敗していき、瞬く間に国が傾くと大笑いされた。

哲也がしたことは、泥棒を捕まえた有能な警察官を無実の理由でクビにして牢屋に押し込み、泥棒をガードマンとして雇うようなものだ酷評された。こんな国王が続く限り、ジパングの先は見えたと思うのだった。

ジパング北部を占領しているイギリス南部の国、ウェセックス王国では、暫定国境近くの都市に武器弾薬や食料に加えて、兵士の増強も行いつつあった。既に兵士の数は2万を超えており、まだまだ増え続ける予定だ。この機会に、更にジパングの国土を切り取るという算段だ。首相の失脚によってジパング国内が混乱を見せており、今が攻め入る千載一遇のチャンスだと誰もが思っていた。

「ジパングの王は、なんであそこまで愚かなのだ。まさか、何かの罠ではないだろうな」

「いやいや、それはないだろう。ヴィアは、演技で泣くような女ではない」

「ましてや、水溜りが出来るほど泣き続けたというではないか。いくら罠でもそこまでしないだろう」

「生尻を思いつき叩かれたそうだし、ヴィアも哀れな女だな」

「首相からヌードモデルへ転落か。今の彼女は、魂が抜けたような有様だと聞くが」

「しかし、敵国の女とはいえ、あまりにも不憫だな」

「だが、これは思っても見ないチャンスだ」

「上手くすれば、ジパングの中部一帯が手に入るかもしれん」

ウエセックス王国の貴族連中は、新たに広大な領土が得られそうだとほくそ笑む。そして権力闘争に敗れたヴィアを味方に引き入れて、ジパングの中部まで切り取るうという意見が多数を占めた。

その後、ヴィアの腹心の部下から返事が来た。その返事があまりにも予想外だったので、貴族連中は仰天した。なんとヴィア側は、ウエセックス王国が提示した莫大な報奨金と前金の受け取りを断り、その代わりに絶対に譲れないという条件を出して来たのだ。

それは、ディアと部下の軍人を生きたままヴィアに引き渡すこと。ヴィアの手で彼らを拷問し、生まれてきたことを後悔させてやると言っただ。それを聞いた貴族連中は、ヴィアのあまりの恨みの深さに恐ろしくなって、思わず背筋が寒くなった。

ジパングの南西にあるナヴァラ王国でも、状況はウエセックス王国と似ていた。今がチャンスとばかりに、国境近くに10個連隊、3万を超える大兵力が集中したのである。おかげで、治安維持に必要な最小限度の兵力しか持たない都市が激増したほどだ。この国の貴族達も、鼻息は荒かった。

「これぞ、神が与えたもつたチャンス。必ずや、ジパングから領土を削り取るうではないか」

「神というよりは、神がかり的に愚かなバカ男が与えたチャンスだ

がな」

「ウェセックス王国は、内応者を得たようだ。我々も、早く内応者を得るのだ」

「ヴィアでもいいが、アンノもいいのではないか」

「そうだな。アンノはヴィアと仲が良いと聞く。今回のヴィアに対する仕打ちを面白く思っていないだろう」

こちらの貴族たちも、既に勝った気である。元々ジパングの軍を舐めきっていたのであるが、更に今回はジパングの政治が大混乱している。これでは軍は力を出せるはずがない。なので、彼らが言うことももつともであるのだが。

その後、アンノ側から返事が来た。王を裏切れないので、内応は出来ないとのことだった。しかし、もしもディアの反乱計画が事実であつたならば、そのときは返事が変わるかもしれないので、もう少し返事を待つて欲しいとのことだった。

この返事を聞いた貴族達は、これで間違いなく勝てると大喜びした。

東のブルグンドでは、これでは碌な兵力で攻めてこないだろうと踏んでいた。軍隊というのは、補給が万全な状況で初めてその力を発揮する。だが政治が混乱しては、補給の方も混乱するからだ。

攻めてくると思われるのは、ヴィアが調べた情報からディアの腹心の部隊のみというのが既にわかっている。それもこれも、ヴィアが反乱計画を詳細に調べたからである。

攻撃目標についても、ウエセックス王国又はナヴァラ王国であることがわかつている。もちろん当初計画と変えてくる可能性はあるのだが、今のところその可能性は極めて低いとみられている。主に兵力展開のスピードや補給の観点からの予想だが、おそらく見込み違いはないだろう。

したがって、安心したブルグンドの貴族達の関心ごとは、ジパングが滅びた後のことである。静観するかそれとも積極的に介入するかなかなか難しい問題ではあるが、彼らはそろそろ結論を出そうとしていた。

「残念だが、今回は様子見だな。我らが王のお考えが変わらぬのだからな」

「うーむ。ジパングが他国に分捕られるのを座して見るしかないのか」

「まあ、やむを得まい。今は我々の結束を固めることが重要だろう」

こうして、アッパーブルグンド公国やロウアーブルグンド公国は、ジパングへの侵攻を諦めることとなった。

諸外国で散々嘲られていることを知ってかしらるか、哲也は毎晩熱心に成人の儀を行っていた。哲也にとって、成人の儀とは素晴らしい儀式だった。自分は最高に気持ちいいし、美しい娘達からは心から感謝されるし、いいことづくめである。哲也は、毎晩とても充実した気持ちで腰を振るうのだった。そのうえ、ようやく哲也が最もお気に入りの少女に順番が回ってきて、まさに天にも昇るような気持ちであった。

「哲也様、私の穢れを祓っていただきありがとうございました。このご恩は忘れません。私は一生あなたをお慕いいたします」

神聖だけれどエロイ儀式が終わった後、彼女は荒い息を整えた後こういった。美少女にここまで言われて、嬉しくならないはずがない。哲也は彼女をぎゅっと抱きしめて、自分も凄く気持ちよかったと礼を言う。続けて哲也は、彼女にさりげなく問いかける。

「もしも僕が望めば、婚約を解消してくれるかなあ？」

断られたらどうしようと思いつつ、哲也は内心を押し隠して聞いてみた。すると、答えはヴィアから聞いていたとおりだった。

「ええ、もちろんです。王様が望むならば、誰とでも結婚します。一生独身でいるとお命じになるならば、そのとおりにいたします」

彼女は、哲也が望むならばなんでも言うことを聞くと言う。それを聞いた哲也は、思わず笑みを浮かべる。

「だったら、俺が望む限り俺の側にいて欲しい。君を正室に迎えることは出来そうにないけれど、出来る限りのことをするつもりだ」

哲也が真剣な表情で言うと、彼女はにっこり微笑む。

「その言葉だけで十分です。ただ、出来ましたら王様のお種をいただきたいのですが……」

ちよっぴり俯き加減になる彼女を、哲也は優しく抱き寄せた。

「ああ、もちろんだ。あと数年後には、俺の子を産んで欲しい」

哲也は、満面の笑みを浮かべて言う。だが、果たして数年後も哲也が王のままでいられるのだろうか。それを知るものは、今は誰もいない。

第18話　なんと、ディアは強引に兵を集めたよ

諸外国は、ヴィアの失脚によってジパングは大混乱に陥りガタガタになっただろうと高をくくっていたのだが、これはある意味正しかった。しかし、諸外国は大きな見落としをしていた。ヴィアの失脚によってディアに権力が集中し、これにより混乱は短期間で収束したのである。

ディアは、これまで何かと張り合ってきたヴィアがいなくなったことに若干の寂しさを感じつつも、今がチャンスとばかりに精力的に動き出していたのである。

「みなさんに、お願いがあります。重要なことなので、よく聞いてください」

ディアは、成人の儀を始めた娘や成人の儀を順番待ちしている貴族の娘達を一同に集め、自分に対しての『協力』を依頼した。それは、兵力や物資の供出をはじめとする、『災害対策訓練』に対する全面的な協力依頼であった。だが、具体的な協力の内容を聞いて、娘達は騒ぎ出した。ディアが示したのは、あまりにも無理な要求だったからだ。

「そ、そんな……これほどの兵士、そうそう集められません」

「家臣団全てを合わせたよりも、遙かに多いではありませんか」

「しかも、こんな短時間で……絶対に無理です！」

ディアが過大な依頼をしたため、娘達は騒ぎ出した。だが、騒ぎ出す彼女達を前にしても、ディアは少しも慌てない。どうやら、彼女達が反発するのは織り込み済みのようだった。ディアはここぞとばかり、大声を張り上げる。

「今回の訓練には、わが国の存亡がかかっている。だからこそ、王は首相であるヴィアを犠牲にしてもこの訓練を成し遂げようという御意思なのだ。あなた達は、王の御意思をないがしろにすると、そう言いたいのだな？」

ディアの一声で、その場は静まりかえる。ここにいる娘達は貴族であり、それなりの教育を受けている。そのため、ディアの言葉が意味するところをうつすらとはあるが分かってしまった。協力しなければ王の意思に逆らう者と見なされ、ヴィアと同じく『犠牲者』になることを示唆していたのだ。

するとその時、娘達が大きく動揺したところで、一人の美しい娘が前に進み出た。哲也が現在最も気に入っている娘であり、つい先日最初の成人の儀を行った娘だ。

「ディア様にお聞きます。もしも私が協力出来ないと云ったならば、果たして私は何か罰を受けるのでしょうか？」

彼女は、自分が王の寵愛を受けているという自信があった。それゆ

え、ディアを恐れつつも強気な態度に出られたのである。これに対するディアの返事は意外なものだった。

「あなただけは、罰を受けないだろうよ。なぜなら、あなたは現在最も王からの寵愛を受けているのだから。でもね、少し考えて欲しいんだ。あなたの子供と私の子供はきょうだいになるんだよ。きょうだいの母親同士、仲良くしようじゃないか」

「なっ！」

娘は、ディアの返事を聞いて絶句した。自分がディアよりも王の寵愛を受けていることを肯定したうえで、なお自分に協力を依頼してくるとは思っていなかったからだ。それに、聞き捨てなら無いことも言っていた。事実上、ディアは王の子供を産むと言ったのだ。こんなんことは、嘘や冗談で言えることではない。となると、ディアも王の子供を産むように言われているとしか思えない。

「あなたも、王様から子供を産んで欲しいと言われたのですか？」

娘が尋ねると、ディアは笑みを浮かべながら答える。

「ああ、もちろんさ。それに順番も聞いている。あなたは4人目だが、私は3人目以内だそうだ。まあ、私はアンノのいずれかが最初の赤ん坊を授かることになるだろうけどね」

ディアは、自信ありげに答える。ここまで言い切るとなると、おそらく彼女の言うことは本当だ。そうなると、ディアを敵に回すのは得策ではないと分かる。ディアも自分と同じ位の寵愛を受けている可能性がある限り、自分が子供を産むまではディアよりも有利な立場とは言えないからだ。それに両方に子供が生まれた場合、ディア

と仲良くした方が都合がいいのも事実。ここまで考えて、娘は決断した。

「分かりました。ディア様にご協力いたします」

そう言つて娘は一礼する。

「そうか、感謝する」

一番の難関を突破したディアは、冷笑を浮かべる。もともとキツイ顔をしているせいもあり、酷薄な印象を与える笑みだ。

それを見た周りの娘達は、背筋が寒くなる。王から最も寵愛を受けているという噂の娘が、簡単にディアの軍門に下つたように見えたからだ。そのうえ、罰を受けないのは王から最も寵愛を受けている娘だけだと言われたのだ。裏返せば、自分達が逆らつたら罰を受けると言われたも同然。そうなると、選択肢は一つしかなかった。

結局、ディアは貴族の娘達全員の協力を取り付けることに成功したが、これだけで終わるはずもなかった。彼女はディア派の貴族に、『災害対策訓練』に最大限の協力をするよう依頼した。そればかりでなく、ヴィア派の貴族やアンノ派の貴族に対しても、あの手この手を使って協力を依頼した。ヴィア派に対してはヴィアの復権に協力すると約束し、アンノ派に対してはアンノを失脚させるような真似はしないと約束した。

事情を良く知らない貴族にとって、ヴィアが権力闘争に負けたとしか見えなかったこともあり、貴族は内心では嫌がりつつもヴィアに

最大限の協力を約束したのである。大公であるヴィアでさえディアに逆らって失脚したのだから、公爵以下の貴族がディアに逆らえるわけがなかった。

その結果、国内から大勢の若者が徴兵され、兵士数は百万を超えるに至った。兵糧や兵器も大量に集められ、なぜか攻城兵器も堂々と国境近辺に送られた。もう、誰がどう見ても戦争の準備にしか思えないのだが、ディアは大規模な訓練だと言い張った。

ディアが兵士集めに奔走しているなか、哲也は相変わらず毎晩熱心に成人の儀を行っていた。既に2回目に入入したためか、哲也はずいぶん気が楽になっていた。そのうえ相手の娘も少しは慣れてきていたので、気遣いがかなり減って前回よりも楽しめるようになっていた。

昨夜はカトレアが相手だったのだが、彼女は既にマグロ状態から脱していた。あえぎ声もなかなか良かったし、抱き心地はかなり良くなっていた。おかげで女体というものを、存分に堪能することが出来たのである。

「うーん、やっぱり王様っていいなあ」

哲也は、毎晩可愛い娘相手に腰を振るう現状に、大いに満足していた。

第19話 なんと、諸外国は大慌てになったよ

ディアは、国内から大勢の若者を徴兵し、兵士数は百万を超えるに至った。だが、これに驚いたのは諸外国である。まさか、これほどまでの大兵力を集めるとは予想だになかったのだ。当然ながら、大慌てで対策を練ることとなった。

ジパング北部を占領しているイギリス南部の国、ウエセックス王国では、王族や有力貴族が集まって真つ青になっていた。いまだに3万に届かない兵力しか用意していないのに、国境周辺に集結しつつあるジパングの兵力は最終的に50万に届くだろうという報告が入っていたからだ。少数の敵を叩くつもりが、10倍以上の敵を相手にすることになったのだから、慌てない方がおかしいだろう。

まあ、慌てるかどうかは置いておくとしても、戦略の大幅な見直しが必要になったことは間違いない。このままではジパング侵攻どころか、大陸にある領土を全て喪失という事態を招きかねないからだ。兵力の増強をどこまでするのかも、大きな課題である。動員出来る兵力によって、戦略は大きく変わってしまうからだ。

「なんとということだっ！こんなことになるとはっ！」

「さすが、鉄の女ディアというところか。まさか、ここまでやると

はな」

「ここまで堂々とやられては、もはや笑うしかないな」

「しかし、ジパング王の無能さは突き抜けているな。ここまでやって、訓練のはずがなかるう」

「だが、今回はその底なしの無能さが敵に幸いしたようだ。有能な王であれば、こんなことは認めんからな」

「所詮は、王は飾りということか」

「何を悠長なことを。このままでは、大陸の領土が全て失われるではないか」

「そうだ。いくらジパングの弱兵が相手といえども、10倍以上となると手に余る」

「攻城兵器も用意しているというではないか」

「そのうえ、敵の新型ボウガンは凄い威力だと聞いている」

「このままでは、本当に大陸の領土を守れないかもしれん」

「止むを得ない。全軍を投入するしかないだろう」

「せめて、敵の数を5倍以下にしないと話にならないな」

ウェセックス王国の貴族連中は、広大な領土を失うかもしれないと

青くなる。ところが撤退はまったく議論されず、徹底抗戦前提で話が進んでいく。そのためには、更なる兵力投入が必要になる。とりいそぎ、集められるだけの兵力を送り込んで敵の攻勢に耐え、その間に援軍を編成して送ることになった。

それだけでなく、ヴィアの協力を得てジパング軍の進行を少しでも遅らせることに全力を注ぐことにした。やや消極的ではあるが、堅実に思える作戦だった。もし攻め込まれたとしても、ジパングの憲法に違反した行動なので、敵はいずれは撤退せざるを得なくなる。だからそのときまで籠城して耐えるという目算なのだ。

ジパングの南西にあるナヴァラ王国でも、状況はウエセックス王国と似ていた。国境近くに3万を超える兵力を集めてはいるが、これ以上の兵力を集めるのは難しい状況にあった。今でさえ、治安維持に必要な最小限度の兵力しか持たない都市が激増しているのだ。それなのに、国境周辺に集結するジパングの兵力は、最終的に50万を超えると見られている。この国の貴族達も、真っ青な顔をしていた。

「なんてことだ。まさか、ジパングにこれほどの兵力があるうとは」

「ふん、どうせ烏合の衆だろうよ。数が多いとて、恐るるに足らん」

「何を言うか。戦争は数が物をいう。いくら弱くても、10倍以上の敵とは戦えんぞ」

「なあに。我が軍は精強だ。ジパングの弱兵など、一気に蹴散らしてくれよう」

「そんな無責任なこと言つて、もしも負けたらどうするつもりだつ！」

こちらの貴族たちは、未だに状況を理解できない愚か者がいて紛糾していた。これでは、敵が攻めてきたら一巻の終わりである。だが、彼らは運が良かった。隣接する小国アルゴン王国や大国レオン王国から、援軍の申し出があつたからだ。

アルゴン王国からの援軍は1万、レオン王国からの援軍は3万だった。ただし、この援軍には条件があつた。レオン王国からは3万以上の援軍を自前で用意するようにと言われたのだ。

これでナヴァラの貴族は援軍を送ることを決断し、大勢の若者が戦地へと送られることになった。しかし、これは大きな賭けだった。ジパングの反対側には、大国コルドヴァ帝国が控えていたからだ。もしもナヴァラ軍がジパングに大敗した場合、コルドヴァ軍が攻めてくるのは、火を見るよりも明らかだったのだ。

東のブルグンドでは、驚きと安堵感が広まっていた。ジパング軍が北に50万、南に50万向かっているにもかかわらず、ブルグンド方面には僅か千しか向かつていないことがわかつたからだ。

では、どうしてそうなったのか。理由として考えられるのは、国境に兵力を集めていないこと。それでブルグンドはジパングへの侵攻の意思無しと見られて、攻撃対象から外れたと思われた。

「ジパングに、まさかあれほどの兵力があるうとは」

「しかし、今回は我らが王に救われたな」

「うむ。我らも国境に兵を集めていたならば、攻撃対象となったであろっからな」

彼らは、とりあえず自分達の身に火の粉が降りかからないことを喜んだ。だが、その喜びがいつまで続くのか、知るものは誰もいなかった。

諸外国が慌てふためいているなか、哲也は相変わらず毎晩熱心に腰を振り続けていた。カトレアの抱き心地が以前よりも良くなっていたので、他の女の抱き心地も良くなっているかもしれないと期待していたところ、図星だったのだ。

初めての女はいずれも初々しくて可愛かったうえに、痛みに耐えて精一杯自分を受け入れようとするいじらしさが愛おしかった。二度目の女は初々しさはやや劣るものの、女らしさや美しさを増してい

るうえに、より積極的に自分を受け入れようとする努力するところや積極的に好意や愛情を示すところが可愛らしかった。

彼女達の素晴らしいところは、なんと言っても哲也に好意や愛情を向けてくこと。どんなに良い女でも、自分に好意を示さなければ抱き心地は悪くなる。それは、オナニーと大して変わることがないからだ。彼女達から与えられる好意や愛情は、身体だけではなく心も一体となるような高揚感や爽快感を与えてくれるのだ。

「まったく、女つてもんがこんなにいいもんだったとは、知らなかったよ」

哲也は、毎晩彼女達相手に腰を振る生活が、このままずっと続ければいいなと願うのだった。

第20話　なんと、電撃作戦が成功したよ

第20話　なんと、電撃作戦が成功したよ

反乱決行日と言われる日を翌日に控えて、哲也はディアと2度目の成人の儀を行うことになっていた。彼女は今のところ3番目に気に入っている娘であり、哲也にとって彼女と儀式を行うことは大きな楽しみでもあった。

「普段のディアはクールだからな。それが俺の腕の中では、別人のように可愛くなる。それがたまらないぜ」

哲也は、股間を膨らませながら儀式を心待ちにしている。その間、ジパング首脳の3人娘のことを考えていた。

長い金髪を背中まで伸ばし碧い瞳をした、意志の強さを感じさせる容姿端麗のヴィア。ミニスカート姿が多い彼女は気の強い貴族のお嬢様といった感じで、健康的な太股の魅力も加わり好みのストライクど真ん中。3人娘の中で一番の好み。

ブルネットの髪を肩まで伸ばし、エメラルドグリーンの瞳をした柔らかな表情をした可愛らしい娘のアンノ。ロングスカート姿が多い彼女は可愛い村娘といった感じで、守ってあげたいという気持ちになるほど気に入っている。

短いグレーの髪をした、キツイ性格を思わせつつも凛々しさを持つディア。スボン姿が多い彼女は容姿やプロポーションこそヴィアにやや劣るものの、お姉さま的な魅力が加わってヴィアといい勝負。

これら3人娘と例の一番お気に入りの少女を相手にする時は、特に心が弾んでしまうのは男として止むを得ないだろう。哲也は、どうやってディアを可愛がろうかと、そのことばかり考えているように見えた。

哲也が浮き浮きしている頃、ジパングの秘密基地ではきびきびと動く兵士達がいた。彼らは、これからジパングの将来を賭けた極秘作戦に従事するところだった。彼らはディア配下の精鋭部隊であり、反乱計画に加担した後処刑される覚悟をした者達ばかりだ。

「お前達、準備はいいか？」

指揮官と思しき男が、無線を使って次々と作戦の準備状況を確認していく。今のところ作戦準備は順調に進んでおり、彼ら極秘部隊の出撃まであと僅か。

「この作戦にわが国の未来がかかっている。わかっているとは思いますが、気を引き締めてかかって欲しい」

指揮官の言葉に、兵士達は深く頷く。

翌朝、国境の軍隊が動き始める。北部では50万の兵士が夜明けと共に陣地を出発し、国境沿いを行進していく。この動きを察したウエセックス王国軍は、各地の防備をがちがちに固めて攻撃に備える。

「やはり動き出したか」

「まさか本当に仕掛けてくるとはな」

「しゃらくさい。返り討ちにしてくれる！」

ウエセックス王国の將軍達は、気を張り詰めながら必死に情報を集めている。まだ敵の動きを全て掴めておらず、侵攻経路も推定段階なので効果的な反撃計画を立てられないためか、將軍達の顔色は優れない。

ナヴァラ王国やアルゴン王国の將軍達も、状況は似たりよったりだ。未だに敵の動きは一部しか掴めておらず、攻撃を受けていないことから反撃に移れないでいる。まるで蛇の生殺しのような状況が続いていた。

「ええい、来るなら早く来い！」

「まったく、何をちんたら行軍しているのだ」

「遅い、遅すぎるぞ。敵の攻撃はまだか」

じわじわと攻め込まれているような気がして、將軍達は苛立っていた。しかし、ジパング軍はなかなか攻撃を仕掛けてこないため、敵の目標はわからないまま時間だけが過ぎていく。

時間は夜明け前に遡る。

ジパング軍の精鋭部隊は、大型輸送機に乗って敵地に侵入していた。ジパングは遅れている分野でも1950年代の科学力であり、軍事部門ではベトナム戦争当時の米軍並みの装備がととのっていた。もちろん空母や輸送機もあるわけで、これまでは憲法違反になるため使われてこなかったに過ぎない。

これまで使われなかったとしても、今後も使わない利湯運はならない。そんなわけで、精鋭部隊は大型輸送機で敵地に侵入している。目的地が近づくと、指揮官は攻撃目標を兵士達に伝える。兵士達は、今始めて攻撃目標を知らされた。

「いいか、よく聞け。攻撃目標は敵の首都だ。作戦目的は、敵国首都の占領と王族貴族の拉致である。一般市民に対する攻撃は極力控えろ、いいな」

指揮官の言葉に、兵士達は絶句する。まさか敵地の中枢へ殴りこみをかけるとは、予想だになかったからだ。動揺する兵士達に、指揮官は発破をかける。

「いいか。これは王命による、我が国民救出作戦の一環である。戦争が目的ではないので、これは反乱ではない。繰り返すが、これは反乱ではない。だから、存分に働くがいい」

指揮官の言葉を最初は理解できなかった兵士達も、しばらくしてようやく状況が飲み込めた。だから、兵士達に配られたのが普通の銃ではなくて麻酔銃だとわかって、特に混乱は見られなかった。

「よし、降下しろ！」

指揮官の合図で、パラシュート部隊が次々と敵国首都近郊に降下していく。それから夜陰に乗じて首都に侵入。前もって手配しておいたスパイの手引きによって重要拠点を一気に制圧。敵襲はないものと油断していた敵兵を、ことごとく捕らえて牢屋に放り込み、夜明け前には首都にいるほとんどの王族貴族を捕らえることに成功した。

こうしてウエセックス王国の首都は、あっけないほど簡単に陥落した。電撃作戦は大成を収めたのである。パラシュート部隊は、精鋭部隊の名に恥じない働きをしたのだ。

捕らえられた王族貴族は全裸にしたうえ、両腕を後ろに回し縄で拘束して郊外に連行。臨時滑走路から輸送機に乗り込ませて、一気にジパングへと連行した。その後首都では戒厳令を敷いて市民の外出を制限。首都への出入りも制限して守りを固めた。この作戦による死傷者は敵味方共にごく僅か。大成功と言えた。

ナヴァラ王国やアルゴン王国も状況は同じで、兵士達が極端に減った首都を落とすのは容易だった。これらの国の王族貴族も、全裸で拘束してジパングへと連行した。

こうして王族貴族の拉致作戦はうまくいったが、作戦の成否は今後の交渉にかかっていた。

「そうか、作戦は成功したか」

昼前に3国の首都制圧の報告を受けた哲也は、ほっとした表情を見せた。愚王を演じて敵を油断させ、三国志の蜀滅亡をヒントに一気に敵の中枢を叩く戦術を考え出したのはいいが、どこまでうまくいくのか内心では心配していたのだ。

ところが、結果はパーフェクトに近い。敵国の王族と有力貴族はほとんど捕らえたという。そうなると、問題は今後の交渉をどうやって有利に運ぶかだ。ディアに意見を聞くと、適任はヴィアだという。

「私は脅すのは得意ですが、駆け引きは苦手なので。アンノよりはマシですが」

こう言われては、ヴィアに頼むしかなくなる。哲也は、ヴィアに交渉を任せることにした。

第21話　なんと、ヴィアは身体を張って交渉したよ

哲也から交渉を一任されたヴィアは、名誉挽回のチャンスと意気込んだ。

「ここで有利に交渉をまとめれば、もしかしたら首相に返り咲けるかもしれない!？」

地獄の底から抜け出せる蜘蛛の糸を見出したかのような希望を持ったヴィアは、大いに張り切った。その一方で、交渉が時間との勝負であり、難易度がかなり高いことも理解していた。

交渉の最優先事項は、ウェセックス王国に占領されている北ジパングの解放だ。それも、出来るだけ味方に血を流さないようにすること。しかも、なるべく早く手際よくだ。

そのためには、敵の実力者の協力が必須となる。占領軍を騙して本国に引き揚げさせるか、それとも拒めないような状況にして撤退命令を下すか。いずれにせよ、内部事情に詳しくてかなり実力のある者を味方につけなくてはならない。

ヴィアが目星をつけたのは、エゼルレッドという公爵だった。彼は公爵の中で最も力を持ち、国王に対する忠誠心が高いという条件を兼ね備えていた。今回の交渉相手としては、最適だといえるだろう。

「あとは、どうやって彼に協力してもらうかね。手段を選んでいる余裕はない……でしょうね」

ヴィアは、久々に頭をフル回転させた。

その頃、ウェセックス王国の王族貴族は、分散して監禁されていた。ただ、完全にバラバラにして監禁すると精神的な負荷が非常に重くなると思われたことから、原則として家族は近いところに監禁することになっていた。

例えば王族は、王と王子が同じ部屋である。その隣の部屋には王妃と王女という具合に、家族同士、互いの安否がわかるように配置したのだ。家族が無事であるとわかれば、あまり無茶な行動はしないだろうと考えてのことだった。

家族ではない男女を同じ部屋に閉じ込め、性交渉を誘発させて貴族の内部崩壊を図るという案もあったのだが、そんなことをするといわずに彼らの不信感を煽るだけという結論に達したため、当面は実行を見送ることになっていた。

そんななか、息子がいないエゼルレッドは一人部屋をあてがわれていた。彼はベッドの端に腰掛けながら、呆然としている。40歳を超えているにもかかわらず、普段の彼はまだ30代後半に見えと言われていたが、今の彼は歳相応に見える。今回の国家の一大事に大きなショックを受け、彼を一気に老けさせていたのだ。

「うつむ。奴らには、まんまと一杯食わされたな」

彼は慢心によって致命的な失敗を犯したことを後悔していたが、まさに後の祭り。今後自分がどうなるのか悪い予想しかできなかったし、王族に至っては恐らく処刑されるだろうと踏んでいた。彼としては全力で阻止したいところだが、今のところは打つ手無しの状況だ。いまや彼の国は滅亡寸前だが、時間だけが無情に過ぎていく。

そんな彼に、急な来客があった。突然ドアがノックされたかと思うと、続けてドアが開き、2人の女兵士と共に素っ裸の若い女が堂々と入ってきたのだ。長い金髪を背中まで伸ばし碧い瞳をした、意志の強さを感じさせる十代後半に見える少女だ。

「はじめまして、公爵様。折り入ってお話したいことがあるのですが」

全裸の少女は彼が呆気に取られている間に彼の正面に椅子を置き、そこに座ると胸を軽くそらして股を大きく開いた。彼のすぐ目の前に、張りのある可愛い胸が現れる。恥ずかしくなって視線を下にそらすと、そこには淡い金色で小さな逆三角形の叢が茂っていた。

「うっ！」

エゼルレッドは、思わず前かがみになって股間を隠す。熱い体液が身体の一部に流れ込んだため、固くなった棒がそり立って激しく自己主張を始めたからだ。そんな子供みたいに慌てる彼を見て、全裸の少女は笑う。

「まあ。女の私が包み隠さず全てを晒しているというのに、あなたはナニを隠そうとしているのかしら？」

自分を蔑むような言葉を聞いて、エゼルレッドは恥ずかしくなって

顔を赤くする。そして思い切って手を太股の横にどけて、恥ずかしい状態になっている自らの分身を裸女に晒す。

「これは失礼した。しかし、君は一体何者で何の用があつてここに來たのかね。しかも全裸で来るなど、どういふつもりだ？」

彼が全裸の少女を見つめると、彼女は整った顔に自然な笑顔を浮かべる。

「私はヴィアといいます。今日はあなたと交渉をしに來ました。この姿で來たのは、あなたに何も隠し立てするつもりはないということ、行動で示したかったからです」

ヴィアは、自分を信じて交渉して欲しいと懇願する。だが、彼は流石に二つ返事でウンとは言えず、返事をためらう。すると驚いたことにヴィアは、いきなり立ち上がったかと思うと彼の太股の上に座り、彼の背中に両手を回してぎゅっと抱きしめた。

「なつ、何のつもりだっ！」

彼は驚きつつも、若い女の心地よい温もりを拒めず、言葉だけでしか拒絶の意思を示すことが出来なかった。するとヴィアは頬を摺り寄せてきて、彼の耳元で囁く。

「私の心臓の鼓動が感じられるでしょう。この状態なら、お互いに嘘をつけば鼓動の乱れで容易に分かるでしょう。お願いですから、私と交渉をしてください。承知していただけたなら、私の背中に左手を回して抱きしめ、右手で私のお尻をなでてください」

ヴィアがそう頼むと、彼は少しだけ考えた後で言うとおりにした。

彼としてもジパングとどんなことでも交渉出来るならありがたいし、少なくともヴィアには自分と対等の立場で信義に則って話し合う誠意を感じた……ように思えたからだ。決してヴィアの抱き心地がいからではなく、お尻のさわり心地が良かったからではない……はずである。

こうして彼はヴィアとの交渉を始め、彼女と終始心臓の鼓動が互いに感じ取れるように密着した体勢を続け、彼女をずっと抱きしめていた。そして、彼女の股間に指で刺激を与えて性感を高めるよう努めると共に、時折胸を優しくていねいにマッサージをするなどして、交渉を少しでも有利に運ぼうとした。

だが、若い女の身体に惑わされたエゼルレッドは気付かなかった。彼の行動は、傍目にはヴィアと乳繰り合っているようにしか見えないうちに。

エゼルレッドとヴィアが交渉している様子を、少なくとも貴族が見ていた。エゼルレッドの部屋には覗き穴があり、両隣の部屋に貴族が連れられてきて、2人の痴態を見せ付けられたのである。エゼルレッドはジパングに恭順し、褒美として女をあてがわれているのだと説明されて。

「なんと、あの公爵がもう籠絡されたのか」

「公爵様も、所詮は男だ。色仕掛けには弱かったということか」

「まあ、相手が自分の娘ほどの若い娘とあらば、致し方ないか」

「しかし、なんとまあ羨ましいことよ」

貴族たちは、次々と驚きの言葉を口にする。股間を刺激されたヴィアが腰をくねらしているのを見て、誰もがエッチの本番真つ最中だと誤解し、公爵が色仕掛けで落とされたと思ったのだ。これは、公爵がジパングに対する反抗を貫いているならば、あり得ない光景だからだ。

裸の男女が向かい合わせになって仲睦まじく抱き合っていて、女の方が腰をいやらしく動かしながらエロいあえぎ声を出しているのを見れば、あえて説明しなくても誰もがエッチをしている思う。その相手が敵国の女であれば、誰もが籠絡されたと思うだろう。エゼルレッドは、交渉に応じた時点で既にヴィアの罠にはめられていたのだ。

「公爵は、我々に全面的に協力することを約束したぞ。おかげでおいしい思いをしているんだ。彼は近いうちに国へ戻って、我々のために働くことになっている。お前達も賢い選択をしる。家族もろとも処刑されるか、公爵のようにご褒美を頂くか、二つに一つだ。今すぐ返事をしろとは言わないが、返事は早いほうがいいぞ」

ディアはそう言って、次々とウェセックス王国の貴族達を籠絡していくのだった。

ヴィアが北ジパング解放の交渉をし、ディアがウェセックス王国の貴族達を籠絡している間に、哲也はアンノと一緒にウェセックス王国貴族の娘達を品定めしていた。

「いやあ、なかなか綺麗な娘が多いな。やはり、殺すにはもったいないな。あの娘達は、生かしたまま役に立ってもらうとするか」

そんな甘い哲也の判断に、アンノは賛意を呈す。

「王様の判断に賛成します。復讐は何も生みません。私達に協力する者達には、その対価を。協力しない者達に対しても、寛大な処置をお願いします」

そんなアンノの言葉に、哲也は甘いと思ったが黙っていた。哲也としては、シンプルに綺麗な娘を殺したくなかっただけなので、アンノの考えには内心では賛成しかねてはいたのだが、それは心の中にしまっておいた。

第22話　なんと、ヴィアは交渉を有利にまとめちゃったよ

エゼルレッドとヴィアの交渉は、三日三晩続いた。その間二人は片時も離れず、何も身に着けない状態でずっと抱き合っていた。風呂やトイレも一緒に入り、食事のときも抱き合ってたままで、寝るときも身体を絡めるようにして全裸で抱き合ってた。お互いの体臭が交じり合ったかと錯覚するほどに、二人はずっと肌を密着させて、お互いの心音を絶えず聞いていたのである。

交渉は、最初のうちはヴィアが有利に進めていた。若い女の身体に溺れた中年男が相手なのだ。普通に考えればこれほど楽な交渉相手はいないだろう。ジパング側に有利な条件を、エゼルレッドは唯々諾々と受け入れていった。唯一の誤算といえば、お互いの股間が擦り合わされ続けていて、ヴィアの性感が高まったままであることだった。

だが、2日目からは流れが大きく変わった。女性経験が豊富なエゼルレッドが本領を発揮し、ヴィアの性感帯を次々と発見していつて彼女の性感帯を攻め立てるようになったからだ。男性経験が皆無に近い初心なヴィアは、性感帯を強く刺激されるたびに心を乱し、交渉は段々とうまくいかなかった。

そんな状態が1日半続いたのだが、それから状況は再び大きく変わった。寝ている時や風呂食事トイレの時以外はずっとお互いの心音を感じていたためか、それとも四六時中肌を合わせていたためか、エゼルレッドは本格的にヴィアを好きになってしまったからだ。そのため、交渉の重点が自国に有利になることから、ヴィアの身体を堪能することへと変わっていったのである。

こうなると、一方的にヴィアが有利になる。ジパングが不利になる条件を飲まない代わりに、自分の身体がいじられるのを我慢すればいいだけのだから。おかげでヴィアの身体の中で、エゼルレッドに触れられていない場所は無くなってしまい、全ての性感帯を彼に知られることになったが、交渉はジパングにとって予想以上に有利な内容になったのである。

具体的な交渉内容だが、初日はウェセックス王国の王族の処遇が焦点となった。王族の処刑は既定事項であり決して譲れないとするヴィアに対して、エゼルレッドも王族の助命は絶対に譲れないと強硬に言い張り、お互いの主張は平行線をたどった。そこでヴィアは処刑の延期をエサにして、次々とエゼルレッドの譲歩を引き出していた。

ヴィアは、ジパング北部を解放するために一計を案じた。それは、ジパング北部の兵士をウェセックス王国の周辺国へ攻め入らせて、一気にブリテン島を統一するというものだった。エゼルレッドはそんな無茶苦茶なと猛反対したのだが、王族の即時処刑か処刑延期か二者択一を迫られて、結局クビを縦に振ることになった。

こうしてウェセックス王国軍は、周辺国であるオークニー、マレー、アルバ、ストラスカライド、デーンロウ、ウエールズの各王国に攻め入ることになった。

二日目は、王族と共に貴族の処遇が焦点となった。ヴィアの案は、現在の王を廃して有力貴族の中から女王を選び、その女王にジパング有力貴族の子供を産ませて王位を継がせるというものだった。その代わり、エゼルレッドらが協力する限り王族の処刑は延期する。

更にエゼルレッドに敵対する貴族は処刑し、その領地はジパングの貴族が引き継ぐ。協力を誓った貴族の家族は、裏切らない証にジパングで生活する。領主も1年の半分はジパングで生活する。とまあ、参勤交代制度に近いものだった。

これにもエゼルレッドは猛反対した。ヴィアの耳をはむはむと甘噛みし、うなじにくねくねと指を這わせ、乳房をモミモミ揉みまくり、乳首をいじりまくり、股間に指を出し入れして刺激を与えて攻め続けた。ヴィアはこれらの性的な刺激から逃れようとして身体をよじるが、かえってお互いの肉棒と肉ヒダを擦り合わせるはめになって、余計に性感を高める結果となった。

心乱れたヴィアは、譲歩に譲歩を重ねた。最初はウエールズを征服すれば、条件付で王子をその国王にしても良いと言ったのだが、エゼルレッドはあくまで現在の王国にこだわった。そこで王女に哲也の子供を産ませて、その子に王位を継がせるところまで譲歩した。

三日目は、引き続き王族と貴族の処遇が焦点となった。エゼルレッドの指技でいやがおうにも性感を高められ、いわゆる本気汁を垂れ流すようになっていたヴィアは、更に譲歩して哲也と王女の子供を王子の子供と結婚させる条件で、王子の子供に王位を継がせることを認めてしまった。

だが、そこからヴィアの反撃が始まった。王女を次期国王とすること

とで、血統にこだわるエゼルレッドの攻撃の手を緩めさせ、王子が王位を引き継ぐことを諦めさせた。更に王子の処刑延期に対しても条件を付けた。王子の嫁は、哲也の子を産んだ娘に限定したのだ。

これにはさすがにエゼルレッドは猛反発したが、嫁を取らなければ処刑されないことを指摘したことで、好きなだけヴィアの胸を揉ませるのを許したことで矛を収めた。

そして貴族の処刑は最小限に留めることとし、ジパング貴族から婿を取ることを条件にして、娘に領地を継ぐことを認めることとした。これによって、領主の血族が領地を治めるという建前となった。

エゼルレッドにとっても、交渉結果は満足のいくものになった。王族の血を絶やさなくてすんだし、王位を他国の貴族に譲ることも阻止できた。貴族の血統も多くが守られそうだ。最悪の場合、男は全員殺されて女たちは犯されることも覚悟していたので、彼にとって交渉結果は予想以上だった。

予想外だったのは、交渉相手の娘だ。ずっと抱き合っていたせいか、いつの間にか情が移って好きになってしまったのだ。ところが孕ませることも挿入はおろか、キスですら許してくれなかった。おかげで、最後の方で調子が狂ってしまった。

そこで彼は、交渉が終わった後で懇願した。親交を深めるために、もう一晩一緒に寝ようと。

「せめてもう一晚、一緒に寝てくれないか」

エゼルレッドが懇願すると、ヴィアは合図をして兵士を呼び出した。するとそこには、覆面をした女が一緒にいた。

「公爵様。彼女は深い事情があつて、公爵様の子種を欲しがつています。もちろん、肌に傷さえつけなければ何をしようと思いのまま。そんな彼女とキスさえも認めない私、どちらを選びますか？」

ヴィアは、そそり立っている彼の股間をチラ見しながら選択を迫った。普通の男なら、こんな状態ではどちらを選ぶのかは明白。そもそもこうなることを見越して、夫が原因で子供が出来ない女を探し出したのだから。しかし、次の瞬間ヴィアは自分の耳を疑った。

「どちらも選ばう。なあに、3Pは思つた以上にいいぞ」

そう言うなり、エゼルレッドに押し倒されてしまった。そして彼の指図で女が舌を絡めてきた。彼はキスをしてはいけないと言つたが、彼女の方は禁じていなかったことを逆手に取つたのだ。

「ん、ふうん」

女に口内を蹂躪され、彼に胸を揉みしだかれて、ヴィアは次第に絶頂へと向かうのだった。

そして気付いたときには夜明けで、彼に腕枕されているところだっ

た。左手は彼の肉棒をしつかりと握っており、股間からは本気汁が溢れ出ている。ヴィアは彼が生きていることを確認し、彼が約束を違えなかったことを知った。まだ1回しか穢れを被っていないヴィアと交われば、男は死ぬはずだからだ。

「しかし、やられたな」

そう言いつつも、ヴィアはあまり嫌な顔はしていなかった。ヴィアも彼に好意を抱くようになっていたからだ。もつとも、哲也に対する愛情とは比べ物にならないのだが。

こうして、ヴィアはなんとか交渉をまとめたのである。

交渉結果を聞いた哲也は、内心では大喜びだった。特にブリテン島を征服するという作戦を考えたヴィアに対する評価を、一段と上げた。

「どうだ、ディア。この企みはうまくいくかな？」

哲也の問いかけに、ディアは深く頷く。

「ええ。我が軍が協力すれば、更に確実となるでしょう」

ディアは、侵攻軍に対する様々な援助を提案したので、哲也はそれを承認した。もちろん哲也が喜んだのはそのことだけではない。王女や他の貴族の娘の穢れを被うことが期待出来るからだ。少なくとも

も、王女は確実に穢れを祓う事になるだろう。一目見て王女のことを気に入ってしまった哲也は、王女の穢れを祓う日が来るのを待ち遠しく感じるのであった。

第23話　なんと、野心満々の王女がいたよ

エゼルレッドは、ヴィアと別れるとその足でウェセックス王の下へと向かった。

「申し訳ありませんっ！」

彼は、王に会うなり頭を下げて詫びた。続けて交渉内容を報告する。

「私の力が及ばないばかりに、陛下をこのような場所からお救いすることはできませんでした。ですから、いかなような罰も受けましょう。いえ、どうか私めに罰をお与えください」

エゼルレッドの剣幕に、側にいた王子は驚くばかりだったが、王は違った。大きな身体に似合わない、優しい目でエゼルレッドを見つめる。

「いや、お前には感謝している。王家の者が皆殺しにされても不思議ではないというのに、王家の血筋を守ってくれたではないか」

ウェセックス王は、エゼルレッドに王家の血を守ってくれて感謝すると重ねて言う。それから、交渉内容から類推するに、自分と王妃は殺されない可能性が高いことが分かったと言う。

「それは、いかなる理由からでしょうか」

「うむ、簡単なことだ。娘に王位を継がせた後は、私の価値は格段に下がる。そんな私を無理に殺す必要はないはずだ。おそらく、孫

が王位を継ぐ頃に私は無罪放免となるだろうな」

ウエセックス王は、続けてエゼルレッドに上手くやれと言う。

「は？どういう意味でしょうか？」

首を傾げるエゼルレッドに、王は他国への侵攻だと答える。

「お前が上手く他国を攻め落とせば、そのうち1国くらいは王子に与えてくれるかもしれん。そうすれば、結果的に我が国の勢力は更に増すだろう。ジパング北部を潔く返すのだ。それくらいの見返りを期待しても良からう」

王は、捕らわれの身でありながら自国の勢力拡大を狙っている。そんな王を見て、エゼルレッドは頼もしく思うのだった。

続けてエゼルレッドは、王妃と王女に交渉結果を報告した。何か文句を言われるかと思ったのだが、返って来たのは労いの言葉だった。

「どうやら、問答無用で殺されるような事態は避けられたようです。そうになると、後は待遇改善を要求することにしましょうか」

王妃は、目に見えてほっとしていた。とりあえずとはいえ自分達の処刑は延期されたのだし、王子と王女に関しては処刑自体が執行されないのが確実となったからだろう。

「あとは、私がジパング王に気に入られるように努めればよいのですね。優しい方であればいいのだけれど」

王女エゼルイブも、家族の命が守られそうだと思ったのか、かなり落ち着いた雰囲気になった。エゼルレッドは、ジパング王の子供を産むことになったことについて謝罪しようかと思ったのだが、王女がそのことについては怒っていないようだったので謝罪はやめた。

そもそも貴族の娘であれば、必要とあらばどんなに嫌な男が相手であつても結婚しなければならぬし、子供を産まなければならぬ。だから今回のことは謝るに値しないとエゼルレッドは判断した。ならば、王女を安心させるべきだと思い、聞いた範囲のことを話すことにした。

「ジパング王は、女性には基本的に優しいと聞いております。ジパング王に穢れを被ってもらった娘は、例外なくジパング王を優しくて素敵な方だと褒め称えているそうです」

「そうですか。それはいいことを聞きました。ならば頃合を見て、家族の待遇改善を頼んでみることにします。あとは、一日でも早くジパング王の子供を産むよう頑張りましょう。私が娘を産んで兄の子に嫁がせるのが理想なのですが、そう上手くいくでしょうか。そういえば、私はジパング王から何度子種をいただけるのですか？」

エゼルイブの質問に、エゼルレッドは明確に答えられなかった。まさか、彼女がこれほど早く乗り気になるとは思いもしなかったこともあり、交渉の際に話題にすらしなかったからだ。彼は、早速確認しますと答えるに留まった。

同じ頃、哲也はちょっと渋い顔でアンノと話をしていた。

「申し訳ありません。交渉は難航してまして……」

アンノは、そう言つて頭を下げる。彼女にはナヴァラ王国やレオン王国相手の交渉を任せていたのだが、あまり上手くいっていないというのだ。ウエセックス王国との交渉が早くまとまったからいいものの、そうでなければ大変な痛手になったことだろう。

とはいえ、まだ時間的な余裕がある。哲也としてはこのまま交渉を継続させるか、それとも別の者に変えるか、思案のしどころであった。ウエセックス王国と違って、ナヴァラ王国やレオン王国はジパングの領土を占領しているわけではないので、急いで交渉をまとめる必然性はないからだ。

しかし、だらだらと交渉を続けても得るものは少ない。

「まあいいや。ウエセックス王国との交渉はまとまったし、こっちもヴィアに任せてみるか。それでいいかな？」

哲也の提案に、アンノは嬉しそうに頷くのがだった。

哲也がヴィアを呼んだところ、彼女も哲也に確認したいことがあるという。そこで尋ねたところ、意外なことを聞いてきた。

「ウエセックスの王女エゼルイブから何度国王の子種を頂けるのかとの質問がありました、どのような返事をするのか迷っていたところなのです」

ヴィアが言うには、あまり回数が多いと他の貴族から妬まれる可能性が高いという。だが、哲也はそれには答えず別の質問をした。

「何人子供を産んでいいのか、そういう意図で聞いたんじゃないのか？それとも俺の考えすぎか」

哲也の疑問に、ヴィアはそれは違うでしょうと答えを返す。

「こういう場合は、産むのを許される子供の数は一人と決まっています。けれども子種を頂く回数が少ないと、それすらまなりません。なので、許される回数が少なかった場合は、回数を増やして欲しいと言つて来るでしょう」

その答えを聞いて、哲也は嬉しくなった。敵国の王女にエッチをねだられるなんて、なんとも嬉しいシチュエーションだからだ。

「そうだな。なら、とりあえず10回だと答えてくれ。但し、王女の態度次第で回数は増減するともな」

哲也は、王女に自分の思い通りのことをさせようと目論んでいた。自国の娘に対してはあんまり酷いことは出来ないが、敵国の娘であればそのハードルは低くなる。哲也は、王女にどんな卑猥な言葉を言わせてやろうかと、今から楽しみに思っていた。

ヴィアは、哲也と別れ際にナヴァラ王国やレオン王国との交渉を命じられた。それと同時に、色仕掛けは二度としないようにきつく言われてしまった。

彼女としては任務に忠実に従っただけなのにと多少不満に感じたが、それを言葉にすることはなかった。哲也が自分のことをどうでもいいと思っていれば、色仕掛けを禁止されないであろうと思ったからだ。

それよりも、ヴィアとしてはナヴァラ王国やレオン王国との交渉が遅れていることが気になった。この2国の兵力を、なんとか他の場所に振り向けたいと思ったからだ。

ヴィアの考えでは、この2国の兵士をブリテン島に送り込んで他国攻略に協力させると共に、攻略後は守備兵として置きたかった。そうしてブリテン島の兵士は根こそぎイベリア半島に送り込んで、コルドヴァ帝国を攻めるのに使いたかったのだ。

コルドヴァ帝国はジパングと領土を接していないので、直接侵略を受けたことはない。しかし、ダークエルフの尖兵であると見なされていることから、ある意味ナヴァラ王国やレオン王国以上に潰しい国だったのだ。

だが、このまま手をこまねていれば、コルドヴァ帝国はナヴァラ王国やレオン王国を滅ぼして、その勢いでジパングに攻め込んでく

る可能性があった。それだけは絶対に阻止しなければならない。

「仕方ないな。アルゴン王国の王族は、この際皆殺しも止む無しとするか」

ヴィアは、最初にこれまで見向きもされなかった小国、アルゴン王国に的を絞った。ウエセックス王国の王女や貴族の娘にジパング王の子供を産ませて、ナヴァラ王国やレオン王国、アルゴン王国の国王に据えることにしたとはったりをかまして、お前達は不要になったと通告したのだ。

慌てたのは、アルゴン王国の貴族達である。流石にこのままでは近い将来処刑されてしまうと思う者が出て、ジパングに恭順したいと願い出る者が相次いだのだ。

だが、ヴィアはこれを冷たくあしらった。お前達に利用価値は認められないと。ヴィアの冷たい態度に処刑が近いのではないかと恐れた貴族達は、ナヴァラ王国やレオン王国の貴族に冠する情報提供を申し出た。

これに対し、情報提供だけでは意味がないとこれもはねつけた。ヴィアは、ナヴァラ王国やレオン王国の貴族は積極的に協力する者以外は皆殺しにするつもりなので、それを上手く選別出来れば利用価値を認めて助けてやるとアルゴン王国貴族に約束した。

彼らは自分の命がかかっていたためか、精力的に働いて多くのナヴァラ王国やレオン王国の貴族を味方に引き込むことに成功した。アルゴン王国は小国であることから情報収集にはかなり力を注いでいて、両国貴族の醜聞や秘密の情報を豊富に持っていたことから、彼らを攻略するのに大いに役立ったのだ。

このようにして多くの貴族を味方に引き入れたうえで、ヴィアはレオン王国やナヴァラ王国の王族に交渉をもちかけた。

「ふん、ジパングなど恐るるに足らず。今に目に物見せてやるぞ！」

レオン国王アルフォンソは粹がったが、ウェセックス王国がジパングの支配下に入ると教えたところ、目に見えて動揺した。

それからレオンの王女アドジンダにウェセックスの王女を引き合わせて、彼女の口から事実——ウェセックス王国が事実上ジパングの軍門に下ったこと——を伝えさせた。更にヴィアが自分の構想を彼女に伝える。すると、アドジンダは長く悩んだ末に腹を決めたようだ。

「分かりました。私もウェセックスの王女に倣ってジパング王の子を産みます。そうしなければ、例え国は残ったとしても王家の血が絶えてしまうのですね？」

ヴィアが頷くと、アドジンダは不敵な笑みを浮かべながら挑戦的な目をヴィアに向ける。

「私も一国の王女です。ウェセックスの王女には負けたくありません。彼女よりも早くジパング王の子を産んで見せましょう。いえ、それだけではありません。我が息子を鍛え上げて、将来必ずやジパング王位を継がせて見せましょう」

彼女は、猛禽類のような猛々しい目でヴィアを睨みつける。レオンの王女は、捕らわれの身でありながら堂々とジパングを将来我が物にすると言い放ったのだ。その自信満々の態度と凄まじいまでの胆

力に、さすがのヴィアも恐れ入ったほどである。

ともあれ、ヴィアはアドジンダの予想外に大きな野心を利用して、彼女にレオン国王位を継がせることを認めさせた。そして、レオン王国を事実上の支配下に置くことに成功した。将来国を乗っ取られる危険性をはらんだ、とても危うい支配ではあったが。

それでも、この交渉成功は有意義だった。レオン王国との交渉がまとまると、ナヴァラ王国も態度をころつと変えたからである。おかげで、10万近い兵士をブリテン島へ送るめどが立ったのである。

第24話　なんと、王女に求婚されたよ

哲也は、ヴィアの報告に満足していた。交渉結果は上々だったからだ。

まずレオン王国だが、国王の子供は王女アドジンダしかいなかった。彼女に王位を継承させる代わりに哲也の子を産ませることになった。それに加えて女子の跡継ぎしかいない有力な公爵家があったので、その娘に爵位を継がせると共に哲也の子を産ませることとした。その子が次の国王や次期公爵となるのだ。

その子らは幼いうちに国王や公爵となり、哲也が後見人として思いのまま動かすことになる。そうして王族と有力公爵家の親族を支配下に収め、事実上レオン王国を支配するのだ。少なくとも、しばらくの間はレオン王国軍を自由に動かすことが出来るようになり、ブリテン島征服がより容易になるだろう。

次にナヴァラ王国だが、国王には王子が2人と王女が1人いた。そこで王位継承者を、彼らに選ばせることにした。ただし、王子が王位を継ぐ場合には婚約者に哲也の子を2人産ませるか、あるいは哲也の子を2人産んだ女を妻とするという悩まし条件を付けて、選択に時間がかかるようにした。

王女については、王位を継ぐかどうかに関わらず哲也の子を産ませることとした。王女が王位を継がない場合には、彼女を大公として

広大な領地を治めさせることにして、ナヴァラ王国に対して強い影響力を保持するためである。

これらの条件に加えて、王位が定まるまでは軍の指揮はレオン王国に委ねることや、いくつかの領地をジパング貴族に与えることを認めさせた。もともと、王位が定まるのにはかなり時間がかかりそうである。これで当分の間はナヴァラ王国軍を容易に動かせるだろう。

アルゴン王国については、国土が狭いことや王女がまだ幼いこともあって、特に条件は付けなかった。ただし王と王女の帰国は当分の間は認めず、王妃の帰国のみ数か月後に認めることとした。そのうえアルゴン王国軍についても、レオン王国軍の指揮下に入れることを認めさせた。

こうして、国境に展開しているナヴァラ王国軍6万、レオン王国軍3万、アルゴン王国軍1万をブリテン島へと送る手はずがととのった。これに加えて、更にレオン王国軍を5万集めて援軍を送ることが出来そうだという。これだけの軍勢であれば、ブリテン島全土を征服するのは時間の問題だろう。

他にも、有力貴族の娘は優先して哲也が穢れを被うことになった。ただし穢れ被いはジパング貴族の娘を優先することとし、穢れを被う条件もジパング貴族と異なりシエスタ達メイドと同じ条件にしたのだが、それでも少なくない貴族が哲也による穢れ被いを希望した。

それは即ち、その貴族一門がジパング傘下に収まることと同義であったので、哲也はこれらの王国支配が容易になると単純に喜んだ。

「これで、更に2人の王女と公爵令嬢とエッチ出来るのか。王女とエッチするっていうのは、やっぱり男のロマンだよな。加えて貴族の令嬢相手にいい思いも出来そうだし、今から楽しみだな。それにこれでイギリスとスペインを手に入れられそうだな。そうすれば、ジパングも安泰かな」

しかし、ヴィアの報告に意外な話が含まれていた。レオン王女アドジンダが、哲也との面会を望んでいるというのだ。哲也は少し迷ったが、結局面会に応じることにした。

「うーん、どうするかなあ」

哲也は迷っていた。哲也と面会したアドジンダは、いきなり求婚してきた。正式な婚姻をしたいというのだ。そうすることによって、哲也はレオン王国の共同統治者になるという。普通に考えると、そう悪い話ではない。

「でもなあ。何か嫌な予感がするよなあ。俺は、言わば敵の親玉だもんな。いきなり殺されるかもしれないよなあ。そんな信用できない嫁さんなんて、やっぱり嫌だよなあ」

哲也は何か危険な感じがしたので、この話を断ろうと思った。だが、自分の方から断るのもなんだか不利になる気がしたので、王女に対してハードルの高い要求を押し付けることにした。

他の貴族の娘と同様に全裸教徒と共に街を全裸でデモ行進することや、ヌード鑑賞会に参加することはもちろんのこと。それに加えて常に全裸でいることや、なるべく大勢の男に裸身を晒すことを要求したのだ。

レオン王国では、貴族の娘が裸身を晒すことを恥だと考えられているうえ、結婚前の娘はみだりに男の前で肌を晒さないという。なので、この条件ならば相手の方から断るのは確実だろう。だが心配なのは、断った後に相手がどんな動きをするか予測がつかないことだ。

「そうだ、ヴィア。お前が彼女を監視するんだ。何かおかしい動きをしないか、見張っている。いいな」

念には念を入れて彼女を監視せよという哲也の命令に、ヴィアは黙って頷いた。

第25話　なんと、王女は全裸でデモ行進したよ

哲也は、今後の作戦行動を聞くために電話でディアを呼び出した。ドアが開いて彼女の短いグレーの髪が見えるやいなや、哲也は質問を投げかける。

「どうだディア。作戦は順調か？」

哲也の問いかけに、ディアは少し遅れていると答える。

「北部からの撤兵はまだ始まったばかりですし、ブリテン島へ向かうための輸送船も集まりきっていません。今しばらく、猶予を頂きたい」

彼女によると、攻撃開始までにあと半月はかかる見込みだという。交通手段が発達した現代ではないので、時間がかかるのは止むを得ないようだ。

「そうか。では、どこから攻めるつもりだ？また、どのくらいで戦いが終わる見込みを教えて欲しい」

哲也の次の質問に、彼女は苦笑する。今まさに、悩んでいる問題だったからだ。

「最初は、デーンロウ王国から攻めようと思います。続けてストラスクライド、アルバ、マレー、オークニーの順に攻めていき、それからウエールズやアイルランドを攻めようかと。期間は1つの国につき、1か月は必要かと思います。ですから最低でも半年、長けれ

「ば1年以上かかるでしょう」

彼女の答えに、哲也は閉口した。彼女は南から北へ順々に攻めていくという、ある意味セオリー通りの作戦を立てているようだが、それではあまりにも時間がかかりすぎるのだ。コルドヴァ帝国がいつレオン王国やナヴァラ王国に攻めてくるかもしれない現状では、1年というのはあまりにも長すぎたのだ。

「戦争のことはよく分からないけど、弱い国から攻めていったらどうかな。出来れば大軍で脅して降伏させて、その国の兵士を吸収して次の国に攻めるんだ。それで、最後に一番強い国を攻め滅ぼす。そういう作戦では駄目かな？」

哲也は、なるべく兵士の損耗は避けたかった。コルドヴァ帝国に対して、なるべく多くの兵士を揃えたかったからだ。戦争では、数は力なり。その数を揃えるために、避けられる戦闘はなるべく避けてほしかったのだ。

兵力が拮抗していれば、普通ならば敵の降伏はないので戦いが起こり、その結果兵力は減少する。しかし、圧倒的な兵力で相手を降参させてその兵力を吸収すれば、自軍は更に強大になっていくことが可能だ。もちろん、上手くいけばの話ではあるが。

「なるほど、悪くない考えですね。作戦を再検討します」

ディアは、哲也の要望を作戦に盛り込むことを検討すると請け負った。

ディアと話し終わった哲也は、風呂に入ることにした。今日の風呂は、アンノの番である。背中からシエスタに抱かれ、正面からアンノと抱き合い、アンノを後ろから抱きしめるメイドの胸をモミモミするという体勢で哲也は風呂に入る。

長くディープキスを交わした後で、哲也はアンノに今後の展望について相談する。コルドヴァ帝国を攻めるまでの算段はついたのだが、その後どうするのか決めかねていたからだ。守りを固めるか、それとも勢いに任せて攻勢を続けるのか、判断が難しいところだ。

「イーストフランクかサウスフランクを攻めるのが順当なんだろうけど。何かまずいことがあるかなあ」

哲也が聞くと、アンノは気がかりなことがあるという。

「元は我が国と一つの国でしたから、他国の軍隊を使って攻めるという手段を採るのは好ましくありません。同胞意識に大きなひびが入りかねません」

アンノの説明に、哲也もなるほどなと頷く。同胞意識というものがあるのなら、攻め込んで従わせるよりも交渉によって味方につけた方が良さそうだ。3国で同盟を組むことが出来れば、かなり強大な戦力となる。

ただ、これには大きな問題がある。同盟の実現性が未知数ということと、同盟を組む必然性や同盟による利益というものが明確ではないことだ。そんな状況では、同盟を組むことは不可能に近い。

「だが、考えとしては悪くない。問題は、東に向かうか南に下るか。いずれにせよ、考える時間はまだある。両方の可能性を考えて、どちらに転んでもいいようにしておくか」

哲也はそう呟くように言うと、再びアンノの口の中に舌をねじ込んでこねくり回す。彼女とは何度もキスを交わしており、普通のキスには飽きてきたところなので、ちょっと趣向を変えてみたということだ。

それから数日後、ヴィアから驚くべき報告があった。レオン王女アドジンドは予想に反して哲也の要求を受け入れ、ヌード鑑賞会に積極的に参加しているという。そればかりか、今日行われる全裸教のデモ行進にも参加するということだ。

「そんな、バカな。彼女は王女だろ？王女としての体面やプライドはどうなるんだ。全裸デモ行進に参加するなんて、本当かよ」

到底信じられないという哲也に、ヴィアは困った顔をして言う。

「それが、彼女は最初は確かに嫌がっていたのですが、我が国の貴族の娘が全裸で脚を広げている姿を見て態度を豹変させました。ヌード鑑賞会でもかなり大胆なポーズをとっていました。そればかりではありません。彼女は夜にもヌードを披露していました、これが仕事帰りのサラリーマンに大好評なのです」

その返事を聞いた哲也は、半信半疑ながら全裸教のデモ行進を見に

行くことにした。すると、全裸デモ行進隊の中には、確かにオールヌードで歩くアドジнда王女が見えた。

羞恥心を完全には抑えられないためか顔を少し赤くしながらも、堂々と胸を張り背筋を伸ばしてオールヌードを余すところなく晒しながら彼女は歩いていった。股間の茂みは髪の毛の色と同じく金色に輝いていて、エメラルドグリーンの瞳は自信に満ちているように見える。

標準よりも少し大きめだが張りのある乳房をぷりりと揺らし、やや小さめなお尻をきゅっと締めながら歩く姿は並みのモデル以上に堂に入っていた。そのうえ顔は現代のモデル以上に美しいものだから、彼女は多くの視線を浴びていた。哲也はまさか本当に実行するとはと弱々しく呟く。

そこに追い討ちをかけるように、このままでは彼女を王妃として迎えることになってしまいますとヴィアは言う。そこで哲也は卑怯だと思いつつも、条件の後出しをすることにした。王女どころか、娼婦でさえも絶対に承知しないであろう条件を。

「仕方ない。彼女にこう言え。王妃になりたければ、公衆の面前で排尿、排便、放屁をしろ。公衆の面前以外でそのような行為を行ったら、直ちに王妃になる資格を失うとな」

それを聞いたヴィアの顔は真っ青になった。そして、そんな鬼畜なことを言いたくないと哲也に泣いて頼んだが、哲也はもう後には引けなかったので、ヴィアに必ず王女に伝えるよう厳命した。

それからしばらくして、ヴィアは哲也に言われた通りの条件をアドジンダに伝えた。すると、彼女は大粒の涙をぽろぽろとこぼして泣き崩れた。

「ひどい、あまりにも酷なことを言いますね。こんな酷いことを言うなんて、ジパング王は私のことを心底憎んでいるのでしょうか？ 私がどれほど悩みぬいて生まれたままの姿を人目に晒したのか、分からないはずがないでしょうに。そんなことを言うのなら、いつそのこと私に死ねと言ってもらったほうがどんなに気が楽か……」

ヴィアは、打ちひしがれて泣き続ける彼女にかける言葉が無かった。

第26話　なんと、再び王女に求婚されたよ

月曜日の朝、一晩中悩みに悩みぬいたアドジンダは一大決心をした。彼女は緑の目の下に大きなクマをつくり、憔悴しきった顔に不気味で妖艶な微笑を浮かべる。

「公衆の面前で排尿、排便、放屁ですか。なんという下品で恥さらしな行為なのでしょう。まともな神経の女が出来ることではありません。どんなに淫乱な女でさえ、ためらうことでしょう。ですが、いいでしょう。毒を食らわば皿までといいます。王妃になれるのだったら、どのような恥辱にも耐えてみせましょう。こうなったら、堕ちるところまで堕ちてみせましょう」

耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、大勢の平民に対して惜しみなく美しい裸身を晒し、恥ずかしくてとてもじゃないが人には見せられない大事な場所をも大きく拡げて白日の元にさらけ出したアドジンダは、既にもう引つ込みがつかなくなっていたのだ。ここで王妃になるのを諦めるくらいなら、いっそのこと死んでしまおうとさえ思っていた。

「こうなったら、とことん道化になりましょう」

彼女は、見張りの兵士にヴィアを呼ぶように頼むのだった。

同じ月曜日の朝、哲也はふかふかのベッドで良い気持ちで寝ていた。腕枕をしている左手が少し痺れていたが、女体の心地よい温もりはとっても気持ちが良いくて、腕の痺れによる不快感を軽く吹き飛ばしていた。そう、哲也はウェセックスの王女エゼルイブに横から抱きつかれながら寝ていたのだ。

なぜ二人が裸で抱き合って寝ているかというと、それはもちろん昨夜成人の儀を行ったからだ。本来はヴィアの順番だったのだが、彼女の順番を1月延期してエゼルイブと儀式を行ったのだ。理由は単純明快。ウェセックス王国の支配を強化するためだ。

哲也の経験からすると、成人の儀を行った女は例外なく哲也のことを愛するようになっていた。大好きとか愛していると囁く女たちの言葉を最初はリップサービスかと思っていたのだが、実はそうではなさそうだということに気付いたのがごく最近のこと。

それならば、他国の女でも試してみようと思いついて、エゼルイブに見事白羽の矢が立ったというわけだ。彼女が哲也のことを愛するようになれば、ウェセックス王国の支配は容易になる。哲也にとって、それは色々な意味で都合がいいのだ。

「しかしなあ。やっぱり可愛いよなあ」

哲也は彼女の寝顔を優しく見つめる。彼女が本心ではどう思っているのかまだ分からないが、自分の子を産むという女に対してはどうしても好意を持ってしまふのだ。当然、憎からず思うことになる。顔の造形は良いのだから、見れば可愛い奴だなとついつい思ってしまう。

それに、彼女は哲也にとって1週間振りの処女である。処女の相手

が続いた時はあまり有り難味を感じなかったが、たまに相手をする処女と言うのはなんだかとても気持ち良かった。全てにおいて反応が初々しく、つつい時間をかけて相手をしてしまったほどだ。

「これは、順番をちよつと変えてみようかな」

このままでは、10か月後には1月の間に一気に20人も処女を相手にすることになる。それでは有り難味が無いので、処女の相手をするのを週に1〜2回にしようと思ひ立つ。

そんなエツチなことを考えていたので、自分の身に何が起きようとしているのか、気付くのが遅れたのである。

哲也が、そろそろ朝食を終えようかというときだった。ヴィアが大慌てでやって来た。そして、至急伝えたいことがあると言う。

「王様、大変です！アドジング王女は、昨日王様が出した条件を全てのむと言ひ出しました。だから必ず王妃にして欲しい、約束を違えたら命を絶つと言ひています」

ヴィアは、哲也の横に貴族の娘がいたので直接的な表現は避けた。だが、哲也には十分意味は伝わった。王女は、再び哲也に対して求婚してきたのだ。哲也は、思わず吹き出しそうになった。まさかあんな無茶苦茶な条件を飲むとは思わなかったからだ。だが、このままでは彼女を王妃にするしかなくなってしまう。そこで哲也は時間稼ぎをすることにした。

「命を絶つとは、穏やかではないな。どうやら彼女は、何か誤解しているようだ。だからヴィア、悪いが王女には少し待つように言ってくれないか？」

哲也の言葉を聞いたヴィアは、安堵した顔で直ぐにその場を去った。

それから程なくして、哲也は6人の女を集めた。首相であるヴィア、大將軍であるディア、姫巫女であるアンノ、最初の女であるカトレア、副メイド長のシエスタ、一番のお気に入りであるセレナである。アドジンダを王妃として迎えることについて、意見を聞くためだ。

「私は反対です。捕虜の分際で、何寝言を言っているのって感じでしょうか」

真っ先に猛然と反対したのは、ディアだ。短いグレーの髪から、まるで怒りのオーラが浮かんでいるようだった。彼女からすると、生かしておくだけでもありがたく思えと言う。

「私も賛成できません。他国の王女を王妃にすれば、我が国の貴族から反発を受けるでしょう」

アンノもディアと同じ意見だった。理由も明快で納得出来るものだ。エメラルドグリーンの瞳は、哲也を正面からじっと見つめている。大人しい彼女にしては、珍しく強い意思を感じる。

「他国の王女に王様を取られるのは、あまり気分のいいものではありませんね。王妃ではなくて、せめて側室であればいいのですが」

カトレアは、長く美しいピンクブロンドの髪をなびかせながら、王妃としては嫌だが側室ならばいいと言う。ちなみにカトレアというのは、哲也が心の中で勝手につけた名前である。

「他国の王女が王妃となれば、私たちは全員暇を出されるでしょう。そして、他国出身のメイドばかりになってしまいます。なにしろメイドを束ねるのは、王妃様なのですから」

シエスタは、ここから追い出されていまうと言って泣きそうな顔になる。

「私も自分の身が心配になります。王様の御子を産む前に、ここを追い出されはしないかと」

セレナもシエスタと同じく、悲しそうな表情を浮かべる。流れるようなさらさらの金髪が、まるで泣いているように感じられる。

哲也はどうやら全員が反対だなと思ったが、念のためヴィアにも尋ねたところ、ちょっと違った答えが返ってきた。

「私は賛成はしませんが、反対もしません。なぜなら、判断材料が乏しいからです。彼女が王様のことをどう思っているか、それ次第ではないでしょうか。彼女が心から王様のために力を尽くそうというのなら、私は賛成します。逆にそうでないならば、身体を張つても反対するでしょう」

ヴィアの答えは、哲也にとっておおむね満足のいくものだった。そ

れだけではなく、ヴィアだけが哲也のことを案じて答えを出していた事にも気がついた。

既に心の中で結論を出した哲也は、ディアとアンノに問いかけた。

「お前達は、王妃になれると言われたら全裸教のデモ行進に参加するか？」

すると、二人とも首を強く横に振る。

「王妃にはなりたいたですが、全裸を人目に晒すのはちょっと……」

ディアは、別のことで哲也の役に立ちたいという。

「私も同じです。一応巫女ですから、他人に対して無闇に肌を晒すのは禁じられているのです」

アンノは、王妃にはなりたいたのですがと残念そうに呟く。

「お前達の言うことはわかった。だが、俺は彼女を王妃にしようと思う。ただし、彼女は第二王妃として、第一王妃はこの国の女から選ぶことにする。それならば、シエスタやセレナが追い出されることはないだろう」

シエスタやセレナを案じた哲也の言葉に、二人は嬉しそうな笑みを浮かべるのであった。

第27話　なんと、王妃選びは難しい

哲也は、横になって考え事をしていた。アドジンダを王妃として迎えることまでは覚悟したのだが、それに伴って色々決めなければならぬことが出てきたからだ、

例えば、第一王妃は誰にするか。アドジンダを第一王妃として迎えないのであれば、別の女を第一王妃として迎えなければならぬ。それもアドジンダとの結婚は早ければ早いほどいいので、第一王妃の決定は急がなければならない。

候補は6人いる。首相であるヴィア、大將軍であるディア、姫巫女であるアンノ、最初の女であるカトレア、副メイド長のシエスタ、一番のお気に入りであるセレナである。

この中で、平民であるシエスタが真っ先に候補から外れる。平民との結婚は、哲也にとって百害あって一利なしだからだ。彼女は平民なので、貴族の世界とは無縁の存在である。ゆえに王妃になれば、貴族との付き合いで大失敗し、哲也の足を引っ張りかねない存在になってしまう。それならばメイドとして自分を陰から支えて欲しいと思う。

次に、セレナを候補から外した。彼女は確かに一番のお気に入りだが、ただそれだけだ。特に大きな力を持たない貴族の娘である彼女との結婚も、大したメリットはないだろう。彼女自身も無能とは思えないが、哲也を補佐出来るほどの能力を持っているとは思えないからだ。カトレアも、同じような理由で候補から外した。

残る3人は、正直言つて甲乙付けがたい。3人とも大公なので、結婚すれば哲也にとつて大きな力となるだろう。彼女達の領地を自由に出来るようになるだろうし、財政基盤も大幅に強化されるだろう。何より、彼女達自身の能力も魅力的だ。ヴィアであれば内政や外交が磐石となり、ディアであれば軍事力が強大になる。アンノであれば宗教を完全に押さえることが可能だ。

だがここで、哲也はもつと大きな選択を迫られていた。それは、『どこの国に肩入れするか』という非常に重大かつ繊細な問題だ。哲也だって全くのバカではない。いくらエッチをし放題とはいへ、それがジパングに肩入れする決め手にはなりえないことぐらいはわかる。

なんといっても、哲也は無理やりこの世界に連れてこられたのだ。ジパングに肩入れする恩義などこれっぽっちもない。ただ、他により良い選択肢が無かったから、これまでジパングに肩入れしているにすぎない。

さりとて、いくら有利に思えるからといって、簡単にジパングを捨てるつもりもない。アルバイトを辞めるのと同じで、元の職場を穩便に辞めないと次の職場に悪影響が出るかもしれないからだ。その辺はよっぽど上手くやらないといけないだろう。

だが先のことを考えると、ジパングに肩入れし過ぎるのは危険に思えた。それは、哲也が調べた限りでは、30年以上ジパングの王位に留まるのは困難だからだ。

そう考えたきつかけは、子供だ。哲也と貴族の間にもつけた娘は穢

れを持つことになるが、それをきちんと被えるのは哲也しかない。かといって、近親相姦をするのもどうかと思う。

となれば、娘のために新たな王を召喚する必要が生じて、自然に哲也は王位から退くことになる。調子に乗って大勢子供をつくる約束をしてしまったのだから、穢れを被う必要がある娘が大勢生まれてしまうだろう。だが、王位を退いた哲也には、子供以外何も残らないことに気付いたのだ。

仮に哲也が大公になりたいと思っても、ヴィア達の親がそうしたように娘に爵位を譲らざるを得なくなる可能性が非常に高い。すると哲也は、大公の親という何の実権も無い存在になってしまう。だが、そうはなりたくない。

そう考えると、レオン王国をアドジンダと共同統治するというのは、結構魅力的な選択肢に思えてくる。自分の娘達が成長したときにジパング王位を退いて、レオン王国の統治に励めばいい。同じ理由でウェセックス王国を共同統治するというのも良い案だったが、これは交渉で次の王位を決めてしまったので断念せざるを得ない。

ここまで考えて、哲也は今後の大まかな方針を固めた。

- 一、これからはレオン王国の発展に力を注いで、ジパングに匹敵する軍事力を保持するようにする。
- 二、今後他国と戦うときは、レオン王国軍を中核として対応する。
- 三、ジパングは、レオン王国の軍事力を支える後方生産基地として機能させる。

以上が今後の大きな方針となる。

これには幾つかメリットがある。どう考えても戦争に慣れていないジパング軍に戦わせるよりも、レオン王国軍などに戦わせる方が士気が高いに決まっていること。憲法で戦争をすることが禁じられているジパング軍を戦わせなくてすむこと。ジパング軍は正直言つて周辺国に舐められているので、レオン王国軍が中核となった方が好ましいことなどだ。

また、高度な技術が必要とする兵器はジパングでしか造れないので、兵器製造に関わる人員を確保するためにはジパング軍にこれ以上の人員を割けないという事情もある。さらにはジパングの方が食料生産性が高いと思われるので、ジパングの食料生産技術を他国に供与するための人員も多数確保する必要がある。

哲也の考えでは、ブリテン島やイベリア半島を勢力下に収めた後は、食料生産力の向上や軍事力の向上を図ることが急務となる。仮に戦争になった時に、食料や武器弾薬を十分に補給するようにするためだ。戦争に勝つには多数の兵力と十分な補給が必要というのが哲也の考えなのだ。奇襲が通用するのは最初だけと思い、レオン王国とウェセックス王国を同時に攻略したというわけだ。

とはいえ、当面はブリテン島及びアイルランド攻略に全力を注ぐ必要がある。その攻略に成功したら、征服した国家から兵士を徴用してイベリア半島確保を狙う。ブリテン島には、レオン王国の兵士を置いて治安を維持する。そして首尾よくイベリア半島を征服したならば、それから後は内政と軍備増強に移る。

ここで重要なのは、誰がどのように支配するかだろう。哲也は、ここで大きく悩んでいる。このことは、王妃選びや軍隊の編成にも関

わる重要なことだからだ。

これまでのところ、哲也はレオン王国軍を含めた全軍の統括をディアにさせようと思っている。今後は、他国の軍との連携が重要と考えたからだ。レオン王国などの内政については、ヴィアに任せようと思っている。これは最も困難な役割なので、彼女以外の者には荷が重いと考えたからだ。消去法で、ジパングの首相をアンノにしようと思っている。

本音では各王家を廃止したいのだが、そうなると相手が降伏しなかったり、戦後の支配が難しくなったりする可能性がある。そこでレオン王国と同様に、ジパングに従順な王家の者をトップに据えるしかないというのが実情だ。その際にレオン王国と同じように哲也が国王になればいいのだが、なかなか難しいようである。

ウェセックス王国と同じようになった場合、可能であればそこにジパング貴族を送り込んだり、ジパング領を少しでも確保したいのだが、そうそう上手くはいかないだろう。哲也もあまり大勢の女に種付けをするのは気が進まない。

そうやって考えると、外交も非常に重要だと気付いた。イベリア半島を支配出来れば、その後はイーストフランクやサウスフランクと同盟するか、もしくは戦って支配することも念頭に置いている。それには有能な者が外交に当たる必要があるのだ。

そうやって考えていくうちに、哲也の心は固まっていく。第1王妃は、内政と外交に秀でた者が好ましいという結論に達したからだ。

そうして考えがまとまると、哲也はシエスタの尻をそつと撫でた。すると、それまで哲也の腰の上で規則的にゆっくりと動いていたシ

エステの身体が激しく動く。それと同時に、哲也の顔が快楽に歪む。

「うっ！」

そして、どういわけか哲也はうめき声を発して、身体のを抜く。シエスタも同時に身体のを抜いて、哲也の身体にしがみついた。シエスタは荒い息をしていたが、とっても嬉しそうな顔をしていた。

第27話 なんと、王妃選びは難しい（後書き）

国家について

●人間の国

フランス・・・ジパング王国
イタリア（南部以外）・・・サウスフランク王国
ドイツ・・・イーストフランク王国
ポーランド・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国
ベラルーシ・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国
ルーマニア・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国
イギリス・・・ウェセックス王国、オークニー、マレー、アルバ、ストラスクライド、デーンロウ、ウエールズなど10の国
スペイン・・・ナヴァラ王国、レオン王国、アルゴン王国、コルドヴァ帝国など様々な国

●エルフの国・・・世界の富の過半を握る。ジパングの3倍から5倍以上の国土、5倍から10倍以上の人口を擁する大国。肥沃な穀倉地帯を抱えて、食料事情は安定して大いに栄えている。

ハイエルマ帝国・・・ジパングの東南東・・・ギリシャやトルコ東エルマ王国・・・ハイエルマの東・・・トルコより東の地域
西エルマ王国・・・ハイエルマの南・・・エジプトやリビア

●ダークエルフの国・・・エルフの3国と対立し、衝突を繰り返している

？帝国・・・西エルマの南・・・北の沿岸部を除くアフリカの全域

●獣人の国

タウラス・・・ケンタウロスの国・・・ウクライナの中央
ウエストタウラス・・・ケンタウロスの国・・・ウクライナの西

イーストタウラス・・・ケンタウロスの国・・・ウクライナの東
?・・・ワールフの国・・・ロシア

第28話 なんと、王妃が決まったよ

日曜日の深夜、レオン王女アドジンダは哲也の腕に抱かれて寝ていた。いや、僅かながらに意識は残っているので、正確には寝ているとは言えないが。

彼女は、哲也の横顔を見つめながら素晴らしい初体験のことを思い出していた。噂に違わず、哲也は優しくエッチをしてくれた。前戯に2時間もかけて彼女の緊張をほぐし、力強いながらもゆっくりと腰を動かして、彼女が感じる痛みを最小限にしようと努力してくれた。

男なんて、女のことを便所程度にしか思っていない。エッチの時も自分の欲望を吐き出す以外のことは考えない。そう聞かされてきた彼女にとって、哲也の心遣いは涙が出るほど嬉しかった。初めての成人の儀で不安を感じ緊張していた彼女の心と身体を、哲也はゆっくりとほぐしてくれた。そんな彼に、心の底から感謝感激してしまった。

それに、成人の儀で穢れを被えたこともこのうえなく嬉しかった。そもそも、レオン王国では穢れをどのように被うのか、女性には知らされない。事実を知った女性が自害してしまったことがあり、それから女性には一切の情報が与えられなくなったという。

だが、自害するほどの事実とは何か、彼女は想像するだけで恐ろしかった。だから、彼女も一時は他国の多くの王女と同じく、修道院に入ることを望んだものだ。だが、世継が自分以外にいないという事情が、それを許さなかった。そこで彼女は、自害することを真剣

に考えていた。

その悩みが、哲也のおかげで解消したのだ。国にとってはジパングに降ることは良いことではなかったけれど、彼女にとっては命を救われたも同然だった。彼女は哲也に深い恩義を感じたから、屈辱ではあったけれど全裸デモ行進に参加したし、ヌード鑑賞会にも参加したのだ。

「テツヤ、私の愛しい人。私は、一生あなたに……」

アドジンダ王女は、哲也をいつの間にか愛していることに気がついた。そして、愛する男の子供を産めることに、心の底から感謝するのだった。彼女の緑の瞳からは、いつの間にかうれし涙が流れていた。

翌朝、哲也は3公爵とセレナを呼び出した。3公爵とは、ヴィア、ディア、アンノの3人である。哲也は彼女達に、王妃に関する話を始める。

「昨夜、アドジンダと話し合った結果、彼女を第三王妃にすることになった」

それを聞いた彼女達は、複雑な表情になる。そう、第一王妃と第二王妃が誰なのか、知りたいのだ。だがその疑問は、すぐに解消する。哲也は少し間を置いて話を続ける。

「アンノは、第四王妃で首相を兼務してもらう。後任が育つまでの間、頑張つて欲しい」

アンノは、首相という予想外の大任に目を丸くする。てっきりヴィアかディアがなるものばかり思っていたからだ。

「第二王妃は、ディアとする。ディアには、軍事のこと全般をしつかりやつてもらいたい。当分の間大変だろうけど、頑張つて欲しい」

ディアは頷いたが、残念だという気持ちが若干表情に現れていた。内心では、第一王妃を狙っていたからだ。もっとも、セレナが第一王妃になる可能性が高いと思っていたので、まあ順当かと心を落ち着かせた。

「第一王妃は、ヴィアとする。そして、新たに増える領土のことを全て任せる。物凄く大変だろうけど、ヴィアなら出来ると信じている」

それを聞いたヴィアは、びっくり仰天する。まさか自分が第一王妃になるとは、欠片も思っていなかったからだ。だが、続く哲也の言葉に真っ青になる。

「ただ、悪いがアドジンダのこともあるので、普段は全裸でいてくれ。もっとも、外国に行くときは例外にするが」

これには、さすがに直ぐに頷くことは出来なかった。それだけでなく、ちよっぴり涙目になりかけた。

「セレナは、側室筆頭になつてもらおう。政治には基本的に関わらないで、俺の周りにいる女性に関するとりまとめをして欲しい」

セレナは、しっかりと頷く。自分に与えられた役割の重要性を、よく理解しているからだ。

「セレナも悪いが、普段は全裸になってくれ。ただしセレナは、この敷地の中限定だがな」

セレナは、顔を引きつらせながらも一応頷く。

「言い忘れたが、ディアも頼む。ここの敷地の中限定でいいから。何せ、アドジンダに第一王妃を諦めてもらうために、色々あること無いこと言ってしまったからな。頼むから、俺を嘘つきにはしないでくれよ」

哲也の頼みに、4人とも顔をひきつらせながらも頷くしかなかった

その日のうちに、王妃の件は広まっていった。哲也も特に口止めしなかったからである。もつとも、全裸で歩く女性が大幅に増えたのは、哲也にとって嬉しい誤算だった。

全裸で歩く女性が増えたのは、王妃になる条件が常に全裸でいることだと思われたからだ。つまり、自分も王妃になりたいと思う者がそれだけ多かったということだ。ただ、年配の女性ですら全裸になっているのを見て、流石に哲也はげんなりした。そこで、メイドと30歳以上の女性に対して、全裸になることを禁止する命令を下したのである。

それでも、貴族の女性はほぼ全員が全裸で歩くようになり、哲也にとっていい目の保養になった。おかげでどんどんやる気が湧いてきたのである。

やる気になった哲也は、その翌日から連日会議を開くようになった。

隔日で開くようになったのが、属国開発会議である。

議長はヴィアで、これから属国にする予定の国をどうやって開発するのかを決める会議である。イギリスやアイルランド、スペイン、ポルトガルを今後どのように開発するのか。それを今のうちから話し合って決めていくのである。

メンバーは、かなり多い。第三王妃アドジンダは言うまでも無く、ウェセックス王女エゼルイブが加わる。大臣も首相のアンノ以下全員が出席し、主要な副大臣も出席する。さらに、ジパングの貴族代表や、哲也に忠誠を誓った外国貴族代表も加わることになったので、常に30人以上が出席する大会議となったのである。

同じく隔日で開くようになったのが、軍議である。

議長はディアで、これから他国をどうやって攻略するのか、どうやって属国の防備を固めるのかを決める会議である。ウェセックスを除くイギリスやアイルランドを今後どのように攻略するのか。コルドヴァ帝国からどうやってレオン王国などを守るか。最新の状況を集めて、大まかな方針を決めていくのである。

この会議のメンバーは、あまり多くない。第一王妃ヴィア、第三王妃アドジンダ、エゼルイブ、アンノ首相に加えて、外国貴族代表が数名参加するのみである。哲也以外は、全て女性であるのも特徴だ。

それから週2回開くようになったのが、貴族会議である。

議長はセレナで、貴族の婚姻問題などを議論し、哲也に意見具申する会議である。これだけ聞くと、何で哲也に意見を言うのか分からないかもしれないが、それはジパングの国益に大きく関わるからである。

これまではジパング内での貴族同士の結婚がほとんどだったが、これからは違う。属国の貴族の娘とジパング貴族を結婚させることにより、事実上他国の貴族領を乗っ取ってしまうことが増えることが予想されるのだ。だが、下手な人間を送り込んで領地経営が破綻したら、国益を損ねてしまう。そこで貴族の婚姻を統制する必要があるのだ。

この会議の性格上、会議のメンバーは議題によって大きく変わる。王妃や首相は時間があれば参加するが、必ずしも参加しなくていいことになった。だから、必ず参加するのはセレナと哲也だけである。

こうして、王妃が決定したことによって、全てが大きく動き始めたのであった。

第28話 なんと、王妃が決まったよ（後書き）

ジパングの王妃など

- ・ 第一王妃——ヴィア（公爵、属国の統括、前首相）
- ・ 第二王妃——ディア（公爵、大將軍）
- ・ 第三王妃——アドジンダ（レオン王女）
- ・ 第四王妃——アンノ（公爵、首相、姫巫女）
- ・ 側室筆頭——セレナ（妃の統括）

第29話　なんと、シベリアン・コントロールを提案したよ

火曜日の午前中、第1回目の軍議が開かれた。

「では、これから軍議を始めます」

議長のディアは、軍議の開始を宣言する。続いて、哲也が軍議を行う趣旨を説明する。

「みんなの中には、どうしてこのメンバーで軍議を行うのか疑問に思う者もいるかと思う。確かにここにいるメンバーは、軍事には疎い者もいる。軍議は軍人だけで行すべきだとの意見を持つ者もいるだろう。でも、戦争は軍人に任せるばかりでは駄目だと思う。国家の首脳が明確な戦略を決定し、軍人はそれに従って戦術を考えて戦うべきだと思うんだ」

哲也は、うる覚えのシベリアン・コントロールを第一の基本方針に掲げることにした。もっとも、自分の考えが簡単に受け入れられるとは思っていない。だが、国王である自分が強く主張すれば、表立った反対は起きないだろうと思ったのだ。

哲也の調べた限りでは、この世界の戦争は戦略も含めてほとんど軍人任せ。国王といえども決めるのだ戦争の開始と終わくらいなもの、どこをどのように攻めるのかは全て軍人が決めている。国王が決めることも無いわけではないが、その場合は軍人上がりの国王であることが多い。だから、普通は国王の軍隊に対する影響力は、無いに等しい。

それだけだと、別に大きな問題ではないように思えるし、実際に他

国ではそれが問題だと認識している者はまずいない。しかし、哲也は大問題だと思っている。それはなぜかと言うと、敵国民に対する残虐行為が凄まじいからだ。

敵国の軍隊に支配された国民には、悲惨な末路が待っている。最初に全ての財産が略奪される。続いて女はすべからくレイプされ、老人は虫けらのように殺され、男や子供は奴隷以上に過酷な労働を強いられるのが普通だ。

実際、これまでウエセックス王国に占領されていたジパング北部の状況は、それに近いものがあつた。貴族は奴隷の身分に落とされ、貴族の男は過酷な労働で早死にし、貴族の女は娼館で早死にしている。軍人や警察官は全て処刑され、ウエセックス王国に忠誠を誓わない役人も同じ運命をたどっていた。

ウエセックス王国に忠誠を誓った役人も、無事では済まなかつた。家族、それも若い女性を優先的に人質に差し出すよう強制され、若い妻や娘がウエセックス人の子を孕むのを黙って耐えた。そのうえ、彼女達は同じ父親の子を続けて孕むことも多かつた。その結果、役人の子供が全て血が繋がっていない混血児になるというケースも後を絶たなかつた。

一般市民は、税金と物価が高くなって生活が苦しくなる。横暴な敵国人の乱暴狼藉を受ける。美しい娘はすべからくウエセックス人の子を孕んだり愛人となる。

こうして役人の家を中心に混血児が増えていき、一般市民も過酷な労働や飢えでその数を減らしていったため、純粋なジパング人の数も割合も20年で半分以下となっていた。

北部地方は、ウエセックス公爵エゼルレッドの部下の手でジパング領に回復されつつあるが、報復を恐れたエゼルレッドの手配によりウエセックス人はウエセックス王国に戻りつつある。混血児やその母親もウエセックス王国に連れて行くことにしたため、残ったジパング人は3割以下となる見込みだ。

残ったジパング人は、家族を全て失い絶望した役人達と、やせ衰えて生きる希望を失った一般人しかない。早く手を打たないと、北部のジパング人は壊滅する恐れがあった。

写真やビデオで北部の悲惨な状況を知った哲也は、一般市民に対する暴虐をなるべく防ぐことを決意した。それはジパング人に限らない。例え敵国人であろうと、軍人以外の一般市民を守ろうと決めたのだ。

その第一歩が、シビリアン・コントロールなのだ。軍人を可能な限りコントロールし、一般市民に対する暴力行為を防止するよう教育し、それを徹底する。むろん、それは勝利や味方の犠牲と引き換えにまで行うことではない。だが、哲也は一般市民への暴力を防ぐことは、軍隊にとってプラスに働くと考えている。長い目で見れば、味方の勝利に貢献すると。

とはいえ、哲也一人が頑張ってもシビリアン・コントロールの効果は薄いこともわかっていた。そこで女性の知恵を借りて少しでも効果をあげようとして、軍議を開くことにしたのである。そういう理由から、軍議のメンバーは哲也以外は全て女性になった。決して女性のヌードを見たいとか、揺れる生乳を見たいとかという理由ではない……と思う、多分……。

だが、哲也は本心を正直に語らなかった。貴族が平民のことを心配するという感情を理解できるとは思えなかったし、かえって貴族の協力を得られなくなると思ったからだ。

そこで哲也は別の理由を挙げた。国が栄えるには、平民の生活向上が有益であり、そのためには平民の生活を可能な限り守る必要があると。敵国を攻めるに当たっても、占領して自国に組み込むつもりがあるならば、軍人以外はなるべく被害を与えない方がいいと。一時的な略奪から平民を守り、長く利益を得る方がジパングにとって利益になると。そのような考えに立って哲也の故国は栄えたのだと。

哲也の故国がジパングよりも遥かに栄えていることを知っている王妃や貴族の娘達は、この説明をすんなり受け入れた。哲也の理屈は、自分の部下達を納得させるのにも適していたからである。

「何か意見のある者はいるか？」

ディアが意見を求めると、アドジンダが応じた。

「哲也様のお考えは素晴らしいですわ。私としても大賛成です。ですが、今のレオン王国軍に哲也様のお考えを行き渡らせるのは難しい、いいえ、無理と言っていていいでしょう。なぜなら、將軍達に頭の固い者が多いからです」

アドジンダの意見に、その場の全員が顔を引きつらせた。哲也もそうだが、その場の全員が失念していた。実際に敵国に攻め込むのがウェセックス王国軍とレオン王国軍などであり、哲也達はそれら軍隊の実態を全く知らないことを。

だが、この問題を理解していた者がいた。ヴィアである。

「それに対しては、こういう対策はいかがでしょうか。例えば、將軍に我が軍の参謀を付けるのです。將軍には、参謀の意見は必ず従っていただくというのは？」

ヴィアは、碧い瞳で周りの者を見渡しながらみんなの反応を見る。すると、アドジンダがウエセックス王女エゼルイブの意見を聞くべきだと主張するので、エゼルイブは渋々口を開く。

「申し訳ありませんが、私は軍隊のことはわかりません。ですから、後で別の者に聞いてみます」

彼女は哲也に向かって頭を下げる。そうすると、これ以上意見を聞いても無駄なので、哲也は頭を抱える。そこを狙いましたかのよう

にアドジンダが口を開く。

「レオン王国軍では、そのような策は無意味となるでしょう。ジパングの参謀は、意見を無視されるか殺されるか。ウエセックス王国軍も似たような状況ではないでしょうか」

アドジンダの意見に、ヴィアの顔が僅かに歪む。ヴィアの意見が完全に否定され、彼女の面子が丸つぶれとなったからだ。

「では、どうすればいい？何かいい案でもあるのか」

雰囲気が悪くなったのに耐えられずに哲也が口を開くと、アドジンダが待つてましたとばかり対案を出す。

「原因は、頭の固い將軍連中です。ならば、解決方法は明らか。今の將軍を全て更迭し、哲也様のお考えに賛同する者を將軍にすればいいのです」

標準より大きい胸を張るアドジンダは、自信満々のようだ。だが、彼女の意見にディアが反論する。

「急に將軍を変えて、軍隊が弱体化しないのか？哲也様の意見が通ったとしても、負ければ意味が無いんだぞ」

ディアの反論に、アドジンダは余裕で言い返す。

「レオン王国軍に限って言えば、むしろ逆ですね。無能で頭の固い將軍の代わりに考え方が柔軟で有能な將軍を据えれば、むしろ勝利が近づくことになるでしょう。なんなら、ウエセックス王国軍の指揮もレオン王国軍が執りましょうか。そうすれば、一挙両得というもの。いかがでしょうか、哲也様」

アドジンダは、哲也の意見を求める。だが、哲也は首を横に振る。

「俺は、最後に結論を出す。いちいち俺の意見を聞かなければ会議すら進められないほど、この会議のメンバーは無能ではないだろう。みんな、最善と考える考えがあれば、遠慮なく意見を言っただけいい。責任は俺が取るから」

そんな哲也の意見に後押しされてか、今まで黙っていた他の女達もちらほら口を開くようになる。しかし、アドジンダより優れた意見は出なかったため、最終的に彼女の意見が採用されることになった。もっとも、ウエセックス王国軍の指揮をレオン王国軍が執るという意見は保留となった。ヴィアがエゼルレッドに任せたいと主張し、

その意見が通ったからだ。

こうして、紆余曲折はあったが、哲也の第一の基本方針、「シビリアン・コントロール」は受け入れられようとしていた。

第29話 なんと、シビリアン・コントロールを提案したよ（後書き）

《登場人物紹介》

王族・大貴族

● ヴィア 第一王妃、大公、前首相・・・属国の統括（政治の責任者）

長い金髪を背中まで伸ばし碧い瞳をした、意志の強さを感じさせる少女。

● ディア 第二王妃、大公、大將軍・・・軍隊の責任者

短いグレーの髪をした、キツイ性格を思わせる少女。

● アンノ 第四王妃、大公、首相、姫巫女・・・内政、宗教の責任者

ブルネットの髪を肩まで伸ばし、エメラルドグリーンの瞳をした柔らかな表情をした少女。

● アドジンダ・・・第三王妃、レオン王女 アルフォンソ3世とヒメノの娘 胸までの金髪に緑の瞳、胸は標準より大きい。

● エゼルイブ・・・ウェセックス王女 アルフレッドとエアルフスウィスの娘 腰までの金髪でグレーの瞳

● エゼルレッド・・・ウェセックス王国の公爵

メイド

● シエスタ・・・ゼロ魔のシエスタ似の少女

● メイド長・・・50代の女

貴族の女

● ?・・・ゼロ魔のカトレア似の女

● セレナ・・・側室筆頭。某女優似の女、一番のお気に入り。流

れるようなさらさらの金髪、胸は小さい

その他

●デイナー・・・ハーフエルフの傭兵

《国家》

●人間の国（左：現代の国・・・右：この作品における国名）

フランス・・・・・・・・・・ジパング王国

イタリア（南部以外）・・・サウスフランク王国

ドイツ・・・・・・・・・・イーストフランク王国

ポーランド・・・・・・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

ベラルーシ・・・・・・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

ルーマニア・・・・・・・・小国・・・ハイエルマやイーストフランクの属国

イギリス・・・・・・・・ウエセックス王国、オークニー、マレー、アルバ（スコットランド）、ストラスクライド、デーンロウ、ウエールズなど10の国

スペイン・・・・・・・・ナヴァラ王国、レオン王国、アルゴン王国、コルドヴァ帝国など様々な国

●エルフの国・・・世界の富の過半を握る。ジパングの3倍から5倍以上の国土、5倍から10倍以上の人口を擁する大国。肥沃な穀倉地帯を抱えて、食料事情は安定して大いに栄えている。

ハイエルマ帝国・・・ジパングの東南東・・・現代のギリシャやトルコ東エルマ王国・・・ハイエルマの東・・・現代のトルコより東の地域

西エルマ王国・・・ハイエルマの南・・・現代のエジプトやリビア

●ダークエルフの国・・・エルフの3国と対立し、衝突を繰り返している

？帝国・・・西エルマの南・・・北の沿岸部を除く現代のアフリカの全域

● 獣人の国

タウラス・・・ケンタウロスの国・・・現代のウクライナの中央

ウエストタウラス・・・ケンタウロスの国・・・現代のウクライナの西

イーストタウラス・・・ケンタウロスの国・・・現代のウクライナの東

？・・・ワーウルフの国・・・現代のロシア西部

第30話　なんと、専守防衛を提案したよ

第一の基本方針が受け入れられた哲也は、続けて第二の基本方針を示した。それは、ジパングの専守防衛である。

他国と戦争をしないという憲法を持つジパングは、今後も憲法を尊重して直接他国とは戦争しない。実際に戦争を行うのは属国に任せる。その代わり、ジパングは後方支援を行うと言っものだ。具体的に言つと、次のとおりとなる。

- 一、これからはレオン王国の発展に力を注いで、ジパングに匹敵する軍勢力を保持するようにする。
- 二、今後他国と戦うときは、レオン王国軍を中核として対応する。
- 三、ジパングは、レオン王国の軍勢力を支える後方生産基地として機能させる。

このような基本方針を示したのは、次のような理由による。

戦争に慣れていないジパング軍に戦わせるよりも、レオン王国軍などに戦わせる方が士気が高いこと。

憲法で戦争することが禁じられているジパング軍を戦わせなくてすむこと。

ジパング軍は正直言つて周辺国に舐められているので、レオン王国軍が中核となった方が好ましいこと。

兵器製造に関わる人員を確保するためには、ジパング軍にこれ以上の人員を割けないこと。

ジパングの食料生産技術を他国に供与するための人員を多数確保する必要があること。

哲也は、これらの基本方針を示すと同時に、今後の展望も説明する。

「ブリテン島とアイルランド攻略に成功したら、征服した国家から兵士を徴用してイベリア半島全土を攻略したい。ブリテン島には、レオン王国の兵士を置いて治安を維持することを考えている。イベリア半島を征服した後は、内政と軍備増強に移りたい。食料生産力の向上や軍事力の向上を図りたいんだ。戦争になった時に、食料や武器弾薬を十分に補給するようにするためだ。戦争に勝つには、多数の兵力と十分な補給が必要だと思うからだ」

この説明の後、その場にざわめきが広まった。話が思った以上に大きく膨らんでいるからだろう。そこで、長い金髪を背中まで伸ばしたヴィアがおずおずと質問する。

「イベリア半島を征服した後は、どの国を攻める予定なのでしょうか？イーストフランクやサウスフランクなのでしょうか？」

ヴィアは、不安そうな表情を哲也に向ける。碧い瞳にも不安が見える。しかし、哲也はそんなことに気付かないフリをして答える。

「まあ、もしかしたらそうなるかもしれないな。だが、俺としてはイーストフランクとは同盟したい。今のところイベリア半島後の選択肢として考えているのは一つじゃない。東のサウスフランクやクロアチアにモラヴィアとブルガリア。南のイドリースやルスタム、北東のデーンやノルウエー。まあ、こんなところかな」

哲也の答えを聞いて、その場の全員が目を大きく見開く。

「まさか、そこまで考えていらっしやるとは」

「イドリースなど、海の向こうではないですか」

「それを言ったら、ブルガリアなんて遙か彼方ですよ」

外国貴族代表の女達は、驚きの表情を浮かべて周りの者と小声で話し合う。そこで頃合を見て、哲也はいったん話を区切る。

「おしゃべりはそれまでだ。今話したことは、あくまでも将来の展望だ。情勢次第で大きく変わる可能性がある。ただ、そういうことも今後あり得るという前提で戦略を練りたいから話したまでのこと。当分この件に関しては、結論は出さなくていい。当面の課題は、ブリテン島とアイルランドの攻略なんだからな」

哲也がいったん話を止めると、間髪をいれずにディアが議論を促す。短いグレーの髪をした彼女の言葉は、力強い意思がこもっており、有無を言わさぬ迫力がある。

「それでは、ブリテン島とアイルランドの攻略について、何か意見がある方は発言してください」

すると、レオン王女アドジンダが発言を求めて挙手する。それと同時に大きな胸も揺れるため、つつい哲也はそこに目がいつてしまふ。

「出来ましたら、ウエセックスの方のご意見を先に聞きたいですわ」

アドジンダの緑の瞳は、ウエセックス王女エゼルイブをじっと見つめている。早く答えが欲しいと言うことなのだろう。それが分かったからか、それとも全裸でいるのが恥ずかしいためか、エゼルイブは渋々と答える。

「私は、デーノロウを除く国は話し合いで取り入れることが出来ると

思います。オークニー、マレー、アルバ、ストラスクライド、ウエールズなどの国は、条件次第でジパングの属国になるでしょう。これらの国を従えた後に、デーンロウを攻めれば良いのではないのでしょうか」

エゼルイブがそう答えると、失笑がもれた。

「ん、何かおかしいことを言いましたか？今笑った者は、当然素晴らしい対案があるでしょう。是非、聞かせていただきたい」

ディアがキツイ目をさらに細めると、失笑をもらした女達は慌てです。

「申し訳ありません。軍議で話し合いなどと言うものですから、いい」

「てつきり、どう戦うのか話すのが軍議だと思っていたもので」
「なんだか、見当違いのことを言っているように思えたのです」

すると、ヴィアが呆れたように口を開く。

「貴女達は、今まで何を聞いていたのですか。今の意見は、第一の基本方針に沿った素晴らしい意見ではないですか。仮に話し合いが上手くいかなくとも、試す価値は十分あると思いますよ」

ヴィアの碧い瞳に強く見つめられて、失笑した女達は顔を赤くする。自分達がいかに無能であるのか、自ら暴露してしまったことに気付いたからだ。するとその時、アドジンダが突然口を開く。

「話し合いは、一度にした方がいいのでしょうか。それとも、順番にした方がいいのでしょうか。申し訳ありませんが、エゼルイブ王

女の意見をお伺いしたいのですが」

アドジンダは、ディアやヴィアの発言が無かったかのように言う。そのためディアやヴィアはちよつと怒った顔をし、失笑をもらした女達はほつとした顔をする。だが、そんなことには構わずエゼルイブは答える。

「一度にというのは、避けた方がいいでしょう。順番に話し合いをした方が、いいと思います」

その答えにアドジンダは満足したのか、しきりに頷く。そうして、今度は彼女自身の意見を言う。

「エゼルイブ王女の意見を踏まえまして、もう少し付け加えさせてください。オークニー、マレー、アルバ、ストラスクライドの順に話し合うとして、それに併せて5万ほどの軍隊を進めるとするのはいかがでしょうか。大軍を見せ付けた方が、相手もまとまりやすいと思うのですが」

彼女の意見に、ヴィアが真っ先に賛意を示す。

「なるほど。確かにその方がいいですね。話し合いが決裂すれば、その時はすぐに戦いを始めればいいでしょうから。ただ、その時の交渉役はジパングで出したいですね」

ヴィアの意見はもつともだった。ジパングが交渉しないと、ジパングの属国になれとは言いにくいからだ。すると、この意見にも口を出す者がいた。

「交渉役はジパングだけではなく、ウェセックスの者がいた方がいい

だと思います。その方が、相手も受け入れやすいと思うからです」

発言したのは、意外にもアドジンダだった。この意見をエゼルイブが言ったならば反対する者が出たかもしれないが、本来反対してもおかしくないアドジンダが言ったことから、誰からも物言いがつかなかった。

こうして、各国を順番に話し合いで傘下に加え、駄目ならば征服していくという方針が固まりつつあった。

第31話 なんと、傭兵を雇うことになったよ

第一の基本方針「シビリアン・コントロール」と第二の基本方針「専守防衛」が決まると、続けて具体的な軍編成をどうするのかという話に移った。ここからが本領発揮と言うことで、大將軍であるデリアは胸を張って話す。気が昂ぶっているためか、彼女のピンク色の乳首はピンと立っている。

「今のところ、ジパング北部のウェセックス王国軍3万が海岸沿いに終結しつつあります。これに加えてウェセックス王国内から2万の兵をかき集めています。南の国境ではナヴァラ王国軍6万、レオン王国軍3万、アルゴン王国軍1万が出撃準備中です。これに加えてレオン王国内から5万の兵をかき集めています。総兵力は20万前後となりそうです」

ディアは、あと数日で全軍が出撃可能になることも言い添えた。いよいよ戦争が始まるのだ。そのことを意識したためか、この場にいる女性達はぐつと真剣な表情になる。そこで、アドジンダが続けて発言する。

「レオン王国軍、ナヴァラ王国軍、アルゴン王国軍は、3つの軍団に再編成する予定です。第一軍団6万、第二軍団5万、第三軍団4万です。もしも軍の編成に不都合がありましたら、遠慮なくおしゃってください」

続けて彼女は、内訳を言う。第一軍団は、レオン王国軍3万、ナヴァラ王国軍2万、アルゴン王国軍1万。第二軍団はレオン王国軍3万、ナヴァラ王国軍2万。第三軍団はレオン王国軍2万、ナヴァラ

王国軍2万だという。このうち、騎兵は第一軍団に2千のみ。後は全て歩兵である。これは、馬を大量に海上輸送することが困難だからである。

ここで、それまで彼女達の発言を黙って聞いていたヴィアが、碧い瞳をウェセックス王女に向けながら発言する。

「軍の編成や位置から考えると、ウェセックス王国軍はブリテン島北部から上陸し南下。第一軍団はアイルランドに上陸し北上。第二軍団はデーンロウ南部に上陸し北上。第三軍団はウエールズ南部に上陸し、北上。大体そんな感じになると思いますが、そう都合よく軍団が上陸出来るのか、その辺のところを知りたいのですが」

この質問には、ウェセックス王女エゼルイブが答える。

「私の記憶する限りでは、5万の軍隊であろうと上陸するのに問題はありません。ただし、上陸可能な場所は限られていますので、敵に気付かれないよう上陸する必要があります。もちろん、目的地に迷わず到着する必要がありますが」

彼女は人前でオールヌードでいることにまだ慣れないためか、どことなく落ち着きがないように感じられる。そのうえ、まだ恥ずかしいという気持ちが強いのか、頬と耳が赤くなっている。

そんな彼女の答えを聞いて、ヴィアは安堵した。ブリテン島とアイルランドの攻略には、大軍が短時間で上陸することが必要不可欠だからだ。これが上手くいけば、後の心配は補給が続くかどうかくらいなのだ。

その後、ブリテン島の地図がテーブルの上に広げられて、ディアか

ら大まかな行軍案が示された。それは、上陸地点に関してはヴィアの予想とほぼ同じものだった。ただ、第一軍団がデーンロウ南部に上陸し、第二軍団がアイルランドに上陸するという違いがあったのみだった。

「ウェセックス王国軍は、オークニー、マレー、アルバ、ストラスカライの順に北から南へと攻めていきます。第一軍団はデーンロウ南部から北上し、可能な限り戦いを避けつつ攻めていきます。第二軍団はアイルランドに上陸、第三軍団はウエルズ南部に上陸し、第一軍団と同様に攻めていきます。占領地には最小限の守備兵を置きつつ、置いた守備兵の倍以上の兵士を徴用します。こうして占領地が増えることに兵力が増えていく計算になります。ブリテン島全土を攻略したら、守備兵はレオン王国軍兵士に代えて、残る全軍をレオン王国に向かわせます。その後は、コルドヴァ帝国との戦いに臨みます」

そこまで言って、ディアはいったん説明を区切って質問や意見を求めた。すると、アドジндаが弱々しく発言を求めた。緑の瞳からは自信が感じられず、何か迷っているような感じを受ける。

「守備兵にレオン王国軍を用いるのは、考え直していただけませんでしょうか。ブリテン島は我が国と大きく気候や風土が違いますので、長期間我が軍の兵士を置くには適さないと思うのです」

彼女が言うには、あまりにも気候が違う場所に兵士を送ったら、大幅な戦力低下を招く恐れがあるとのこと。

「うーん、確かに一理あるな」

哲也は悩む。彼女の言うとおり、暖かい気候の土地から寒い土地に

送られた兵士は、体調が悪化したりして十分な働きが見込めない可能性がある。その一方で、ブリテン島の兵士を使った場合は簡単に寝返る可能性がある。どちらにせよ、問題が大きい。どうしてこんな簡単な問題を見過ごしていたのかと、頭を抱えそうになる。

するとその時、一人の女性が傭兵を使うことを提案した。

「ジパング兵が傭兵を指揮するようにすれば、とりあえず反乱は防げるのではないだろうか。ブリテン島に割く兵力も少なくなりますし」

その提案に、哲也は妙案だと思った。ジパングが他国を支配する形になるし、コルドヴァ帝国を攻める兵力も増える。金がかかりそうなことと、傭兵がそれほど信用出来ないのがネックだが、現時点で取りうる手段の中では最上に思えた。

「傭兵か。ハーフエルフの傭兵団ならば、平民の女に手荒なことはしないだろう」

「もしも変な動きを見せたら、殲滅すればいい。戦争じゃないから、ジパング軍も動かしやすい」

「でも、傭兵を雇えるだけの金があるんでしょうか」

「ハーフエルフの傭兵と獣人の傭兵とでは、どちらがいいんでしょうか」

「平地なら、断然ケンタウロスがいいでしょうね」

「森の中ならハーフエルフ、場所を選ばないのがワーウルフでしょうね」

「ただ、人間と接する機会が多いなら、ハーフエルフがいいでしょう」

などと、様々な意見が飛び交った。その結果、傭兵団を雇うことま

では決まったのだが、どの傭兵団を選ぶのかの結論は先延ばしになった。

会議の後、昼食を摂りながら哲也は傭兵のことをディアに聞いた。すると、彼女は有力な傭兵団が幾つもあると言う。傭兵を多数雇っているのはエルフの国々で、様々な種族の傭兵団を雇っているという。

傭兵団を構成している主な種族は、ハーフエルフ、ケンタウロス、ワーウルフ、そして人間である。いずれも大小様々な傭兵団が存在しており、国や貴族の私兵として雇われているのだという。

傭兵を最も多く雇っているのは、大国であるハリエルマなどエルフの国々であるという。エルフの国々は豊かであるためか、一般市民は兵士になりたがらず、どうしても傭兵頼りになりがちになるそう

だ。
エルフの国々は金払いがいいため、傭兵団同士の競争は激しくて、何か大きな失敗をすると契約更新を拒否されてしまうことがあるという。なので、傭兵団は必死に働いて契約更新を勝ち取るのだという。

「そんな状況だと、一流の傭兵団を雇うのは難しいな。もっとも、田舎都市の警備であれば二流の傭兵団でも十分か」

哲也は、とりあえず人数が多ければいいかなと考えた。

「確かにそうですが、私としてはハーフエルフの傭兵団を推しますね。他の傭兵団と大きく違うのが、女傭兵の存在です。ハーフエルフの女傭兵は、男と同じ位強いと言われています。そのうえ、夜の相手まで勤めてくれるそうです」

ディアの言い様に哲也は若干嫌悪感を抱いたが、それが顔に出ることはなかった。彼女の提案は理にかなったものであると思われたからだ。女傭兵ならば、占領地で女性に乱暴を働く恐れが少ないのも事実だからだ。

「なるほどな。よし、いいだろう。ハーフエルフの傭兵団を優先的に雇うことにしよう。早速手配してくれ」

哲也の頼みに、ディアはしっかりと頷くのだった。

第32話 なんと、会議は紛糾したよ

軍議の翌日、最初の属国開発会議が開催される運びになった。

これから属国にする予定の国をどうやって開発するのかを決める会議で、議長はヴィアが務める。現代のイギリスやアイルランド、スペイン、ポルトガルといった地域を今後どのように開発するのか。それを今のうちから話し合って決めていくのである。

取らぬ狸の皮算用となりかねないものではあるが、どこをどのように誰が開発するのか、それを早いうちに決めておくことに意味が無いわけではない。それらのことを早く決めて準備をすることによって、軍隊に対する補給が楽になったりすることもあるからだ。

それだけではなく、軍事行動に何らかの影響を与える可能性もある。もつとも、良い影響と悪い影響の両方が考えられるのだが。

この会議のメンバーは、かなり多い。第三王妃アドジンダは言うまでも無く、ウエセックス王女エゼルイブが加わる。大臣も首相のアノ以下全員が出席し、主要な副大臣も出席する。さらに、ジパングの貴族代表や、哲也に忠誠を誓った外国貴族代表も加わることになったので、常に30人以上が出席する大会議となったのである。

会議は、初日から紛糾した。当初危惧されていた通り利権争いの場

になったのだから、当然だろう。そんな状態を哲也が許すとは誰も思わなかったが、意外なことに哲也は終始無言だった。貴族の若い女達が、興奮して腕を振り胸をプリプリンさせながら言い争うのだから、鼻の下を伸ばした哲也が文句を言うはずもなかったのだ。

だが、結果的に哲也が黙っている方が良かったようだ。かなり険悪な雰囲気になるというマイナス要因はあったのだが、貴族達が本音をぶつけ合うことによって、お互いのことを早く理解するのに役立ったからだ。

ジパング北部の貴族達は、デーンロウの領地を欲しがった。この国はブリテン島の中央部を領土としており、ここをジパング貴族が領有すれば、交易による富を独占出来ると考えたのだ。その要求が通れば、ウエールズをウェセックス王国に与えても良いという意見すら出た。

ところがエゼルイブ王女は、猛反対した。デーンロウの地を取り返すのはウェセックス国民の悲願であり、それだけは譲れないというのだ。デーンロウさえ併合出来るのならば、それに匹敵する土地をジパング貴族に与えても良いとさえ言い切ったのだ。

その一方で、ジパング西部や中部の貴族達は、ウエールズやアイルランドを欲しがった。この地が得られるのならば、デーンロウの半分くらいはくれてやってもいいのではないかと行って、北部の貴族たちと言い争った。

ジパング南部の貴族達は、現在のレオン王国の領地を欲しがった。

コルドヴァ帝国の領地などレオン王国に全てくれてやっても構わないから、少しでも多くレオン王国の領地が欲しいと言う。

それに対してアドジンダは、ブリテン島の征服に貢献するのだからレオン王国の領地は一切譲れないと反発する。それにコルドヴァ帝国の領地を得たとしても、半分貰えれば十分。残りの半分でもレオン王国に匹敵する広さなのだから、そこをジパング貴族で仲良く分け合えばいいと主張する。

こうして、お互いに自国や自領に少しでも有利な条件を得ようと、利害が一致する者同士が手を組んでいった。しかし、それとは違う動きも見られるようになった。

貴族の思惑とは別に、官僚達の意見も出るようになったからだ。領地を虫食い状態にするのではなく、ジパング貴族が連携をとりやすくすべきだというのが、官僚達の主要な意見だった。

このように、最初から様々な意見が噴出し、会議は迷走していく。

会議の後、哲也は王妃達と共に風呂に入った。ヴィア、ディア、アドジンダの3人とである。最初のうちは、哲也は彼女達の胸を触ったりキスをしたりして楽しんでいたのだが、しばらくすると急に真面目な顔になった。

「今日の会議の感想はどうだ？最初にアドジンダの考えを聞きたいんだが」

哲也から意見を求められると、アドジンダは待つてましたとばかり意見を言う。

「私は、現在のナヴアラ王国やアルゴン王国はジパング領に組み込むべきだと思います。そして、ナヴアラ王国やアルゴン王国の貴族に対しては、コルドヴァ帝国から奪い取った領地を与えるべきかと」彼女の案によれば、イベリア半島の西側はレオン王国のものとなり、南東部はナヴアラ王国領やアルゴン王国領に、北東部はジパング領になる。この案では、ナヴアラ王国やアルゴン王国貴族の反発は必至である。

「私は、現在の領地を変えるのは得策ではないと思います。新たに得られた領地を分割するのみでいいと思います」

一方、ヴィアはアドジンダの案に真っ向から反対する。領地替えの苦勞がわかるからだろう。必死に戦った対価が領地替えというのは、あまりにも酷いという。

「私はアドジンダ王女の意見に賛成だな。飛び地なんて、守るのが難しくなるだけだ」

ディアは、現在の国境線を少しでも南に動かしたいという。それには、アドジンダの案が最適だという。

「なるほど、お互いの案には一長一短があるな。俺にも考えはあるが、もう少しみんなの意見を聞いてから決めてもいいだろう。それより、北の方はどう思う？」

哲也は、今度はブリテン島についての意見を求めた。すると、ヴィアは胸を張って答えたため、彼女の胸がぷるるんと揺れる。

「少なくとも、デーンロウの南部は我が国が押さえる必要があります。東からの攻撃を受け止める拠点となるからです。場合によってはデーンの地を攻撃する拠点として、重要な役割を担うことになるでしょう」

ヴィアは、既にコルドヴァ帝国征服後のことも見据えているようだ。その時にどのようなことになるのか決まっていらないが、現代のデーンマークの地を攻めることは十分ありえることだった。

「いつそのこと、ブリテン島南部は我が国がいたでしまえばいい。北部をウエセックス王国に全て渡し、アイルランドの半分を残った国で分ければいいだろう」

ディアは思い切った案を口にしたが、自分のところに波及することを恐れたアドジンダが反対する。

「ウエセックス王国には、ブリテン島北部を渡せばいいでしょう。それでも足りなければ、アイルランドの北半分を渡せばいいかと。デーンロウはジパング領地とし、ブリテン島の真ん中をしっかりと押さえるべきではないでしょうか」

彼女は、ブリテン島の真ん中をジパングが握って、南部と北部をウエセックス王国が支配する形が望ましいという。そして王子は、アイルランド北部がブリテン島北部に送ったほうがいいという。そうすれば、当分の間は統治するのに忙しくて、ジパングに牙を剥く可能性が低くなるというのだ。

「なるほど、それも一理あるな」

哲也は、アドジングダの案に興味を示す。将来に禍根を残す可能性はあるのだが、当面は王子の反乱は防げそうだと思ったからだ。それに自分の子供がブリテン島南部を継ぐのであれば、王子とてジパングに歯向かわない可能性もある。

しかもこの案だと、ブリテン島攻撃の軍編成を変えない方が都合がいい。ただ、ウェセックス王国軍はデーンロウには攻め込まず、ブリテン島北部を攻略した後はアイルランド北部に攻め入ってもらうことになるのだが。

こうして、ブリテン島攻略後の青写真は、哲也の頭の中で次第に固まっていくのだった。

第33話　なんと、傭兵の世界は大混乱だよ

ジパングで会議が開かれている頃、傭兵の世界は大混乱に陥っていた。

ジパングの大兵力が近隣諸国に攻め入ろうとしており、それを防ぐためにウェセックス王国やナヴァラ王国が大量の傭兵を雇うようだという噂が飛び交ったのが1〜2週間前のこと。だが、両国は一向に傭兵を募集したりせず、有力な稼ぎ話に振り回された傭兵団が数多く出たのだ。

戦争が始まる時、早く駆けつけた傭兵団ほど有利になる。そのため、戦争に参加するための準備をした傭兵団が数多く出たのだが、戦争が起こらなければそれは全て無駄になってしまう。

今回の戦争話はかなり信憑性が高かったこともあり、この話に振り回された傭兵団も多かった。そのため、一攫千金を夢見て装備を一新した傭兵団も多く、当てが外れて大損した傭兵団が団存亡の危機に直面してしまい、傭兵の世界は大混乱に陥ってしまったというわけだ。

そんな傭兵団が、イーストフランク王国西部やサウスフランク王国北部に多く集まっていた。それだけでなく、彼ら相手に商売をしようと集まっていた者もいた。その中には、娼婦斡旋を生業とする者もいた。

「うーん、今回の騒動では大儲けし損ねたわね。でもまあ、そこそ

「稼がせてもらったかしら」

喜んだり渋い顔をしたり、まるで百面相をしながらイーストフランク王国のとある都市の道を歩いていたのは、とある傭兵団の副団長の女性だった。交渉ごとの才能を見込まれて副団長になったこともあり、彼女は傭兵団の運用を一手に任されていた。

彼女は、種族で言えば人間とエルフの混血。いわゆるハーフエルフというやつで、見た目はエルフと殆ど変わらない。外見は金髪ロングヘア、尖った耳とアーモンド型の釣りあがった瞳が特徴である。ロードス島戦記のデイドリットの耳の長さを半分にして、少し顎を丸くした感じの美女で、ハーフエルフの中でも上の中といったところか。

彼女自身は他の仲間と同じく親の顔を知らず、幼い頃から傭兵団で育ってきた。当年とって20歳を多少越えているが、見た目は10代後半に見えるので、子供だと思って甘く見る相手をやり込めるのが得意技になっていたりする、外見に似合わずやり手な彼女であった。

彼女の傭兵団は、他の多くのハーフエルフの傭兵団と同じく、娼婦の斡旋も行っていた。一般的にハーフエルフの女性は、その多くが10代後半で娼婦になり、年齢が上がると傭兵になる。だが、傭兵団でも傭兵の仕事が無ければ、娼婦としても働くのである。

彼女達にとって同業者を相手にするのは金銭的には安いのだが、寝物語に得られる情報には重要なものもある。なのでこういう儲け話に乗りそこなった時には、同業者の傭兵相手に女性団員を娼婦として斡旋し、多少の稼ぎを得ると共に情報も得るという一石二鳥を狙うこともあるのだ。

「おい、ディーナ。なにやってんだ？」

そこに、彼女の仲間がやって来た。彼は傭兵団の隊長の一人で、彼女の幼馴染でもある。彼は確か、情報収集を行っていたはず。

「ちよいと商談をね。あんたこそ、何か収穫はあったの？」

ディーナは、娼婦の斡旋というあまり幼馴染に話したくないことをしたせいか、話題を自分からそらそうとした。その狙いに気付いたのかどうかは分からないが、男は苦笑しつつも話に乗る。

「ああ。だけど、あまり良くない話だ。どうやらジパングが100万もの兵を国境に派遣したというのは、本当だったようだ。だがよ、戦いにならずにウエセックス王国の連中は尻尾を巻いて逃げちまっただけらしい」

その話を聞いたディーナは、がつくりと肩を下ろした。彼女は近いうちにヴィアの部下に声をかけられることになり、狂喜することになるのだが、今の彼女には知る由が無かった。

混乱したのは、なにも傭兵の世界だけではない。近隣諸国は更に大きな混乱に陥っていた。

イーストフランク王国では、ジパング兵が国境に集結しているという情報の後、続報が急に入らなくなったためと、ウエセックス王国

経由の情報により混乱が特に激しかった。

「ええい、いったいなにが起こっているんだ」

「ジパングは、ウエセックス王国と戦ったのか？それとも……」

「もしや、ウエセックス王国が勝ったのか？」

「いや、それはないだろう。むしろ負けた可能性は高い」

「なに、どういうことだ？」

「ジパング北部から、大勢の人間がブリテン島に渡っているからだ」

「なんだと！かの国が負けたのか？」

「確実とはいえないが、恐らくそうだろう」

「なんと！では、次に攻められるのは我が国ではなかるうな」

「それが本当なら、非常にまずい。緊急会議を招集しなければ」

「まさか！我が国を攻めるくらいなら、ウエセックス王国を攻めるだろうよ」

などと、貴族が集まっては不安を言い合っていた。だがそれも無理は無い。次は自分の国が攻め込まれるかもしれないと考えたからだ。これまでジパングからの援軍要請は全て断ってきたので、そのことを恨まれているのではないかと考えたのだ。

一方、東のブルグンドの貴族達は、コルドヴァ帝国という邪魔な国が間にあるせいで、ナヴァラ王国やレオン王国の情報が入らずやきもきしていた。

「いったい、戦争の行方はどうなったのだ？」

「どうしていきなり情報が入らなくなったのだ？」

「50万のジパング兵は、いったいどうなったのだ？」

「まさか、我が国に向かっていてのではないだろうな？」

情報不足が疑心暗鬼を生み、貴族達は不安におののいていたのである。しかし、そんな理由だけで軍事行動に移る貴族は、大ばか貴族揃いのこの国にも流石にいなかった。国王の意向に真っ向から逆らうことになるからだ。

なので、傭兵団に声をかける貴族もおらず、結果としてこの国に留まっている傭兵団には、いつまで経っても声がかからなかったのだ。少なくとも今日までは。

こうして周辺国が混乱している中、ヴィアの部下達は様々な情報収

集活動を行っていた。ヴィアは戦争放棄の憲法に必ずしも賛成ではなかったが、かといって憲法に反して戦争をしようとは思っていなかった。そこで近隣諸国に大勢の部下を送って、少しでもジパングが延命出来るように様々な情報収集活動や工作活動を行わせていたのだ。

そんなヴィアの部下に、緊急の密命が下った。ハーフェルフの傭兵団を、出来うる限りかき集めよというものだ。しかも、本当の目的を教えずにというものだ。ヴィアの部下達は、この命令に従って活発に動きはじめた。

第34話 なんと、上陸作戦が開始されたよ

ウェセックス王国軍の攻撃は、1月ほど前に哲也がディアから聞いた時は、あと半月後に始まるということだったが、その通りにはなかった。当初デーノロウから攻めるつもりで段取りを組んでいたのが、遠く離れたブリテン島北部から攻めることになったこともあり、大きく予定が狂ったからだ。それでも、10日ほど遅れでようやくブリテン島攻略作戦が始まることになった。

王国軍5万を率いるのは、ウェセックス公爵のエゼルレッド。彼はエゼルイブからの命令に基づいて、オークニー、マレー、アルバ、ストラスクライドなどの国に対して、なるべく話し合いで降伏を勧めることになっていた。

今回の作戦に伴い急遽編成された第1軍団、5個師団で合計5万の兵は、海岸を埋め尽くすほどの多数の船に乗っており、ブリテン島の北端に続々と降り立っていく。その兵士達の雄姿をエゼルレッドは小高い丘で見つめている。その彼に、話しかける者がいた。

「公爵様、我が軍は大軍で武器や食料も豊富です。この分だと、向かうところ敵無しでしょう」

自信満々に言う彼は、エゼルレッドの腹心とも言つべき子爵だったが、いささか軍事経験が少ないようだった。そんな彼に公爵は苦言を呈す。

「戦いというものは、始まってみないと分からないものよ。いかに大軍といえども、僅かな油断で大敗を招くこともある。ましてや、我々には土地勘が無いではないか。ここは慎重すぎるくらいに慎重

に進軍し、確実に勝利を掴むべきだと思うがね」

エゼルレッドは、単なる猪武者ではなかった。戦場を何度も渡り歩き、戦いの怖さというものを嫌というほど知っている。当然ながら、驕りほど怖いものは無いこともだ。

「これは失礼いたしました。確かに公爵様、いえ、軍団長様のおっしゃる通りです。早速偵察部隊を放って、辺りの様子を探ることにします」

子爵もバカではない。エゼルレッドの言葉から、通常よりも多くの偵察部隊を早めに出す必要があることに気付き、早速行動に移るためにその場を去った。ここでのんびりしているほど、無能ではないということだ。彼の後姿を眺めながら、エゼルレッドは呟く。

「まあ、これだけの大軍だ。気が緩む彼の気持ちは分からないでもないがな」

しかしと、彼は心の中で呟く。彼とて惚けているわけではない。上陸時が最も危険が大きいことを知っていたので、不測の事態に備えて全軍を見渡せる位置にいたのだ。だが、彼の心配は杞憂に終わりそうだった。王国軍を阻む者は、誰もいなかったのだ。

ウェセックス王国軍が上陸作戦を遂行している時、レオン王国軍なども上陸作戦を決定していた。第2軍団はデーンロウ南端に上陸、第3軍団はアイルランド南部に上陸、第4軍団はウエールズ南部に

上陸していた。

第2軍団は6個師団で、レオン王国軍3万、ナヴァラ王国軍2万、アルゴン王国軍1万。第3軍団は5個師団で、レオン王国軍3万、ナヴァラ王国軍2万。第4軍団は4個師団で、レオン王国軍2万、ナヴァラ王国軍2万という混成部隊だ。

それぞれの軍団を率いているのは、レオン王女アドジンダの腹心達だ。王命だからといって、アドジンダの腹心を強引に軍団長に任命したのだ。腹心達は、王女に対して絶対の忠誠は誓っているもの、とりわけ優秀であるとはみなされていなかった、軍隊内ではかなり強い不満が渦巻いていた。

しかし、アドジンダは勝利を掴めばこつちのものと思っていた。レオン王国軍はジパングから大量の新型ボウガンなどの新兵器を贈られていたし、腹心達には優秀な参謀を付けていたので、勝利は動かないと考えていたのだ。

その上陸の様子を、哲也は急遽作らせた最高司令部の中央作戦室で眺めていた。そこには、ジパング軍大將軍であるディアとその参謀をはじめとして、レオン王国軍最高司令官であるアドジンダ王女とその側近、ウエセックス王国軍最高司令官であるエゼルイブ王女とその側近、その他大勢の貴族達や軍関係者が集まっている。

その部屋には、20近い液晶モニタが設置されており、居ながらにして上陸作戦の様子が目で分かるのだった。哲也はモニタ群が一

番良く見える位置に座り、その右にアドジнда、左にエゼルイブが座る。部屋の脇には数多くの端末が設置されており、10人ほどの女性軍人がせわしなくキーボードを叩いていて、彼女達の間をディアが動き回って細かい指示を与えている。

アドジндаはさきほどから落ち着かない様子で、胸まで垂れた綺麗な金髪が揺れている。緑の瞳は不安そうに揺れ動いており、哲也の手を握って離さない。哲也の手を自分のプリンとした形の良い胸に押し当てているが、どうやら意識的にやっているのではないらしい。

エゼルイブも同じく落ち着かない様子で、腰まで伸びた金髪が揺れ動いている。グレーの瞳は不安げで、彼女も哲也の手を握って離さない。彼女は哲也の手を股間に当てているが、全裸でいることにまだ慣れなくて、恥ずかしい場所を無意識のうちに隠しているのかもしれない。

それ以外に、王族の男女や大貴族の男女が熱心にモニタを見つめている。彼らの周りには軍服を着込んだ女性軍人が控えていて、彼らの質問に可能な限り答えている。

「とりあえずは順調なようだな」

哲也がほっとした顔で言うと、軍服を着たディアが背筋をピンと伸ばして哲也に報告する。

「国王陛下、作戦は予定通り進んでいます。第1軍団、第2軍団、第3軍団、第4軍団、いずれも敵の妨害を受けずに上陸を開始しました。上陸作戦に伴う損害は、ごく僅かです」

そう。敵の妨害が無くとも、作戦行動には損害が生じるのが普通だ。現代の米軍では、実戦ながらの訓練を行って、毎年少なくとも死者が出ているという。ましてや実戦ともなれば、錬度の低い兵士から損害が生じるのが当たり前なのである。

今回は、上陸時に誤って海に落ちる兵士がでて、10人を超える死傷者を出していた。それでも20万の兵士から見ればごく僅かな損害で、無視しても良い数字である。

「そうか。で、今後の見通しはどんなんだ？」

哲也は、分かりきっている質問をする。実は昨夜、哲也はディアと一緒に寝ていたので、作戦行動に関する話は全て聞いていたのだ。そこで、今日の打ち合わせも全て済ませていた。

ちなみにディアが軍服を着ているのは、全裸だと股間から白い液体——哲也が昨夜彼女の体内に注ぎ込んだもの——が溢れ出る恐れがあったからである。なので、軍人は軍服を着用することにしたので、彼女を含む女性軍人は全裸ではなかったのだ。

「第1軍団、第2軍団そして第4軍団は、1個師団がそのまま進軍して第一目標の町や村に到着予定。それ以外の師団は、上陸地点付近で野営します。第3軍団は、1個師団がそのまま進軍して強行偵察。それ以外の師団は、上陸地点付近で野営します。早ければ、今日中にも戦端が開かれるでしょう」

ディアの見込みでは、第2軍団と第4軍団は今日中に戦闘に突入する恐れが高く、第1軍団は五分五分。第3軍団は明日以降の可能性が高いという。

「問題は、第3軍団だな」

思わず哲也は呟いていた。アイルランドに上陸した第3軍団が、この作戦の最大の不安要素だった。精強であることが分かっているデーンロウ軍に精鋭部隊である第2軍団をぶつけなければならないことから、第2軍団の6割程度の戦力しかないと見積もられていた第3軍団をアイルランドに攻め込ませるしかなかったのだ。

そんな彼らが、地理が最も不案内なアイルランドの地で、強さが全く分からないアイルランドの軍相手にどこまで戦えるのか、正直言っ
て哲也はおろかディアにも分からなかった。

その時、部屋の隅っこには全裸のハーフエルフが縮こまっていたのだが、誰も気に留める者はいなかった。

第35話　なんと、初戦を勝利で飾ったよ

予想通りというか、第2軍団はその日のうちに戦鬪に突入した。

第2軍団は、昼頃に先遣隊が人口千人余りの街を包囲しようとした。包囲に当たったのは1個中隊、250人ほどの兵士である。だが、包囲網が完成する前に街から大勢の兵士が飛び出してきた。

「てめえら、なにもんだっ！」

「ふざけやがって！」

「生きて帰れると思うなよっ！」

デーン人の兵士達は各々武器を取り、雄たけびをあげながら凄い勢いで先遣隊に迫っていく。それに恐れをなしたのか、先遣隊は驚いて逃げ出した。

「なんでこんなに大勢の兵士がいるんだっ！」

「攻めてくるのが早いじゃないかっ！」

「こりやかなわん！早く逃げるんだ！」

指揮官である中尉が真っ先に逃げ出して、兵士達に早く逃げるように言ったものだから、先遣隊は散り散りになって逃げていく。

「ははっ、奴ら大したことないぞ」

「情けねえ奴らだな」

「一気にやっちまえ！」

逃げ惑う先遣隊の兵士を見て、デーン人兵士は勝利を確信。ここぞとばかりに先遣隊を追いかけていったが、30分ほどして走るのをやめた。いつの間にか、大軍に包囲されていることに気付いたからである。先遣隊が逃げ出したのは計略で、敵兵士を罠におびき出すためにわざと逃げたのだった。

「ちくしょう、やってやる！」

「デーン人の恐ろしさ、目にもの見せてやる！」

敵兵士の一部は勇気を振り絞って果敢に戦いを挑んできたが、ボウガンの斉射によって一気に2割の兵士が倒れたのを見て、残る兵士は戦意を無くしてしまった。すかさず投降を呼びかけると、さきほどまでの勇猛さが嘘のように大人しくなってしまった。

戦いの様子を離れた場所から一部始終見ていた師団長は、上機嫌だった。

「凄いものだな、新型ボウガンの威力は。いくら計略が上手くいったとて、敵に数倍する大勢の兵士と圧倒的な武器が無ければ、こうも一方的には勝てないだろう」

師団長は、そう言いながらも完璧な勝利に嬉しさを隠せないようだ。

「師団長様のおっしゃるとおり、戦争は所詮数でございます。兵士の数が多いほうが勝つ、これが真理でしょう。知略や優れた武器があれば、確かに一時は優勢になりましょう。ですが、最後に物を言うのは兵士の数でございます」

師団長の隣に立つ参謀は、兵士の数が最も重要だと言う。彼らの考えは正しいとは言えないのだが、そう大きくは間違っていない。それは、これから続く戦いの勝利が証明するのだった。

負けたデーン人兵士は、全てレオン王国に送られることになった。コルドヴァ帝国との国境に送り込まれて、最前線で戦わせるためだ。彼らは言葉も通じないため、コルドヴァ帝国に逃げることは出来ない。見つければレオン王国の兵士とみなされて殺されるからだ。彼らが生き残るためには、戦って戦い抜くしかないのだ。

ただ、あんまり正直に言うとは反乱を起こしかねないので、辺境で真面目に警備の仕事をすれば、5年でいったん故郷に返してやると説明した。そして、反抗すれば街を破壊して、住民を皆殺しにする脅した。この脅しはよく効いたようで、それから反抗的な態度をとる兵士はめっきり減った。

その一方で、街に残った男達の多くを兵士として連れ去ることにした。彼らは戦いが終われば故郷に返すと説明し、実際にそうするつもりだった。生き残りさえすればの話ではあるが。

そうして、女子供と老人しか残っていない街を、ジパングの文民とハーフェルフの傭兵団が支配することになった。逆らえば連れ去られた兵士は皆殺しにすると脅し、反乱の芽を摘み取ったため、常駐する兵士は最小限ですんだ。

第4軍団は、昼前に先遣隊が人口百人余りの村を包囲した。包囲に当たったのは1個中隊、250人ほどの兵士である。包囲網が完成し、ゆつくりとじわじわ進軍していくと、村から数人の老人が出てきた。それはとてもじゃないが勝てないと思った村人達からの、降伏の使者だった。

こうして、第4軍は戦わずして最初の目標を攻略し、幸先の良いスタートを切った。ここでも大勢の男たちを兵士として連れ去ることにしたが、戦わずして降伏したためレオン王国に送り出すことはしなかった。

というのは、今回の作戦において戦わずして降伏した者達は、刃向かってきた者より優遇すると決めていたからだ。こうしてこの村も女子供と老人しか残らず、ジパングの文民と数人のハーフエルフの傭兵が支配することになった。

第1軍団は、昼頃に先遣隊が人口百人余りの村を包囲した。包囲に当たったのは1個中隊、250人ほどの兵士である。包囲網が完成して降伏を求める使者を送ると、返事を1日待つて欲しいと言つて来た。だがそんなに待てないぞと再び使者を送ると、夕方になってようやく敵が降伏を受け入れると言つて来た。

「ふむ。戦いもせずに降伏とは、なんとも味気ないものよ」

村の降伏を知ったエゼルイブは、嬉しさ半分失望半分といったところか。そんな上官を、腹心の部下が諫める。

「そうは言いますが、戦わずして勝ったのです。素直に喜びませんか。王女様も、我が軍の犠牲が無いことを喜んでいてことでしょう」

エゼルイブの腹心である子爵は、今回の作戦で少しでも多くの兵力を集めることが重要だと言う。最小限の被害で最大限の兵士を集めるには、今回のような事態が最も好ましいとも指摘した。

「分かっている。分かっているのだがな」

エゼルイブは、とある女に自分が戦場で大活躍した話をしたかったのだが、流石にそれを口に出すことはしなかった。

この日、最高司令部の中央作戦室は歓喜に包まれた。第1軍と第4軍は戦わずして勝ち、第2軍は圧倒的な勝利である。このまま勝ち進むものと勝手に決め付け、飛び上がって喜ぶ者も多かった。

特に圧倒的な勝利を得た第2軍を擁しているためか、レオン王国、ナヴァラ王国、アルゴン王国の貴族達の喜びは大きかった。

「レオン、レオン、レオン！レオン、レオン、レオン！」

第2軍の戦いが終わった後、興奮したアドジンダは突然立ち上がったかとおもうと、右手を握り締めて繰り返し突き上げ、大声で叫んで喜びを露にした。彼女に触発されたレオンの貴族達も、彼女に合わせて拳を突き上げ声を張り上げ絶叫する。それが30分ほど続いたのだろうか。最後にアドジンダは大声で絶叫した。

「レオン王国に、栄えあれっ！」

「「「「「栄えあれっ！」「」「」「」」」」」

続けて、レオンの貴族達も絶叫する。

「王様、やりましたよ。我が国の兵士は、あなたのために勇敢に戦ったのです」

そう言うなり、彼女は哲也に抱きついて唇を奪った。そればかりではなく、舌で口撃を仕掛けて来た。もともと、こういう攻撃なら大歓迎である。哲也は喜んで彼女を抱きしめた。

他の娘達も興奮し、誰彼構わず周りの者に抱きついてキスをする。なかには女同士でキスをする者もいて、その場は異様な興奮に包まれた。

その場にいた数少ない男達も幸運だった。若くて美しい全裸の娘を抱きしめながら、ディープなキスを何度も堪能できたのだから。

一方、その場にいた数少ない———というか一人しかいない———ハーフェルフは不幸だった。興奮した娘達に何度もディープなキスをされ続けたからだ。一体自分は何をしにここへ来たのだろうか、そう疑問に思ったが、誰も答えてくれる者はいなかった。

その日の晩は、多くの祝勝会が開かれた。

まずは、哲也と貴族の娘達のグループ。これにはアドジンダやエゼルイブらも参加した。アドジンダとエゼルイブを左右に侍らせながら、哲也は貴族の娘達のエロチックなヌードダンスを堪能した。

次にディアと軍人達のグループ。最初は軍服を着ていたディアだったが、酒を飲み進めるうちにいつの間にか全裸になっていた。もつとも、彼女に手を出そうとする剛の者はいなかったのだが、酔った彼女は次から次へと部下の男達に絡んでいったという。

そして貴族とその侍女達のグループ。男は全員貴族で、女は領地から呼び寄せた平民の娘達。最初のうちは酒飲み大会と化していたのだが、ふとしたことがきっかけで大乱交大会になっていった。

ヴィアとアンノは二人きりで祝杯を挙げ、夜明けまで飲み明かしたという。

ハーフエルフのディーナは、全裸でいたため哲也のいるグループに加わった。そこで哲也の目に留まることになった。

第36話　なんと、ハーフェルフが泣いちゃったよ

上陸作戦開始から、1週間が経った。

ブリテン島北部に上陸した第1軍は、5つの師団に分散して進撃し、次々に村々を支配していった。途中に大きな町が無かったことや、抵抗する村がほとんど無かったこともあって、支配地の拡大は順調に進んでいった。

ブリテン島南東部、デーンロウ南端に上陸した第2軍団は、2個師団ずつに分かれて進撃し、これまた次々と支配地を拡大していった。ただ第1軍団と異なり、抵抗を示す町や村が多かったため、様々な策を用いて撃破していった。最初の町で用いた作戦は他の町でも有効で、面白いように簡単に罠にかかる兵士が多かった。

アイルランド南部に上陸した第3軍は、1個師団が上陸地点近辺で堅固な陣地を築いていた。万一味方が敗走してきたときに、持ちこたえて全滅を防ぐためである。残る4個師団は、やや距離をとりながらもゆつくりと進軍していった。偵察を念入りに行いながらの進軍であったため、支配地の拡大は遅々として進まなかった。

ウエールズ南部に上陸した第4軍は、4つの師団に分散して進撃した。状況は第1軍と似たり寄ったりで、大きな抵抗を受けずに順調に支配地を拡大していった。

こうして支配地が拡大していくにつれて、軍議ほどではないが、属国開発会議に要する時間がどんどん増えていくのだった。

ハーフエルフであるディーナの主な仕事は、ハーフエルフの傭兵団とジパングの連絡調整である。軍団長を通じて傭兵団に命令を下すと、連絡の遅延や行き違いなど様々な問題が生じる可能性があることから、このような連絡調整役が設けられることになったのだ。

それに、軍団長は戦争に勝つことに全精力を傾けなければならないので、占領地についてあれこれ悩ませるのは得策ではない。また、軍団長はジパング人ではないので、ジパングからの命令が上手く伝わらない恐れもあった。

そこでジパングの命令はいったんディーナに伝えられ、彼女から各傭兵団にジパングの命令が伝えられることになったのだ。だから上陸作戦が始まるまでは、彼女の仕事はそう多くはなかった。しかし、これからは違う。支配地が増えるに従って、彼女の仕事は加速度的に増えていくことになる。

最初は軍議の端にちょこんと座っていた彼女だったが、支配地が増えるにつれて次第に重要な役割を担うようになり、自然と軍議での存在感が増えていくようになった。

それにも増して、属国開発会議では彼女の存在は不可欠になっていた。なぜなら、彼女が支配地に関する情報を最も多く握っているからである。貴族連中は、彼女から少しでも情報を得ようと躍起になっていた。

「第1軍と第2軍の支配地に関する情報が出来るだけ欲しいのだけれど。住人に関しては、人口や男女比、それに年齢構成も分かると嬉しいわ」

ウェセックス王女エゼルイブは、デーンロウの地を狙っているため、彼の地に関する情報を必死になって集めている。相手が王女とあつて、デイナーは邪険に出来ないため、可能なかぎりの情報を伝えている。

「第3軍と第4軍の支配地に関する情報が欲しいわ。なんでもいいから、教えてくれないかしら」

アルゴン王妃は、密かに狙っているアイルランドやウエールズに関する情報を欲しがった。噂では、アルゴン王国はウエールズの方を狙っているという。

王妃は、数か月後に国王や若い王女を残して帰国する予定であるが、帰国するまでに出来るだけ多くの情報を得ようと必死のようだ。人妻なのに全裸で会議に出席していることから、彼女の必死さがわかるというものだ。まだ20代前半の彼女は、外見は更に若く見え、それでいて人妻特有の妖艶さも併せ持っていた。

「第2軍、第3軍それに第4軍の支配地に関する情報を教えてください」

ナヴァラの王女は、特に狙っている領地は無いらしく、第1軍以外の支配地全ての情報を欲しがった。第1軍の支配地は、誰がどう見てもウェセックス王国領になるのが明らかなため、他国の貴族から

関心を失っていた。

こうして色々な人物に情報提供するが、ディーナが最優先で報告する相手は哲也である。ただ、哲也は詳細な報告は望まず、簡潔な報告を望んだ。一方、ヴィアからは文書による詳しい報告を要求されたので、ディーナはひいひい言いながら仕事をこなしていた。

最近の哲也は、軍議では殆ど発言しなくなった。哲也が戦争に関する方針を明確にしたため、後はヴィアに丸投げしても会議は哲也の思い通りに進むようになったからだ。

属国開発会議も同様である。何か言いたいことがあっても、とりあえずその場では発言せずに、後でヴィアを通じて意見を言ってもらうようにしていた。国王の発言は重みがあるので、あまり考えずに迂闊なことを言って、状況を悪化させる可能性があったからだ。

貴族会議においても、哲也は聞き役に徹することが多くなった。特に哲也にとって貴族問題はあまり馴染みがないため、発言にはかなり慎重になっていた。

そんな哲也にとって、もつとも気軽な会議は、ディーナによる報告会である。ほぼ毎日開かれる報告会によって、哲也は支配地の状況を的確に知ることができた。

何よりも、報告会の場所をお風呂にしたことによって、哲也のやる

気は満々である。ディーナにキスしたり胸を揉んだり、身体中を触りまくったりと、彼女の身体を十分堪能することができて、哲也はいたく満足している。

「さあ、ディーナ。今日も報告してくれないか」

彼女にとびきり長いキスをしてから、哲也は支配地に関する報告を求めた。むろん、哲也の両手は彼女の胸をもみしだいているので、彼女はそちらの方に気が行っているようだ。

「あ、はい。では、報告、いた、します」

彼女は途切れ途切れになりつつも、懸命になって支配地の報告を続ける。ところが哲也の手が動くたびに彼女の報告は途切れ、性的興奮を抑えきれない彼女は、報告すること自体が難しくなりつつあるようだ。

「あれ。間違えて、ここに俺の息子が入るかもね。でもそんなことになったら、怒られるかなあ。それとも、大丈夫かなあ」

哲也は、報告を真面目に聞いているのかいないのか。彼女の股間を指でこねくりまわしながら、彼女に種付けしてもいいかどうか、やや遠まわしに聞く。だが、彼女の返事は意外なものだった。

「いえ、怒り、ません。むしろ、嬉しい、ですが、今は、やめて、いただき、たい、です」

彼女は、種付け自体はむしろ嬉しいが、やめて欲しいと言う。そこで更に理由を問い詰めると、彼女は渋りつつも泣きながら理由を言った。

「私は、穢れ、もち、なの、です。ですから、たね、つけは、やめて、くだ、さい」

ディーナは、ぽろぽろと涙を流しながらそう言った。本当は、このことは秘密にしておきたかったからだ。なぜならば、これまでどんなに仲良くしてきた人達でも、彼女が穢れ持ちだと知ると、手のひらを返したように冷たくなっていたからだ。例外は、同族でも一握りしかない。

エルフの国やその友好国では、穢れ持ちは男を殺すしか能がないとみなされており、差別と蔑みの対象だったのだ。エルフの国で生まれ育った彼女にとって、自分が穢れ持ちだと知った時の衝撃は計り知れない。その日以来、彼女は心の底から笑ったことがない。そして、常に新しい出会いを求めるようになり、自分が穢れ持ちであることをひたすら隠すようになったのだ。

せっかく努力してジパングの人達と親交を深め、ようやく一部の女性達と気心が知れてきたところだったのに、彼女達に冷たくされるのかと思うと、胸が張り裂けそうになるほど悲しく、流れ落ちる涙を止めることができなかったのだ。

国王だって、他の女性たちが妬むほどに自分を可愛がってくれたので、彼女は心の底から感謝していた。穢れ持ちであるがゆえに彼女は男から遠ざけられてきたため、キスすらしたことがなく、同年代

の少女達が嬉しそうに初体験のことを語り合い、下ネタを面白おかしく話すとき、絶望的な疎外感を数え切れぬほど味わってきたからだ。

なので、国王に可愛がってもらって、キスやそれ以上のいやらしいことを一杯されたとき、彼女はようやく女の悦びを与えてくれた男として、国王に恋心さえ抱いていた。いや、既に愛してしまったといっただろう。そして、この至福の時間が永遠に続けばいいとさえ思っていたのである。

だから恐ろしくて、自分が穢れ持ちであることを今まで言えなかった。言えば、国王と過ごす至福の時間が永遠に失われるばかりか、ジパングで知り合った友人を全て失いかねないからだ。

だが、ここまできたら本当のことを言わなければならない。強引に種付けされて――それ自体は非常に嬉しいことなのだが――国王が死に至るかもしれないからだ。絶対にそんな事態を招いてはならないのだ。そればかりではない。愛する男に、嘘はつけないのだ。たとえ、どんなに嫌われ蔑まれようと。

彼女は、死刑宣告を待つような気持ちで国王から罵詈雑言を浴びせられるのを待った。だが……

「ふうん、珍しいな。おっ、ビーチクが固くなってるのを発見！」

絶望しながら彼女が真実を口にしたにもかかわらず、国王の態度は変わらなかった。相変わらず彼女の胸や股間を弄り回し、舌を絡めるキスをしてくる。

そんなバカな。有り得ない。自分は、今まで国王を騙していたのだ

から、どのような罰を受けてもおかしくない。それなのに、どうして責められないのか。予想と全く違う国王やみんなの反応に、彼女はかえって疑心暗鬼に陥った。

「どう、して、ばつ、を、あた、え、ない、の、です、か。私、は、穢れ、持ち、なの、です、よ」

彼女は、勇気を振り絞って聞いてみた。おそらく国王は、自分の身体を弄り回すのに夢中で、穢れ持ちであることを聞きそびれたに違いないと思ったからだ。しかし、彼女の予想は大きく外れていた。

「他の男はどうだか知らないが、俺は穢れ持ちの女はむしろ好きだぞ。なんたって、初々しい女が多いからな。俺は、そういう女にこそられるんだ」

だから穢れ持ちだと知ってお前のことをもっと気に入った、と耳元で囁かれた彼女は、今度は嬉し涙が止まらなくなった。ディーナはこの時、一生哲也のことを愛するのだと、固く心に誓うのだった。

第37話 なんと、全裸兵を募ったよ

「いやあ、ハーフエルフの女の子って思っていた以上にいいなあ。モデルみたいなすらりとしたスタイルで、肌は白くてすべすべだもんね。胸はちっちゃいけど、揉んで大きくなるかもしれないという楽しみがあるし」

最近の哲也は、上機嫌だ。ブロンドの長髪で、尖った耳とアーモンド型の釣りあがった瞳が特徴のハーフエルフ、ディーナと毎日のようにいちゃいちゃしているからだ。

報告会と称して、連日お風呂で彼女にキスしたり耳を甘噛みしたり胸を揉んだり身体中を触りまくったりと、彼女の身体を思うがままにいじって満足しているのだ。

それ以外にも、機密事項の打ち合わせをと言って二人きりになり、ベッドの上で彼女の下半身を思うがままに堪能することもある。彼女の甲高いよがり声は、哲也の性的興奮をより一層高める効果があった。

しかも彼女は嫌がるどころか、哲也とのひと時が至福の時だと言うのだ。美少女からそんなことを言われて、嬉しくないわけがないということだ。

そんな哲也だが、気が大きくなったためか、ある時彼女が耳を疑うことを言ってしまう。

「なあ、ディーナに頼みがあるんだけど」

「はい、なんなりと」

「ハーフエルフの女傭兵から、全裸兵を募って欲しいんだ」

「は？全裸兵とはいったい……」

彼女に聞かれて、哲也は得意そうに説明する。

すなわち、全裸兵とは戦場で全裸になって敵兵士を誘惑するのだと待ち伏せして敵を捕らえるもよし、囮となって敵の目を引き付けて大打撃を与えるもよし、上手く使えば重要な戦力になるだろうと。

「だから、頼むよ。なんとか人数を揃えてくれないか」

だが、いくらなんでも出来ることと出来ないことがある。ディーナとて、愛する男の頼みとあれば、全力で応えたいのだが、哲也の頼みはあまりにも無謀で無茶だった。

「はあ……。一応声はかけてみますが、あまり期待されない方がよろしいかと思います……」

彼女は、結果が見えているだけに、俯いて答えるのだった。

哲也が全裸兵の募集をディーナに依頼したという噂は、瞬く間に広まった。

貴族の娘達は、哲也がディーナに飽きたのだと噂しあった。わざと困難な依頼をして、達成出来なければそれを理由に体よく捨ててしまおうとしているのだと。

だが、王妃やメイド達はそんな噂に呆れ果てた。そもそも哲也は彼女に種付けしていないし、飽きれば会わなければ済むことだからだ。わざわざ、そんな姑息な手段を用いるはずがないのだ。

とはいえ、噂を聞いたディーナは大きなショックを受けた。まさかと思いつつも、もしかしたらという気持ちで拭えなかったからだ。

「噂なんていい加減なものだから、大丈夫よ。王様は、一度気に入った女には、決して冷たくしないから」

第三王妃であるアドジンダは、そう言ってディーナを励ました。目に見えて落ち込んでしまった彼女を心配になったからだ。もちろん、下心もあったのだが。

「そうですか。それを聞いて、安心しました。私、王様飽きられてしまったら、一生子供を産めなくなってしまうので、つつい不安になってしまつて」

第三王妃とはいえ、王妃は王妃。下手な貴族の言うことよりも、言葉の重みが違う。王妃から励まされたディーナは、かなり不安が小さくなった。病的に青白くなった顔に、少し赤みが差して元気を取り戻したように見えた。

「まだ声がかからないのは、順番待ちの娘が多いからよ。ただ、よ

り確実に種付けして欲しいのであれば、ヌード鑑賞会に参加する必要があるわね。なんだったら、一緒に参加しない？」

アドジンダの誘いに、ディーナは力強く頷く。最近は常時全裸で生活しているため、ヌードを人前に披露することに心理的な抵抗はなくなっていたのだ。そして翌日から、ヌード鑑賞会に恥ずかしそうな顔をしたハーフエルフの姿が見られるようになるのだった。

ディーナの予想に違わず、全裸兵に応募するハーフエルフは誰もいなかった。考えるまでもなくばかばかしいうえに、聞けば聞くほど酷い条件であることがわかったためだ。

そもそものように兵を運用するのかというと、寝たふりをして敵兵士を待ち伏せし、わざと種付けをさせ、気持ちよく終わって気を抜いた頃を見計らって敵兵士を昏倒させるということだった。

それならば普通に奇襲した方がいいし、わざわざ敵兵士に種付けさせる意味がない。しかも狙い通り種付けしてくれればいいが、怪しいということで拘束されて捕らわれの身になる可能性が高い。そうになると、朝から晩まで種付け三昧という全然嬉しくない未来が待っている。

少し考えただけでハイリスクローリターンなのだから、応募する者がいなくて当然だった。

「……というわけで、残念ながら応募はありませんでした」

ディーナは泣きそうな顔をして哲也に報告する。お叱りを受けるかもしれないと思ったからだ。だが哲也は理由を聞き、なるほど言っ
て納得した。

「そうか、全裸になる必然性が無かったというわけか。それならば、問題は必然性だな。悪いが、何か全裸兵の役割を考えてくれないか」
あくまでも、哲也は全裸兵にこだわっている。

「はあ……。わかりました。時間がかかるかとは思いますが、何か考えてみます」

ディーナは呆れながらも、哲也の頼みを引き受けた。

全裸兵の募集は、傭兵達に少なからず動揺を与える結果になった。現場を知らない者が、あまりにも無茶苦茶なことを言い出し、誰もそれを諫められないことが明らかになったからだ。

その一方で、全裸兵になることを無理強いされることは無かったのだ。ジパング国王はバカだけどそんなに悪い奴ではないという評判が、傭兵の間で大勢を占めるようになっていった。

偉い人がバカなことを言っても戦争は連戦連勝で、占領政策も悪くないので占領地で反乱が起きる気配は無い。傭兵は前線で捨て駒の

ように戦わされることが多いなか、占領地の防衛という楽な仕事をさせてもらっているの、傭兵達に大きな不満は無かった。

もともと占領地では、反抗しそうな若い男は全て兵士として連れ去ったので、反乱が起きるはずもない。そして、男手を失った家には兵士の給料を半分渡したので、飢えて困るような者はいなかった。

ただし、農作業には支障が出ることがわかっていたので、傭兵が交代で作業を手伝った。おかげで傭兵に対する住民感情はすこぶる良好で、特に問題なく占領が行われているところが殆どだった。

国外では、やはり哲也は嘲笑の対象になっていた。

「戦場で兵士を全裸にさせるだなんて、常識知らずにもほどがある」

「所詮は、戦場を知らないということか。あまりに愚かだ」

「しかし、かの国王は好色すぎる。どうしても、女を全裸にしたがるな」

「まあ、全裸の女が好きなのは、男ならば仕方ないでしょう」

「だが、自分がいない所で女を全裸にさせてもしょうがないだろうに」

「本当に、何を考えているのか分からない奴だな」

「もつとも、流石に今頃は無茶なことを言つたと、大いに反省しているだろうな」

「ま、反省するだけなら、猿でも出来るでしょうが」

「ははは、奴は猿以下かもしれないぞ」

国外の貴族達の多くは、哲也のことを貶して見下していた。一部の貴族は、これを欺瞞だと看做した。あえて愚かなフリをして、周辺国を油断させるのが狙いではないかと。

だが、誰一人として予想できないことがあつた。哲也が本気で全裸兵を集める気であつたことと、この期に及んでも、全裸兵を諦めていないことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765i/>

穢れを祓いし王

2011年10月2日08時20分発行